

平成 2 9 年度

兵庫県優秀教職員実践事例集

はじめに

本県では、教職員の意欲・資質能力を向上させ、教育の活性化を図る目的で、日々の学校教育活動において他の模範となる優れた取組を行い、特に顕著な成果をあげている教職員の方々を「兵庫県優秀教職員」として表彰しております。

平成29年度には、平成30年2月、県公館において、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校併せて30名の教職員を表彰しました。

この度、平成29年度に表彰された優秀教職員の優れた取組を広く紹介し、今後の学校教育における取組の参考としていただくために、「平成29年度兵庫県優秀教職員実践事例集」としてまとめました。多くの教職員の皆さんにご活用いただければ幸いです。

目 次

1 小学校

(学習指導、研修・研究活動)

「主体的に取り組める単元づくり～付けたい力を入れ込んだ国語単元構成～」

尼崎市立水堂小学校 主幹教諭 西尾 鮎子 2

「どの子もわかる・できる算数科授業を共に目指して」

伊丹市立桜台小学校 教諭 村上 大介 6

「学校教育目標を具現化する学校行事の年間指導計画」

三田市立富士小学校 教諭 福江 淳 10

「だれもが行きたくなる学校づくりを目指して」

～外国人児童の学力向上とコミュニケーション能力の育成を図り自尊感情を高める～

加古川市立平岡東小学校 教諭 満石 大輔 14

協同的・互恵的な学びを目指した校内研究ノススメ

加東市立社小学校 教諭 松尾 能志 18

伝え合い、描く楽しさを味わう

～おもしろい！もっとやりたい！をめざして～

洲本市立由良小学校 教諭 宮脇 祐子 22

(課題教育(学校保健・食育、特別支援教育、人権教育、防災教育、へき地教育等))

「すべての子供が生きやすい・過ごしやすい、学校・社会をめざして」

～性の多様性を認め合う仲間作り～

伊丹市立伊丹小学校 教諭 岸田 育子 26

養護教諭の専門性を活かした取組

稲美町立天満東小学校 養護教諭 中澤 陽子 30

「外国につながる子ども達とともに」

姫路市立城東小学校 教諭 西野 明美 34

「安全・安心な学校生活を目指した取組」

～子どもたちの命をつなぐ危機対応訓練研修の充実～

姫路市立高浜小学校 主幹教諭 三村 理加 38

学校給食を活用した食育 ～食育は日々の学校給食から～

相生市立双葉小学校 栄養教諭 塩津 順子 42

「生きる力を育む」健康教育

連携・ユニバーサルデザインの視点を取り入れた生活習慣づくり

宍粟市立山崎小学校 養護教諭 山本 路子 46

(職務の工夫・改善)

「学校業務改善の推進と実践」

西宮市立東山台小学校 学校副主幹 北口 郁子 50

2 中学校

(学習指導、研修・研究活動)

「協同的探究学習による“わかる学力”を高める授業づくり」

尼崎市立大庄北中学校 教諭 西前 孝嗣 55

「次世代を担う生徒と後進育成のために～教科等指導員・研究主任として～」

伊丹市立西中学校 主幹教諭 野田 義子 59

「ひょうごつまずきポイント指導事例集に係る授業改善と読書活動推進加配教員としての図書館教育の推進」

明石市立魚住東中学校 主幹教諭 山端 早百合 61

若手教員とともに考えるこれからの技術科教育

三木市立吉川中学校 主幹教諭 梶尾 保 65

豊かな人間関係を育む生徒会活動

神河町立神河中学校 教諭 上月 里香 69

小・中・高の系統性のある英語教育をめざして

朝来市立生野中学校 教諭 藤本 美千代 74

「場面の展開や場面の設定の仕方をとらえて『読む』ことに関するつまずき解消に向けた取組」

丹波市立和田中学校 教諭 西田 美和 78

(課題教育(学校保健・食育、特別支援教育、人権教育、防災教育、へき地教育等))

防災を意識した業務改善

～ 防災教育から「事務をつかさどる」事務職員への変革 ～

多可町立加美中学校 学校副主幹 溝垣 隆宏 82

「生涯を通してたくましくしなやかに生きる子どもの育成をめざす」健康教育の取組

たつの市立御津中学校 養護教諭 嵯峨山 文子 86

中学校における「通級による指導」の取組について

太子町立太子東中学校 教諭 寺内 和恵	・ ・ ・ ・ ・ 90
---------------------	--------------

3 高等学校

(生徒指導、進路指導)

「定時制高校に通う生徒の自立・自律へ向けての取組み」

兵庫県立湊川高等学校 教諭 田口 順一	・ ・ ・ ・ ・ 95
---------------------	--------------

「生徒パーソナルファイル」の構築とその取組について

兵庫県立社高等学校 教諭 西本 高丈	・ ・ ・ ・ ・ 99
--------------------	--------------

「働きながら学ぶ生徒の健康管理と進路実現のために」

兵庫県立洲本高等学校 教諭 上谷 円	・ ・ ・ ・ ・ 103
--------------------	---------------

(課題教育(学校保健・食育、特別支援教育、人権教育、防災教育、へき地教育等))

「未知への挑戦 ―三田祥雲館高校天文部9年間の歩み―」

兵庫県立三田祥雲館高等学校 教諭 谷川 智康	・ ・ ・ ・ ・ 107
------------------------	---------------

学校農業クラブ活動を通した、実践的な教育活動に関する取組み

兵庫県立有馬高等学校 教諭 長光 雅実	・ ・ ・ ・ ・ 111
---------------------	---------------

4 特別支援学校

(課題教育(学校保健・食育、特別支援教育、人権教育、防災教育、へき地教育等))

「自分らしく働く」を目指したデュアルシステム

～障害のある生徒の就労実現を目指して～

兵庫県立西神戸高等特別支援学校 主幹教諭 森川 晃	・ ・ ・ ・ ・ 116
---------------------------	---------------

「12年間を通してのキャリア教育を目指して」

兵庫県立東はりま特別支援学校主幹教諭 越田 典子	・ ・ ・ ・ ・ 120
--------------------------	---------------

※ 所属名、職名はいずれも平成29年度時点のものです。

1 小学校

「主体的に取り組める単元づくり～付けたい力を入れ込んだ国語単元構成～」

尼崎市立水堂小学校

主幹教諭 西尾 鮎子

1 取組の内容・方法

平成 27 年度に阪神地区小学校国語教育研究大会で「学び合い ひびき合う子ども～言語活動（書く力）を生かして伝え合う授業をめざして～」をテーマとして校内の実践公開を行った。単元の目標と最終活動・付けたい力を明確にした授業構成・伝えるために「書く」ことを手立てとして、どのように組み込んでいくかを提案した。

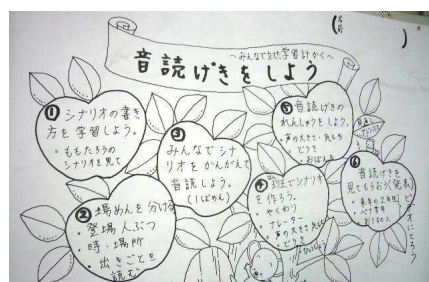
また、平成 28 年度尼崎市教育委員会指定の「国語マイスター教員」に認定され、教育総合センターの研修講座で授業公開や講話を行う機会をいただいている。他校や自校の若手教員へ自身の授業を通して、指導法や授業展開・学級経営のコツなどを発信していくということで、自分なりの考えを見つめ直すよい機会となっている。

これらを通して入口（導入）とゴール（最終活動）を明確にし、児童が学習内容を理解して、主体的に取り組める単元づくりを目標に研究を進めてきた。

(1) 入口とゴールの見える単元構成

① ゴールをはっきりさせる

児童と話し合う中で、最終活動を決める。音読劇、感想文、図鑑、報告文など。その際、最終にできる成果物は「誰かの役に立つもの」であることが重要である。



〔写真1 児童と考えた学習計画表〕

② 相手意識・目的意識

その最終活動が誰に向けたものにするかを考えさせる。(例)

- ・ 下の学年…分かりやすい言葉で書いたり、説明したりする。
- ・ 上の学年…既習事項なので、アドバイスがもらえる。
難しい技法なども採り入れてみる。
- ・ 保護者…調べたことも入れて詳しく書く。

お家の人も知らないことを詳しく知らせる。

相手によって、その単元で付けたい力が変わってくる。教師が児童に付けさせたい力を見極めて、児童と話し合う中で決めることが大切である。

③ 意欲を持たせる入り口を（導入の工夫）

ゴールが決まれば、入口（導入）を考える。前学年で作った見本を提示したり、または教師が作成したビデオや文を見せたりすることで、児童の「やってみたい」「これならできそうだ」という意欲を高める。良いものだけでなく、教師が作成した悪いモデル文も提示し比べることも、児童に学習のポイントを意識させるのに効果的である。



〔写真2 前学年が作った「じどう車ずかん」〕

④ 児童と考える学習計画

モデルの成果物を見せた後、「じゃあ、明日もう作れるね」と投げかけると、一様に児童は「無理」と答える。そこからゴールに向けて必要な学習活動は何か考えさせられる。

(例) 音読劇がゴールの場合

劇の練習・セリフの練習・シナリオ作成・役割分け・場面分けなどが挙げられた。

⑤ 学習計画に「付けたい力」を入れ込む

～指導要領の目標から～

セリフの練習→登場人物

→登場人物の行動を中心に読むこと〈読む(1)ウ〉

シナリオ作成→ナレーター・役の分担

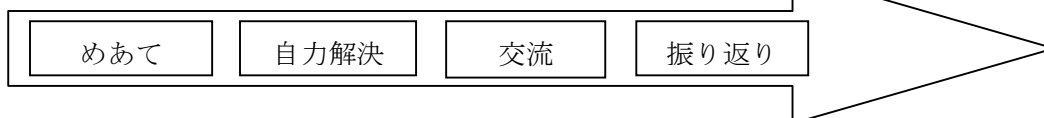
→地の文と会話を分ける→誰のセリフか

→主語・述語の関係に注意すること〈伝言イ(カ)〉

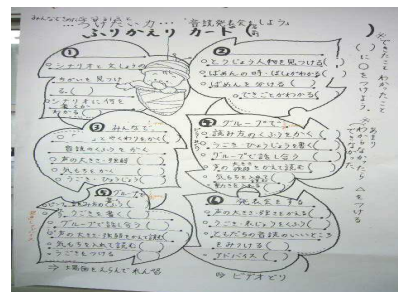
→「 」の使い方を理解すること〈伝言イ(オ)〉

学習計画と付けたい力に対応したふりかえりカードを使用し、毎時自己評価させる。その1時間にどんな学習活動を行うか、どんな力を付けるためか、児童が意識することができる。

(2) めあて・振り返りの徹底と児童司会



本校では、全学級で上記の授業スタイルに統一している。【自力解決】では、自分の考えを持つために「書くこと」を取り入れ、【交流】、ペアトーク・グループトーク・クラストークでは、書くことで持てた自分の考えを友達の意見と比較することにより、広げたり深めたりする。【振り返り】では、めあてに照らして、達成できたか・できるようになったこと・次の学習でしたいことなどを書く時間を確保している。本学級では、本時のめあては学習計画や付けたい力をもとに、司会を中心として児童が考える。話し合いの進行や板書・振り返りのまとめも児童司会が行っている。

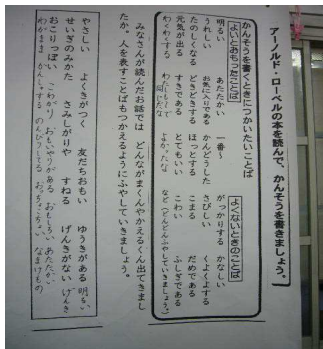


〔写真3 ふりかえりカード〕



〔写真4 学習のめあてと付けたい力を発表する児童司会〕

(3) 並行読書 図書館の活用



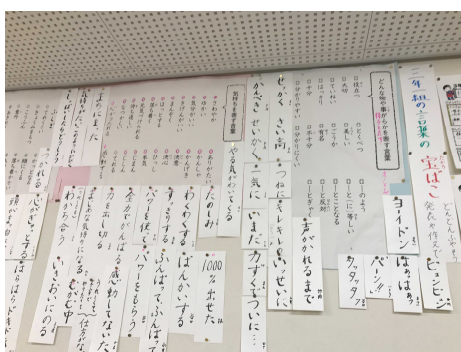
〔写真5 感想や人柄を表現する語彙表〕



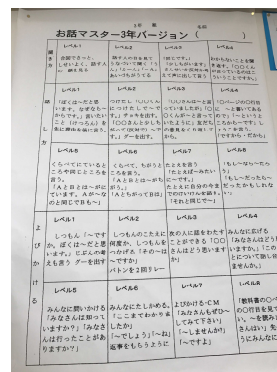
〔写真6 シリーズ本の読み比べ〕

尼崎市内の小学校には、各校に図書司書教諭が一人配置されている。司書教諭と連携を取り、同じ作者の本、同じシリーズの本、同じテーマの本などを並行読書できるよう、教室に配置したり、図書室で紹介したりすることができる。同じシリーズの本の読み比べでは、登場人物の性格や人物相互の関係をつかみやすくすることをねらっている。教科書の単元のまとめのページに載っている本は、すべて購入し、図書室に配架している。また、国語に限らず、理科や社会でも関係のある事柄の本を教室に置くことで、関心を持たせたり、知識を広げたりすることをねらっている。

(4) 教室環境整備



〔写真6 言葉の宝箱（語彙の揭示）〕



〔写真7 お話マスター（話型表）〕

教科書に掲載されている語彙表に加え、児童が作文や発表の中で用いた表現や語句を分類して掲示している。それを参考に作文や物語を書く児童の姿も見られる。また、手元や教室掲示で話型表を常に見られるようにすることで、結論・比較（相違・共通）・例示・仮定などの思考の型を意識させて発表や話し合いをさせることができている。理科や社会等でも思考を深めるために有効である。

(5) カリキュラムマネジメント～教科横断化

国語と他教科を関連付けた単元構成を意識している。

例：国語「ありの行列」の学習の最終活動を理科の磁石実験の報告文とし、問い・実験・結果・考察を文章でまとめる。

- ・ 国語「すがたを変える大豆」を総合で調べた「すがたを変える尼いも」に書き換える。

- ・ 「伝えよう私たちの学校生活」と合わせ、ポスターセッションで他校と交流する。
- ・ 国語の「しりょうからわかる小学生のこと」と算数の「表とグラフ」を合わせて、自分たちの実生活から統計を取ってグラフにし、分析して発表する。

2 取組の成果

(1) 単元構成について

- ・ 一年間を通して、単元計画表をほぼ毎回作り、最後のゴールを明確にすることで、今日の一時間の学習を何のためにやっているか、児童自身が分かっていた。
- ・ 単元のゴールには、成果物を残し、図書室に置いたり、保護者に読んでもらってコメントをもらったりできたため、達成感が持っていた。

(2) めあてと振り返りについて

- ・ めあてや付けたい力を単元計画表に入れ込んでいて、児童司会が毎時間読み上げることで、児童の意識に残った。
- ・ 学習計画表を作っていない小単元や他の教科の授業においても、めあての文言も自分たちで考えるようになってきた。
- ・ 振り返りに観点を持たせることで、今日のめあてに即したもののや次の学習にしたいことを書けるようになってきた。

(3) 語彙・話型指導について

- ・ 教室に掲示していた言葉の宝箱（友達の良い表現集）を見ながら、気持ちや様子を表す言葉を文章に取り入れていた。

(4) 教科横断化について

- ・ 理科で実験したことを報告文の形式に書き直させることは、実際に自分で問い→予想→実験方法→結果→考察（考え）を理科の実験で立てているので、容易であった。その考えの道筋ごとに段落にし、接続詞をつけることで報告文を簡単に書くことができた。
- ・ 児童と学習計画を立てるときに、最終活動を「実生活につながること」として、他教科で学習していることや行事などと結びつけることが多かったため、児童からも「社会科で調べたことを国語で発表したい」などの意見が多く出るようになってきた。理科や社会、算数、総合と国語をリンクさせることで、国語で学んだことを実生活に生かす活用（深い学び）ができたのではないかと。

3 課題及び今後の取組の方向

- ・ 今後、総合的な学習の時間については、国語等の教科と深く連携していくということも考えていきたい。また、どの教科も言語活動をベースにして考えを深めたり伝えたりすることが必要な点で、さらに国語で身に付けさせたい力をリンクさせた教科横断的な単元構成を考えていくことが求められていると思う。
- ・ まず、自校での若手研修を中心に学習計画の作成や児童司会などの提案を広めていきたい。個人の取組でなく、学校全体で同じ方向を目指すことで、児童の主体的に学習に取り組む力や言語力が定着させられる。職員間で考えを共有できるよう機会を設けていきたい。

「どの子もわかる・できる算数科授業を共に目指して」

伊丹市立桜台小学校
教諭 村上 大介

1 取組の内容・方法

平成 18 年度から 2 年間、伊丹市教科等指導員（小学校算数）、平成 22 年度から 4 年間、県教委教科等指導員（小学校算数）を担当させていただいた。また、平成 21 年度からは、夏季休業中に算数・数学の研修会を持ち、参加者と授業力向上に向けて共に学んできた。以下に、これらの研究と自校で研究担当として取り組んできたことを掲載する。

2 算数・数学研修会を通して

(1) 算数・数学スキルアップ講座について

平成 21 年度から平成 29 年度現在まで毎年夏に小学校・中学校の教員を対象にして、算数・数学について 1 日学ぶ研修会を発足させた。

講師には愛知教育大学名誉教授、志水廣先生をお迎えし、主に○付け法、音読計算を中心に算数・数学の授業における個別の支援方法と、授業改善について学んできた。

内容については

- ① 講演
- ② 教材研究
- ③ グループで模擬授業
- ④ 全体で模擬授業

を小学校・中学校に分かれて行ってきた。

【写真 1】 受講風景



【写真 2】 模擬授業風景



(2) ○付け法・音読計算について

・ ○付け法による机間指導

志水廣先生に教わった手法で、上記の写真 2 のように、子供たちの中に入り、机間指導を行う。共感が得られた部分は以下の点だと思われる。

- ① 答えが合っているか、合っていないかを○付けするのではなく、すべての子に声をかけて回る。（1 回の授業で 1 回は声かけができる）
- ② できているところまでを○付けする（部分肯定する）。
- ③ 児童の考えをその場で認めることができる（指導と評価の一体化）

3 研修会を通して学んだことを自校の研究担当、新学習システム（算数）として

- (1) 本校は今年度から、研究教科を「算数科」とし、研究テーマを以下のようにした。

自ら進んで学びを積み重ねていく子供の育成
～「振り返り」を大切にした「わかる」「できる」実感のある授業づくり

- (2) テーマ設定の理由

- ・ 成功体験を感じさせるためには、授業の結末場面が大切である。
- ・ 「わかる」「できる」実感を生むのは、「振り返り」場面である。そこで、自分の学びを文章や会話などで表現させることで、学びに対するメタ認知を促す。
- ・ 「振り返り」は「めあて」に正対しなくてはならない。教師がゴール（付けたい力）を意識して授業を行うことで、授業の質は向上する。

- (3) 取組

ア 児童が、どういう振り返りを書けば良しとするのか。

- ・ 4月当初、子供たちには、
 - ① 今日の授業で分かったこと（めあてを見直して）
 - ② 友達の意見で良かったと思ったこと（自分の意見と比べて）
 - ③ 感想（授業の中で心に残ったことや、もっと知りたいと思ったこと）の3点について書くように伝えていた。

イ どの学年でも書きやすくなるように児童に書く視点を与える。

「わ・た・が・し」の視点

- ・ 研究を進めていく中で、視点の提案をした学年があり、校内でも取り入れるようになってきた。

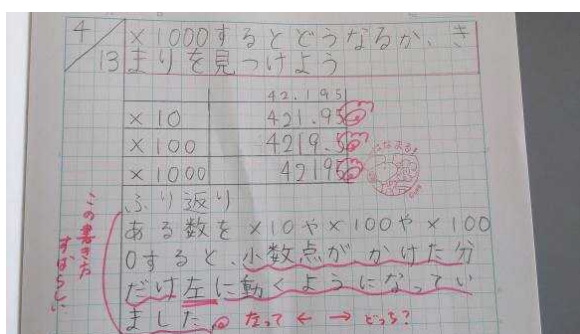
「わ」・・・わかったこと

「た」・・・楽しかったこと

「が」・・・がんばったこと

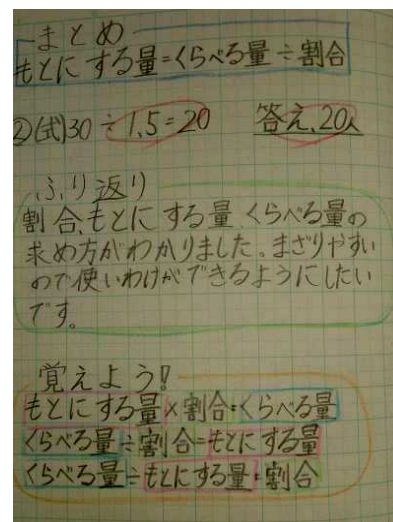
「し」・・・さらに知りたいこと

【写真4】 児童のノート1



4月当初は、めあてに対しての振り返り中心だった。

【写真5】 児童のノート2



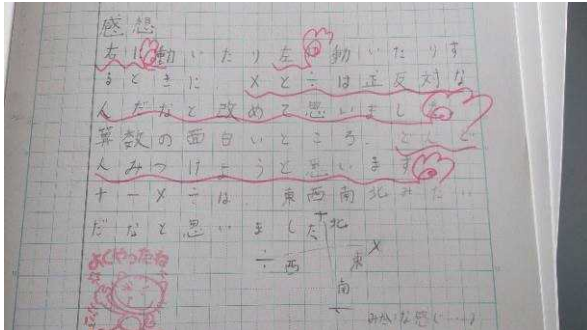
3学期は「まとめ」→「練習」→「振り返り」の流れになってきた。

ウ 振り返りへの返事のコメントを充実させる。

児童が振り返りをより深いものにするためには、教員側のコメントも大事になる。5・6年の算数の立場を4年、転勤して5年の算数のみを2年間したが、1クラスの半分の人数を見る良さを生かし、ノート指導に力を入れた。特に振り返りに関しては何行も書き込みを行い、子供に合わせて練習問題を書いたり、発展問題を書い

たりした。

【写真6】 児童のノート3



「学校教育目標を具現化する学校行事の年間指導計画」

三田市立富士小学校

教諭 福江 淳

1 取組の内容・方法

各学校では、儀式的行事から勤労生産・奉仕的行事まで、様々な種類の行事が実施されている。本校でも、子供たちが集団への所属感や連帯感を感じたり、協力してよりよい学校生活を築こうとしたりすることができるよう、学校行事を計画、実施してきた。しかし、学校行事の在り方については、「形式的になっている」「多忙化の中で精選が必要」「行事をする意義や価値が見い出せない」など、改善を求める意見が出されていた。

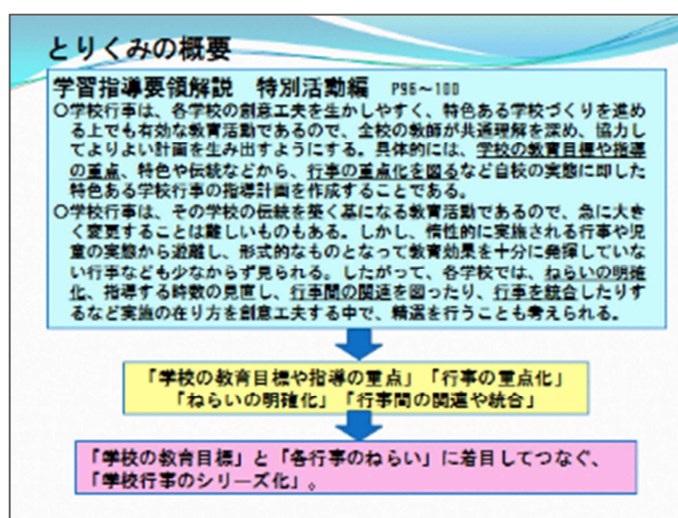
そこで、実施することが前提となっていた学校行事を、その年間指導計画を改めて作成する作業を通して見直すことにした。

(1) 学習指導要領における学校行事の年間指導計画

学習指導要領の解説には、年間指導計画の作成について「学校行事は、各学校の創意工夫を生かしやすく、特色ある学校づくりを進める上でも、有効な教育活動であるので、全校の教師が共通理解を深め、協力してよりよい計画を生み出すようにする。具体的には、学校の教育目標や指導の重点、特色や伝統などから、行事の重点化を図るなど自校の実態に即した特色ある学校行事の年間計画を作成することである。」と記されている。

また、「学校行事は、その学校の伝統を築く基になる教育活動であるので、急に大きく変更することは難しいものもある。しかし、惰性的に実施される行事や児童の実態から遊離し、形式的なものとなって教育効果を十分に発揮していない行事なども少なからず見られる。したがって、各学校では、ねらいの明確化、指導する時数の見直し、行事間の関連を図ったり行事を統合したりするなど実施の在り方を創意工夫する中で、精選を行うことも考えられる。」と記されている。

ここに見られる課題解決に繋がるキーワードは、「学校の教育目標や指導の重点」「行事の重点化」「ねらいの明確化」「行事間の関連や統合」である。儀式的行事から、勤労生産・奉仕的行事までの5種にまたがり、始業式、入学式から、運動会、音楽会、修学旅行、卒業式まで、多種多様に行われている行事を、「学校教育目標」とそれぞれの行事が持つねらいに着目することで両者の接点を見つけ、繋ぐことができると考えた。これまで点のように散らばっていた学校行事を、学校教育目標を縦軸に、各行事のねらいを横軸にして織りなす「学校行事のシリーズ化」という着想を得た。

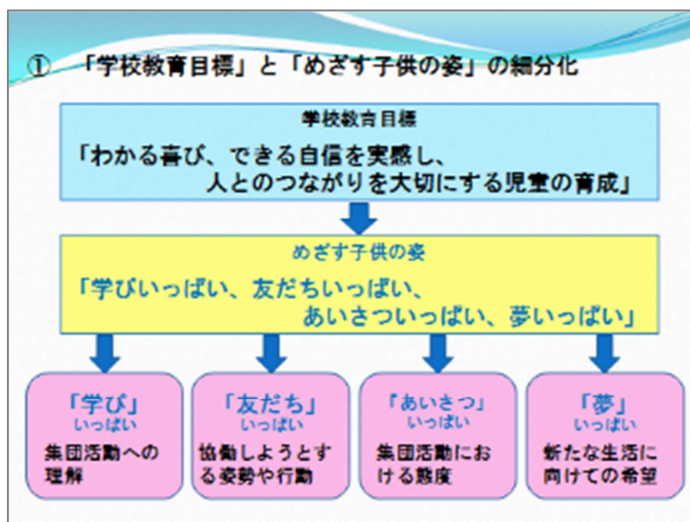


(2) 学校行事のシリーズ化

① 「学校教育目標」、「めざす子供の姿」の細分化

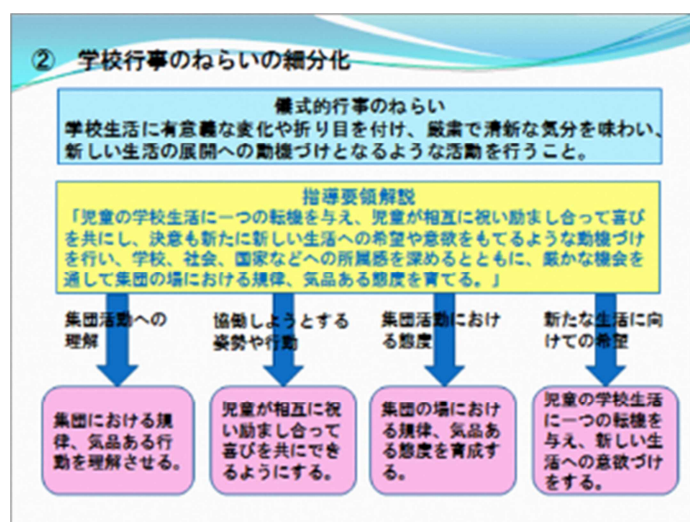
学校行事のシリーズ化に向けて、私たちは「学校教育目標」と「めざす子供の姿」を細分化する作業から始めた。

本校の「めざす子供の姿」は、「学びいっぱい、友だちいっぱい、あいさついっぱい、夢いっぱい」である。それらを「学び」「友だち」「あいさつ」「夢」に分ける。これらを縦軸とする。ここで念頭に置かなくてはならないのは、これらの4つの項目を一般化する作業だ。「めざす子供の姿」は学校で独自に考えられた端的な言葉なので、それを分割しただけでは、付けたい力が見えてこない。そこで、本校の「めざす子供の姿」のキーワードとなっている「学び」「友だち」「あいさつ」「夢」を、それぞれ「集団活動への理解」、「協働しようとする姿勢や行動」、「集団活動における態度」、「新たな生活に向けての希望」と置き換え、付けたい力として一般化することにした。



② 学校行事のねらいの細分化

次に、学校行事のねらいを細分化する作業に取り組んだ。学習指導要領の解説では儀式的行事のねらいについて、「児童の学校生活に一つの転機を与え、児童が相互に祝い励まし合って喜びを共にし、決意も新たに新しい生活への希望や意欲を持てるような動機付けを行い、学校、社会、国家などへの所属感を深めるとともに、厳かな機会を通して集団の場における規律、気品ある態度を育てる。」と書かれている。このねらいを、先ほど一般化した「集団活動への理解」「協働しようとする姿勢や行動」「集団活動における態度」「新たな生活に向けての希望」という観点に基づき、「集団における規律、気品ある行動を理解させる」こと、「児童が相互に祝い励まし合って喜びを共にできるようにする」こと、「集団の場における規律、気品ある態度を育成する」こと、「児童の生活に一つの転機を与え、新しい生活への意欲付けをする」ことに分けた。こ



の作業を他の4種の行事についても行うことで、学習指導要領に明記された学校行事のねらいを本校の「めざす子供の姿」で細分化することができた。

③ 「めざす子供の姿」と学校行事のねらいで織りなした学校行事のシリーズ化

そして「めざす子供の姿」を「学び」「友だち」「あいさつ」「夢」の各シリーズとして縦軸に、細分化された学校行事のねらいを行事の種類ごとに横軸にして、紡ぐように織りなし、学校行事のシリーズの枠組みを作った。

最後に、これまで実施してきた各行事の特性を考慮し、枠組み内に位置付け、各行事のねらいを見直すとともに、並行して実施される各教科、領域の指導内容や時期、行事の配当時数を考慮しながら、年間指導計画に仕上げた。



学びいっぱいシリーズ

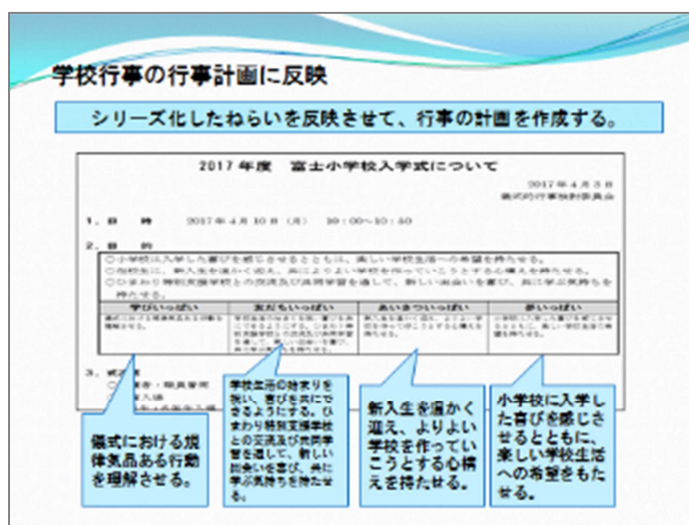
富士小学校行事年間指導計画（一部）

学校目標 めざす 子ども像		わかる喜び、できる自信を実感し、人とのつながり			
めざす子供の姿		学びいっぱい		友だちいっぱい	
儀式的行事		入学式、卒業式、修学旅行、交通安全教室	入学式、卒業式、修学旅行、交通安全教室	入学式、卒業式、修学旅行、交通安全教室	入学式、卒業式、修学旅行、交通安全教室
文化的行事		大運動会、音楽会、芸術鑑賞、読書会	大運動会、音楽会、芸術鑑賞、読書会	大運動会、音楽会、芸術鑑賞、読書会	大運動会、音楽会、芸術鑑賞、読書会
健康安全・体育的行事		体育祭、交通安全教室、防災訓練、避難訓練	体育祭、交通安全教室、防災訓練、避難訓練	体育祭、交通安全教室、防災訓練、避難訓練	体育祭、交通安全教室、防災訓練、避難訓練
遠足・集団宿泊的行事		遠足、集団宿泊、修学旅行	遠足、集団宿泊、修学旅行	遠足、集団宿泊、修学旅行	遠足、集団宿泊、修学旅行
勤労生産・奉仕的行事		勤労体験、ボランティア、社会奉仕	勤労体験、ボランティア、社会奉仕	勤労体験、ボランティア、社会奉仕	勤労体験、ボランティア、社会奉仕
児童会行事		児童会活動、委員会活動	児童会活動、委員会活動	児童会活動、委員会活動	児童会活動、委員会活動
一学期	4月	入学式、始業式、交通安全教室	入学式、始業式、交通安全教室	入学式、始業式、交通安全教室	入学式、始業式、交通安全教室
	5月	体育祭、音楽会、芸術鑑賞	体育祭、音楽会、芸術鑑賞	体育祭、音楽会、芸術鑑賞	体育祭、音楽会、芸術鑑賞
	6月	修学旅行、交通安全教室	修学旅行、交通安全教室	修学旅行、交通安全教室	修学旅行、交通安全教室
	7月	夏休み、交通安全教室	夏休み、交通安全教室	夏休み、交通安全教室	夏休み、交通安全教室
二学期	8月	始業式、交通安全教室	始業式、交通安全教室	始業式、交通安全教室	始業式、交通安全教室
	9月	大運動会、音楽会、芸術鑑賞	大運動会、音楽会、芸術鑑賞	大運動会、音楽会、芸術鑑賞	大運動会、音楽会、芸術鑑賞
	10月	読書会、交通安全教室	読書会、交通安全教室	読書会、交通安全教室	読書会、交通安全教室
	11月	音楽会、交通安全教室	音楽会、交通安全教室	音楽会、交通安全教室	音楽会、交通安全教室
	12月	修学旅行、交通安全教室	修学旅行、交通安全教室	修学旅行、交通安全教室	修学旅行、交通安全教室

(3) シリーズ化した学校行事の年間指導計画の活用

シリーズ化された年間指導計画は、行事の計画を作成するときに活用している。行事の案を立てるときに、シリーズ化した年間指導計画をもとにねらいを定め、活動の内容や方法を検討している。右図は、入学式での行事計画の案だ。「学び」「友だち」「あいさつ」「夢」の4つの観点でシリーズ化したねらいを記載している。

また、細分化された学校行事のねらいと、学年の目標との共通点を見出し、関連付けながら一連の行事として行う「テーマ化」にも活用している。

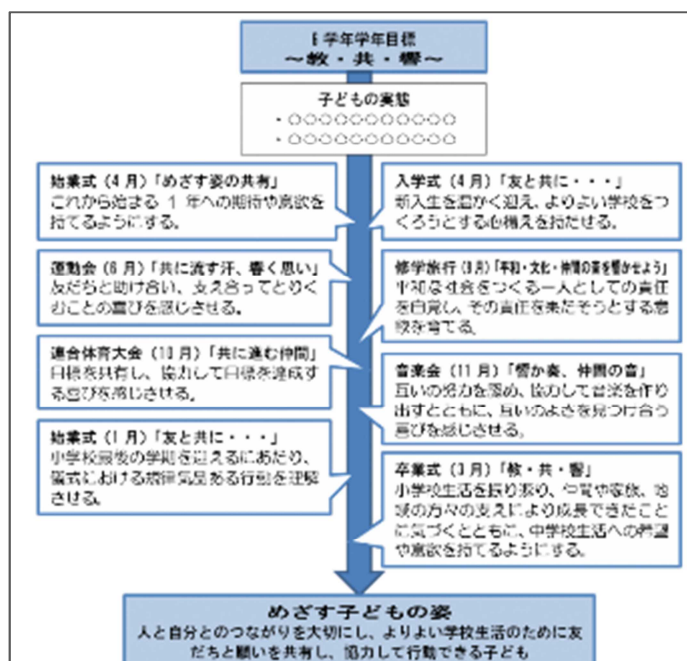


2 取組の成果と課題および今後の取組の方向

このようにシリーズ化された学校行事の年間指導計画を作成することにより、点になって散らばっていた学校行事が「めざす子供の姿」を通して織りなされ、その行事を通して特に付けたい力や、行事間の接続を見通し、計画的に指導が出来るようになったという利点がある。しかし、シリーズ化した年間指導計画の枠組みに、行事を漏れなく当てはめ、羅列しただけのようにも思える。1つの行事を、4つのシリーズに分割して行っているように見えるからだ。今後、「各行事のねらいや特性を踏まえ、関連や統合を図る」こと、「子供の発達段階や学年目標に即した重点化を図る」こと、「日常の教育活動の成果が発揮される学校行事の年間計画」にすることなど、シリーズ化された年間指導計画を用いながら、取組を進めていかななくてはならない。

さらに、評価方法も課題である。行事が実施されるたびに行われてきた、これまでのアンケート式の評価にとどまらず、児童が自分自身を振り返り、その成長を感じ、今後に生かせるよう、「キャリアノート」を活用した評価を行う必要がある。

また、行事間の関連を図りながら効果的な指導ができていたのか、シリーズ化そのものについても評価を行うことで、今後、より効果を高められるのではないかと考える。



「だれもが行きたくなる学校づくりを目指して」
～外国人児童の学力向上とコミュニケーション能力の育成を図り自尊感情を高める～

加古川市立平岡東小学校
教諭 満 石 大 輔

1 取組の内容・方法

(1) 取組にあたって

本校は外国籍の児童が多いという特徴がある。人数は約20人で外国にルーツをもつ児童も合わせると30人を超える。の中には、自分自身を特異な存在と思い込み、自尊感情が低くなっている外国人児童もいる。経済的な事情や保護者の日本語理解の不十分さにより家庭学習が困難な児童、両親とも母国語を使っている会話のため保護者への連絡がつきにくい家庭、文化の違いで家庭間でのトラブルがある家庭など様々な問題がある。外国人児童以外にも言えるが、日本語での言い回しや、使い方が分からずに、友だちとの誤解が生じて喧嘩になることもあった。こういったことから、学習の中で、相手に自分の思いを上手く伝えるためのコミュニケーション能力の育成、つまり「ことばの力」の向上を目指す日本語教育が必要であると考えられる。また、外国人児童には、将来の夢を膨らませることができるように、世界のいたるところで活躍している外国人がいるグローバル化社会が進んでいることを知らせ、自国への誇りをもち、たくましく生きていけるような多文化共生教育に取り組んでいく必要がある。

本校は、平成26年度から3年間、兵庫県教育委員会から「日本語指導研究推進校」の指定を受け、大阪教育大学教育学部准教授臼井智美氏の指導助言を基に、「教科指導型日本語指導」の研究を進めている。そこで、研究推進委員会では、『自ら学び 共に伸びる子の育成』を学校教育目標に掲げ、相互に思いを伝えあえる力、コミュニケーション能力の育成を図ることで、学習面と生活面の両方に効果があると仮説を立て、日本語で学び合う教科指導型日本語指導を研究課題に設定した。その指導方法と学習効果、組織力を生かした校内指導推進の成果を以下に示す。

(2) すべての児童にとって分かりやすい授業づくりのための「教科指導型日本語指導」

日本語には、生活言語と学習言語の2種類がある。生活言語は自然習得が可能であるが、学習言語は教科の中で教えていくため、自然習得は困難である。例えば、「とる」という生活言語は、通常「ものをとる」という意味に使われる。しかし、学習言語としての「とる」は次のように使われることがある。

社会科 豊臣秀吉が、 <u>天下をとる</u> 。	国語科 <u>帽子をとる</u> 。
算数科 辺ABに垂直な点Cを <u>とる</u> 。	

同じ「とる」という言葉でも、「制覇する」「(点を)うつ」「脱ぐ」などの意味があり、外国人児童は混乱してしまう。外国人児童だけでなく、日本人児童の中でも「日本語指導」が必要な児童はたくさんいると考えられる。臼井准教授の推進している「教科指導型日本語指導」とは、教科指導を通じて『日本語で学ぶ力』を育成する指導法である。「日本語の習得」を意識して、「ことばの力」を身につけさせることを目標に、外国人児童だけでなく、日本人の児童も含めたすべての児童（以下、日本語指導が必要な児童という）にわかる授業をめざすものである。言い換えればユニバーサルデザイン的な授業である。

教科指導型日本語指導の特徴としては次のようなものがある。

① 日本語の目標

本時の授業で具体的にどんな日本語がわかるようになってほしいのか、使えるよう

になってほしいのかを明確にするもの。

ア) 本時の教科用語の意味がわかる。

各教科の学習活動を通じて理解させるために、教科の具体的な学習活動を通じて、ことばの意味を“体得”させていく。

イ) ある表現を習得して、自分の意見や思考のプロセスを言う(or 書く)ことができる。どの教科の学習でも共通して必要になる単語や文章。1つは流れが理解できるための単語や文章。ex.)「まず、次に、だから」等の順序を表すことばなど。もう1つは発問と応答のパターンとなる言い回し。

ウ) 語彙を増やす(表現力を育てる)。

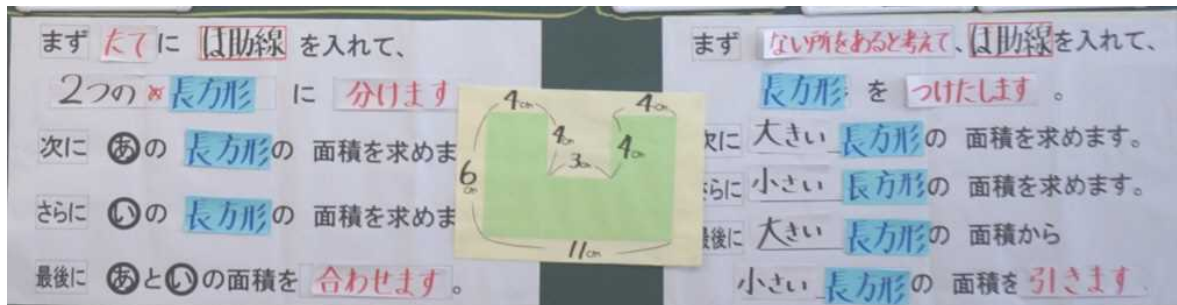
類義語を意図的に示したり、別の表現を例示したりして、同じ内容でもふくらませて表現できるようにする。

② 本時の目標を達成するための3つの支援

- ・理解支援…言葉での説明を減らし、日本語や学習内容の理解を促す支援(⇒わかる)。
- ・表現支援…日本語で自分の考えや気持ちを表現できるように促す支援。板書やワークシートに話形や言葉以外の表現方法などを提示し、それを基に自分の意見の根拠まで述べられるようにする(⇒使う)。
- ・記憶支援…語彙や表現の記憶を促す支援。学習言語を定着させるため、ワークシートに大切な言葉を書き込んだり、何度も声に出して反復したりする。学習言語に触れる機会を多く設けることを意識して授業を進める(⇒覚える)。

③ ターゲットセンテンス

本時の「教科の目標」を達成する上で、教師の説明上不可欠となる日本語表現で、授業中に何度も登場する言葉のことで、その定着のためには、板書や発問を工夫する必要がある。



【▲ 4年生算数科「面積」話型にあてはめた書き方を工夫し、視覚的な理解を促す掲示】

(3) すべての児童のための多文化共生教育

子ども多文化共生センターや加古川市国際交流協会と連携を図り、世界の異なる文化や習慣に関心を持ち、互いの違いを認め合い、理解しようとする態度の育成を目指した多文化共生教育に取り組んだ。

他にも、全校生を対象に、ハロウィンパーティーやクリスマス会など、関係機関と連携した取り組みを展開することができた。



【世界の国々を知る活動の様子(3年生)】

(4) 学校をあげた人権意識向上への取組

「一人一人を大切にし、差別や偏見をなくし、互いに尊重し合う態度の育成」を目指し、人権教育に焦点を当てた社会科学習を行った。学習では、同和問題を中心に引き上げ、正しい理解のもと、差別解消に向けた態度の育成に向けて、35時間実施した。また、人権学習を行う側の教師自身の人権意識を高めていく目的で、人権職員研修を年間5回行った。



【自分の思いを話し合う様子】



【授業の様子】

2 取組の成果

(1) 校内授業研究の充実

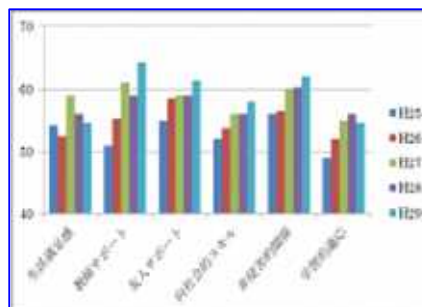
教科指導型日本語指導の推進4年目を終え、国語科、社会科、算数科、理科、道徳と様々な教科で、「教科指導型日本語指導による授業づくり」に挑戦する教師が増えてきた。また、専科部会でも音楽科、体育科、図工科と技能教科でも研究を進めることができている。年間4回、臼井准教授を招聘し、学びの場を設定している。職員による学校園評価の「校内研究」の項目では、平成26年度40名中8名がA評価「よくできている」だったのが、平成29年度には、40名中33名がA評価をした。このことから、充実した研究が進められてきたことが分かる。

(2) 学校環境適応感尺度（アセス）の活用

加古川市は、平成25年度から「学校環境適応感尺度（アセス）」のアンケートを導入している。児童に34項目のアンケートを実施し、データ入力すると6つの因子で適応度が分かるアンケートである。6つの因子とは、生活満足感・教師サポート・友人サポート・向社会的スキル・非侵害的関係・学習的適応である。個人表に偏差値で表した数値とレーダーチャートが表示される。

数値が40未満の児童は支援を要するという結果になり、児童内面理解のためのアセスメントができ、問題に対しての早期発見、早期対応につながる。50あれば平均であり、満足感があるといえる。次に示したのは、平成25年度から29年度、過去5年間の本校6年生児童の平均値の表とグラフである。

	生活満足感	教師サポート	友人サポート	向社会的スキル	非侵害的関係	学習的適応
H25	54.2	51	55	52	56	49
H26	52.5	55.25	58.5	53.75	56.5	52
H27	59	61	59	56	60	55
H28	56	59	59	56	60.3	56
H29	54.6	64.3	61.3	58	62	54.6



【平成25年～平成29年 5年間のアセス平均（6年生）表左とグラフ右】

学習的適応に注目してみると、平成25年度と比べ、児童自身が学習できていると感じ

ている数値（学習的適応）が年々かなり向上してきていることが分かる。それに連動して他の因子も向上が見られる。

（３）日本語指導教室で学習する児童の変容

昨年度２学期当初来日１ヶ月のペルー国籍Ａ児が転入して来た。学習面はほぼ取り出し指導で、ひらがな、カタカナ、漢字、計算を１年生から学習する初期の日本語指導を行った。多文化共生サポーターとの連携もあり、Ａ児は、スポンジのように学習内容を吸収して、日々、コミュニケーション能力も向上している。本年度は、教室で学習することができる教科が増え、理科担当が授業を公開した時も、難しい教科用語を発表する成長した姿が見られた。



【平岡東小学校の学習支援図】

また、週１・２回日本語指導教室で学習している児童が数名いるが、取り出しで先に進んで、学級での学習に臨むことで、自信をもって発表することができるようになったり、単元テストの結果がよくなったりしたとの報告が学級担任の先生から寄せられた。

３ 課題及び今後の取組の方向

地域や同級生の保護者と距離を置き、孤立してしまっている外国人家庭もある。月曜日や家族の誕生日、雨の日などは必ず欠席する児童や不登校傾向の改善が見られないまま卒業した児童もいる。外国籍の児童生徒は義務教育制度が適応されないため、本人や保護者の意思で中学校入学を拒否した児童もいた。このように外国人児童を取り巻く環境は非常に厳しい。小学校入学時ガイダンスの充実など、制度面の早急な対応も必要である。外国人児童と保護者には、誰も知らない異国の地で生活しなければならないというストレスがある。様々な問題を抱えて通ってきている彼らの問題は、大きな人権課題でもある。



【日本語指導教室での様子】

また、外国人児童を含むすべての児童に対して行っている国際理解教育や人権学習の課題もある。同和問題を核にして、外国人問題や障がい者問題など様々な人権課題に目を向け、自分ごととしてとらえることができたが、さらなる人権意識の向上及び実践力につなげるためには、今後も継続した取組が必要であると感じている。

すべての児童が共に学べる、人権教育を進めていくためには、外国人児童、保護者を取り巻く様々な問題解決が不可欠である。生活背景を知り、困り感を聴き、寄り添うことでお互いの信頼関係が生まれる。そうすることで、本当の意味での多文化共生教育が進められると考える。日本語指導とは、人権課題である。前述した課題を地道に解決し、研究推進委員会や研修担当がスクラムを組んで、職員間の技術、指導の伝達を密におこない、校長、教頭のリーダーシップのもと、児童に何を学ばせるのか、どのように学ばせるのか、何のために学ばせるのか、という意識を教職員全員がもって授業づくりを進めることで、外国人児童を含めた未来あるすべての児童の学力向上、心身ともに健全な成長へと研究を還元していきたい。この取り組みを常に改善を加えながら継続していくことが「だれもが行きたくなる学校づくり」につながっていくことを願っている。

協同的・互恵的な学びを目指した校内研究ノススメ

加東市立社小学校
教諭 松尾 能志

1 取組の内容・方法

(1) 児童の実態と「協同学習」

教科書を広げても、内容に意味を見出せず、教材とつながれずにいる児童。「近くの人と話し合ってね。」と指示しても、誰とも関わろうとせず、仲間とつながれずにいる児童。このような、学びの土俵に乗れない、乗っても途中で降りてしまう「困り感」をもっている児童が多く存在するのが本校の現状である。

しかし、学習上の得意・不得意があり、お互いに態度や性格が違うからこそ、お互いを知り、理解しようとするのが大切である。児童に、教材を介して仲間と学ぶ喜びを感じさせたい。さらに、自分の学びが仲間の役に立ち、仲間の学びが自分の役に立つという経験を積み重ねさせたい。そうすることで、自分のためにも、仲間のためにも真剣に学ぶ児童を育成したい。

そこで、「協同学習」の理念を取り入れ、人と関わることと、学習に対する主体性を高めることで、学びへの意欲を高めようと考えた。「できる喜び」「分かる喜び」「学び合う喜び」は、さらなる学びへの意欲へとつながっていく。さらに、人と関わる力を高めることで生涯にわたって円滑な人間関係を築く基盤にもなると考えた。

信頼に支えられた学級経営を基盤として、児童が相互に学び合い、自分の学びに責任をもって学習するとき、困り感をもつ児童も含め、全ての児童の学びが深まると考え研究がスタートした。研究テーマは、「協同的・互恵的な学びの構築」である。

(2) 校内研究を推進

① 個人研究テーマの設定

本校では、研究教科を絞っていない。そのため、各自で研究がしたい教科を選択する。その後、「教科部」チームを編成する。しかし、この場合、それぞれのチームが、どのように研究を進め、どのようにまとめるかが課題となってくる。そこで、研究テーマをもとに個人で研究テーマを設定することを提案した。いわば、「実践マニフェスト」である。個人テーマを作成するにあたっては、「ロジックツリー」のツールを使って作成することにした。ロジックツリー（図1）は、「思考の過程を視覚化しやすい」「協同で作成することが可能である」という点で有効であると考えたからである。「思考の過程を視覚化しやすい」については、問題解決に活用されるロジックツリーの中でも「HOWツリー」を使って、個人テーマを作成している。そのため、個人テーマを解決するために「どうやって？」と思考しながら

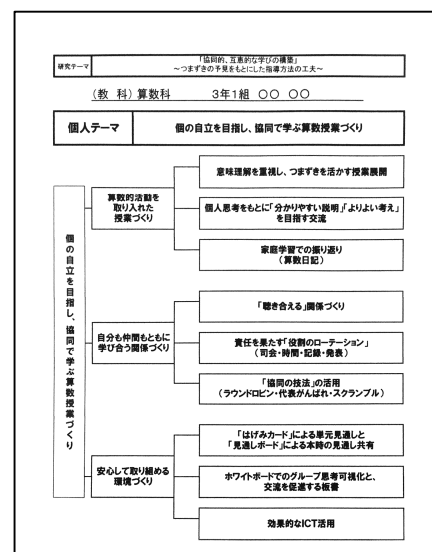


図1 ロジックツリー

(i) 「研究で自分が大切にしていること」「これから取り組みたいこと（手立て）」を各自が付箋に書き出す。

(iii) グループで話し合い、修正や追加を行う。

最後に、一番大切なことなのだが、作成にあたっては、学年末の児童の姿、研究成果の状態をイメージして作成することを強調した。実感としては、現状より20%程度高い目標を設定することで、実践への意欲も高まると感じている。また、作成した研究テーマについては、学期に1回振り返り、修正追加していくことにした。

表1 はげみカード

時間	ページ	あて	ふりかえり
①	194 195 196 197	それぞれ単位は何か、何で測るのかを考え整理しよう。	マツコのコースは巻きたてはか ないでとかかか)ました。0km あってまじう(巻きたて)はかか ないでかと思は(たふたふた)とい う量感を測りて入ていふた。
②	198	長さや面積・体積の 単位の関係を調べ よう。	長さや面積は何倍になるかと いう問題には、何をきいてい くなく、 <u>あるか、たら</u> ×をさ ないといふ関係にたづねたりい ふとかかか)ました。
③	199	重さや体積の関係を 調べよう。	重さの関係を調べたら、1000倍 になると、1kgとがたか)ました。 きりななりと、ある人たふたふた たけつ、 <u>こちへ</u> くらにたづね ましたとていふた)と、きりななり 1kg、kg、kg、と、kは10kgと 1000倍(10の1000倍)とふたとい うことを覚えてたふた)り、 <u>100倍</u> をしかかりとかか)ていふた たのむふた)たてす。
④	200	たしかめよう	

本校の授業協議会で大切にしてきたことが二つある。一つは、「児童と教材がつながっていたか」ということ。もう一つは、「児童同士がつながっていたか」というこ

とである。「学ぶ価値のある課題」を媒介として「児童同士がつながる」授業、そのキーワードは「つなぐ」である。そのため、授業を参観するにあたっては、参観する児童を（班ごとなど）前もって決めておいたうえで、観察する。タブレットで写真を撮ったり座席表に記入したりすることになるが、全ての児童の様子を具体的に記録することになっている。

写真1 授業協議会の流れ

			
具体的に記録	付箋に書き出す	グループでの交流	全体での交流

協議会においては、まず、付箋に書いて個人思考する時間を確保している。児童の様子を「教材とつながっていたか」「仲間とつながっていたか」という観点で書き出していく。このことは、「その授業のねらいは達成できたのか」「できなかったのであれば、それはなぜなのか」ということにもつながっている。次に、グループでの交流を行う。ここでは、学年の教師でグループになり、書いた付箋をホワイトボードに貼りながら、意見を述べ合う。同じ意見、似たような意見をまとめたり、反対の意見を対比的に貼ったりしながら、意見を分類していく。その時に、グループで課題として挙がってきたものは、後ほど全体で協議する。（写真1）

このような授業協議会を行うことで、まず一人で考え、次にグループで協議し、最後に全体で共有するという過程を経験する。全員の思考・活動を促進し、全員参加の機会を確保することで、ベテラン教師、若手教師にかかわらず、考えを交流し合うことができるようになった。また、このような教師自身の学びが、児童の学びへと転化されればとも考えている。

(3) 「リレー学習」による算数の授業

協同的・互恵的な学びを算数の授業でも展開した。「困り感」のある児童が学ぶ喜びを実感できるよう、毎時間の授業の中で、グループやペアで活動する時間を確保し、児童が聴き合い、学び合いながら学習できるようにもしてきた。その実践の一つが「リレー学習」である。1時間の学習の流れは、以下の通りである。

①学習課題を確認し、本時の流れを見通す

②一斉学習

③グループ学習「リレー学習」

- ・ 1問解くための作業を4分割し、4人グループで一人1作業ずつ分担する。
- ・ 分担する作業をローテーションしながら、グループで4問解く。

④個人学習

⑤まとめ・振り返り

リレーによるグループ学習では、一人で1問解くわけではない。算数の苦手な児童も1作業ならやろうと思える。また、1作業終わっても、すぐに自分の番が回ってくる。

る。前の児童がやっていることをしっかり見ていないと、自分がすることが分からなくなるので、自然と学習にも集中する。ただ、自分の番になって困ったり、迷ったり、時に間違っても、すぐにグループの他の児童が教えてくれる。さらに、もし間違えたとしても、たった1作業のことなので1問間違えることと比べると恥ずかしさもない。

このようにして、互いに解き合ううちに、一斉学習の段階では理解が出来なかったところも「そうだったのか。」と納得する。「リレー学習」の後に個人学習に取り組む。すると、自信をもって問題に取り組む姿が見られる。自分一人でできたという満足感も感じられる。この学習で「算数が楽しい。」という児童の声を多く聞くことができた。(写真2)



写真2 リレー学習

2 取組の成果

- ・個人で研究テーマを作成することで、ベテラン教師の実践内容を取り入れて実践することができる。これにより「あの先生だからできるんだ。」という個人の強みが、他の教師へも汎化させることができるようになった。
- ・「はげみカード」は、職員室前掲示板に掲示されるようになった。これにより、児童や教師間で「はげみカード」のモデリングが行われ、振り返りの質が向上した。
- ・協議会では、まず付箋に書いてじっくり個人思考すること、さらに協同の手法を使って交流することができた。これにより、若手からベテランまでお互いに成長し、学び合うと共に同僚性の構築にも貢献できたと思われる。

3 課題及び今後の取組の方向

今後、さらに重点的に取り組んでいきたいことは以下の2点である。

- ・つまずきポイントを踏まえた、指導方法の工夫
- ・協同的・互惠的学びの質を高める評価

まず、「つまずきポイントを踏まえた、指導方法の工夫」についてである。平成27年度から3年間、ひょうごつまずきポイント指導資料作成検討委員をさせて頂いた。主に「式と計算」領域を担当したが、意味理解を深めるために、図や式や言葉に関連付けながら自分の言葉で説明する学習を積み重ねることが必要であることを再確認せられた。また、1年～6年の学習の系統を意識して、つまずきを予見し、個に応じた手立てを考え、指導法を改善することが大切であることを痛感した。

次に、「協同的・互惠的な学びの質を高める評価」である。児童が知識や技能を習得するときは、その教科や学習過程に対する態度も同時に形成している。児童の態度は将来の行動に影響を与えることから、学習に対する積極的な態度を発達させることは重要な課題であると考え。協同的な学びでは、学習の成果だけではなく、そこに至るプロセスについても評価する。また、個人の活動と同時に、グループとしての取組についても評価を行う。さらには、教科内容に関わる認知的な成果、社会的スキル、態度的側面などについても評価していく。このような多様な評価活動から、学習者一人一人が自らの取組について振り返り、次に活かすよう、自己教育力を高めていくことが必要であると考え。主体的な学びを構築するために、研究を深めていきたい。

伝え合い、描く楽しさを味わう

～おもしろい！もっとやりたい！をめざして～

洲本市立由良小学校
教諭 宮脇 祐子

1 取組の内容・方法

(1) はじめに

洲本市由良は、大阪湾の入口にあり、紀淡海峡に面した漁船行き交う漁師町である。学校を一步踏み出すと、対岸には瀬戸内海国立公園「成ヶ島」が横たわっており、校舎からも「成ヶ島」をはじめ、和歌山まで見渡すことができる。タンカーや大型客船もよく往来し、子どもたちは窓から見えるこの景色が大好きだ。

児童数 92 名の小規模校である。子どもたちは、純真で活発、意欲的に活動する。たてよこのつながりが深く、休み時間はいろいろな学年が混ざり合って仲睦まじく遊んでいる。そして、愛する故郷、由良のきらきら輝く海と、ふんわり温かく包みこんでくれる地域の人々に囲まれて伸び伸びと育っている。

本稿ではこの由良小学校での図画工作科を中心とした授業実践について報告する。

(2) 伝え合う力を育む ～一年生の言語活動～

学校という新しい世界の中へ飛び込んできた一年生。これから始まるすべての素地を養う大切な時期である。成長と共に互いの表現のよいところやおもしろいところに気づき、人に伝えるための表現も少しずつできるようになってくる。

そこで、「人の話をしっかり聞く」をはじめの一步としている。そして、学校生活に慣れてくると、伝え合う力を育むために、スピーチを取り入れている。このスピーチの積み重ねが、あらゆる場面で活かされてくる。

しかし、人前で話すことに慣れていない子どもにとって、スピーチはとても緊張する。人に伝える楽しさを実感し、話をしっかり聞くことができるように取り組んでいる。

伝え合う力を育むことで、子どもたちが共感し、高め合うことができる。それが土台となり、主体的・対話的で深い学びが実現できると考える。図画工作科の鑑賞でも、日々のスピーチとつなげた言語活動を取り入れている。



(3) 授業づくりで心がけてきたこと

きっかけ

技法や仕掛け、素材、題材との出会いにより「おもしろい！」と心ときめかせ、描くことが楽しくなるきっかけづくり。

達成感

「もっとやりたい！」と意欲的に活動できるよう経験を積ませ、個々の能力に応じて達成感を得られる題材。

発問の工夫

鑑賞会では、形や色づかい、登場人物の動きに注目させ、何がどう描かれているか、どう感じるか気づけるような発問の工夫。

雰囲気

没頭して制作できる雰囲気づくり。

(4) 授業の構成


図画工作科「A 表現」の造形活動と「B 鑑賞」をつなげ、読み聞かせなどを通して表現の発想を広げる。その中で、制作中、制作後の鑑賞会を取り入れて構成した。






主体的な学び	表現の発想を広げる	ステップ 1	<ul style="list-style-type: none"> ・題材を子どもたちの生活に身近な地域のことや興味を持っていることにつなげる。 ・思い浮んだ数多くのアイデアを出し合い、共有することで多様な発想が生まれる。 ・絵本の読み聞かせを通して感性を広げる。
	楽しむ	ステップ 2	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな技法を働かせ、素材と出会い、造形遊びを通して楽しむ。 ・作り出す喜びを味わう。 ・技能や表現方法を身につけることで次のステップへつなげる。
対話的な学び	表現の構想を深める	ステップ 3	<ul style="list-style-type: none"> ・制作中の作品を黒板に掲示し、友だちの工夫や着目点を鑑賞し語り合うことで、自分の作品への見方や感じ方を深める。 ・「次はどうなるんだろう」「次は〇〇しよう」などの深まりを生み出す。
深い学び	友だちの発想を知り、気持ちがつながる	ステップ 4	<ul style="list-style-type: none"> ・仕上がった作品を黒板に掲示し、お互いの作品を鑑賞する時間を作り、その中で自分の作品と対話する。 ・作品への思いを、スピーチを通して伝える。 ・作品について感じたことを確かめたり、作品の素敵ところを伝え合ったりするなど言語活動の充実を図り、深い学びとなる手立てとする。

(5) 実践事例

【事例①】1 年表現：デザイン「きらきら どっきん うちゅうへごー！」

こだわりのオリジナル宇宙船で宇宙探検をするという想像をふくらませ、楽しんで絵に表現させる。宇宙空間の雰囲気づくりとして、製作中は BGM を流した。

ステップ 1	<ul style="list-style-type: none"> ・帰りの会や図書の時間を利用して、絵本の読み聞かせ（たっぷり）を行い、「宇宙」のイメージを十分にふくらませる。 ・由良の町から見るきれいな夜空と、宇宙のつながりを感じる。 ・宇宙に対する興味と憧れを持たせ、宇宙という未知の世界を探検するドキドキ感を大切にする。 	
広げる		

<p>ステップ 2</p> <p>楽しむ</p>	<p>① スパッターリングの技法 宇宙に通じる黒い工作用紙に、あみとブラシでスパッターリングの技法を使って黄色の絵の具で星を描く。</p>  <p>② オリジナル宇宙船を作る ・色画用紙や紙テープ、色紙、カラーホイルで工夫する。 ・画用紙にカラーペンで自分を描き、窓に見立て宇宙船に乗せる。</p>  <p>③ 絵本の読み聞かせで「宇宙探検」への思いを膨らませる。</p>
<p>ステップ 3</p> <p>深める</p>	<p>① 黒板を宇宙に見立て、それぞれの宇宙船を好きな場所に貼る。</p> <p>② どんな宇宙冒険をしたいか、友だちと対話をする中で、自分との対話も深める。</p> <p>↓</p> <p>絵画制作であまり使ったことのない白いパスを使い、いつもはできない黒板に落書きをするようなわくわく感覚で宇宙探検のびのびと表現する。</p>  
<p>ステップ 4</p> <p>つながる</p>	<p>・作品を黒板に掲示して、宇宙に見立てる。 ・「どんな宇宙船に乗ってどんな宇宙探検をしたか」話を聞き、鑑賞会をする。</p> <p>① 絵の説明をする。 ② 質問に答える。 ③ 友だちの作品の「素敵だな」と感じたことを発表する。</p> 

【事例②】1年表現：デザイン「潜水艇に乗って」

- ・絵本の読み聞かせで、海中のイメージを膨らませる。
- ・潜水艇は、形を工夫し、アルミニウムはくで包み、油性マジックで色付けを楽しんだ後、透明の窓を付け、仕上がった潜水艇で造形遊びをした。
- ・由良の海にいる魚やウミガメ、泳いでいた時にたくさんいたクラゲ軍団、釣りに行ったとき偶然釣れたタコが、絵の中で墨を吹いて大暴れする話に発展するなど、どの作品も生き生きした表現にあふれていた。



【事例③】1年表現：描画「くじらぐものともだち」

- ・国語科でイメージを持ちやすいように提示した立体教材「くじらぐも」から絵画制作における表現の発想を広げた。
- ・空はローラーでグラデーションを描き、雲はスポンジタンポでふんわり描いた。
- ・空の冒険と下界の様子は、パスで自由に表現した。
- ・鑑賞会が終わってからも、青空を見上げ、「くじらぐものともだち」を探し続けるかわいいう姿があった。



【事例④】5年表現：デザイン「パラレルワールド」



思春期の入口に立ち、自分を見つめ直す大切な時期である。みんながフレッシュな気持ちで楽しんで表現できるよう、初めてふれる素材「液体粘土」で由良の海を美しく照らす「月」を制作し、同じ時間が流れているけど、「月」が主役の「月の世界」と



「月を眺める別の世界」が存在したら…という「パラレルワールド」をコンテで表現した。初めは戸惑いながらもあらかじめ技法の練習をしたことでモチベーションが高まり、最後の鑑賞会まで活発な活動ができた。

2 取組の成果

- ・児童の実態に合った題材や素材との出会いにより、「おもしろい！」と心ときめかせ、描くことが楽しくなり、「もっとやりたい！」と没頭して取り組むことができた。
- ・制作中の鑑賞会を通じて、色の塗り方や、描き方などについて伝え合い、考えを広げたり、深めたりすることができた。
- ・自分の思いを伝えたり（発信）、相手の思いを受け止めたり（受信）することで、相乗効果で、発想の輪がどんどん広がり、一つの活動が深いものとなった。
- ・友だちの工夫を見ることで、自分の作品への見通しを持つことができた。
- ・他学年の児童が見て、「じょうずだね」「どんな作品になるか楽しみだね」と声をかけてくれることで意欲が高まり、根気強く制作し、達成感を得ることができた。
- ・鑑賞会で伝え合う中で、自分の作品と対話し、自分なりの意味を考え描く楽しさを味わうことができた。
- ・スピーチを、図画工作科の鑑賞へつなげたことで、主体的・対話的で深い学びとなった。

3 課題及び今後の取組の方向

自由な発想や感性で制作をし、自分の思いや感じたことを伝え合うことは大切である一方、自分の思いを表現することが苦手な児童もいる。

一つひとつの技法や初めての素材、仕掛けとの出会いが子どもに驚きとして迎えられ、苦手意識を持つ子どもも、伝え合い、描く楽しさを味わえる授業づくりに取り組みたい。

そして、子どもたち一人ひとりの人生の素敵な1ページとして「おもしろい！」「もっとしたい！」と夢中になれる時間を過ごせるような研究を進めていきたい。

「すべての子供が生きやすい・過ごしやすい、学校・社会をめざして」

～性の多様性を認め合う仲間作り～

伊丹市立伊丹小学校

教諭 岸田 育子

1 はじめに

2013年9月、「自分の性に違和感を持つ2年生の男子児童」が、本校の特別支援学級に転校してきた。身体は、「男性」であるが、「心は、女性であり、女性らしく自分らしく生きたい」という強い思い・願いを持っていた。担任として、私は最初、正直どう進めて良いか、どう対応して良いか分からず、戸惑うことも多かったが、児童・保護者の気持ちに寄り添いながら、一つ一つの課題に向き合い取り組んでいった。

2 取組の内容・方法

(1) 教職員の意識を変える

① 学びの手がかり

- ・ 何も知らないことからのスタートだったため、まず、私自身が勉強し、当事者の会との繋がりの中で、2014年5月、当事者の小林和香さんに出会った。子供と向き合うに当たっての悩みや相談に乗ってもらい、話をする機会を得た。
- ・ 「いろいろな性別LGBTに聞いてみよう～」のDVDを全教職員で見て、感想を述べあった。レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェンダーの多様な性の人達が、自分の思いを伝え、表現しており、初めてLGBTの人達の思いを聞いて、多くの職員が考えを持つなど、良い研修の場となった。
- ・ 東大阪市淀川区のLGBT支援事業 東優子さん（大阪府立大学大学院教授 GID学会理事）監修、教職員向けLGBTハンドブック「性はグラデーション」を職員研修で学習し、理解を深めた。

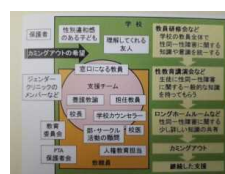


② 校内研修会の開催

- ・ 岡山大学大学院保健学研究科 岡山大学ジェンダークリニック GID（性同一性障害）学会理事長（2014年8月）

講演「学校の中の性別違和感を持つ子供」～性同一性障害の生徒に向き合う～
とても分かりやすく詳しく教えていただき、職員一人一人が深い学びを得た。

【中塚幹也先生の講演会】



- ・ 大阪医科大学神経精神医学准教授 ジェンダー外来ドクター（児童の主治医）
康純先生（2014 年 10 月）
児童の身体の様子、心の様子、これからの学校生活で配慮することなど、詳しく話していただいた。
- ・ 当該児童の保護者（2015 年 2 月）
母親の思い・考え・学校に望むことなど、全職員の前で話していただき、学校の体制作り、環境作り、そして、児童理解の共有に繋げた。
- ・ 「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細やかな対応の実施などについて」
文科省通知（2015 年 4 月）
DVD「あなたが あなたらしく 生きるために」性的マイノリティと人権（監修 日高庸晴）を見て、職員研修会を開く。
- ・ 宝塚大学看護学部教授（2015 年 8 月）
リーフレット「子供の人生を変える先生の言葉があります」「我が子の声を受け止めて性的マイノリティの子をもつ父母の手記」を読みながら、性の多様性、学校ですべきこと、職員の人権意識の向上を課題にあげる。
- ・ 当事者、田中一步さんの講演会（2015 年 9 月）
性の多様性、どんな性の在り方も排除されない学級・学校とは、学校は何をすべきか等、職員の意識を高める。
- ・ 田中一步さん、近藤孝子さんの講演会（近隣小学校・中学校との合同研修会）
「どんな性の在り方も排除されない学級・学校とは？」～子供たちとの出会いから見えてきたこと～

③ 外部研修会への参加

- ・ 兵庫県養護教諭大会 宝塚大学看護学部教授講演会（2015 年 2 月）
- ・ 生徒交流会参加（2015 年 2 月から数回参加）
- ・ 伊丹市教職員研修会 宝塚大学看護学部教授講演会（2015 年 10 月）
- ・ 伊丹市養護教諭大会 康純先生講演会（2016 年 2 月）
- ・ 伊丹市人権教育大会 小林和香さん、田中一步さん講演会（2017 年 1 月）
- ・ 伊丹市教職員研修会 東優子先生講演会（2017 年 7 月）

(2) すべての児童の心を育む取組

① 「性は多様である」ことの出前授業の実践（2017 年・2018 年）

「当事者の田中一步さん、パートナーの近藤孝子さんの話を聞く」出前講座の実施。（5・6 年）資料の活用を進め、図書室・保健室・教室などいろいろな場所に「性」に関する絵本・リーフレットを置いた。



- ② 「女だから」「男だから」という考えに囚われず、自分の気持ちを伝えたり、相手の気持ちを理解したりしようとする態度を育てる。また、服装や遊び、嗜好は、自分の好きなもので良いことを理解するため、人権学習の授業を行う。

- ・ 絵本「こんなのへんかな？」村瀬幸浩作 大月書店
- ・ 絵本「いろいろな性ってなんだろう」他 渡辺大輔作
- ・ 絵本「じぶんをいきるためのーる。」I P P O 作
- ・ 絵本「イリスのたんじょうび」がりーどちえこ作



(3) 性に違和を持つ、トランスジェンダーの児童への支援

① 居場所と学習支援の場を作る

特別支援学級在籍であるので、学習は、個に応じた授業を行った。転校して来てからずっと男児向けの服装・持ち物だったのを、3年生で、全て自分が好きな服装（スカート・ワンピース）・持ち物へ変更し、4年生で、女の子の名前に変更した。自分らしく、自分の好きな性になることで、辛い思いや心が傷つくこともたくさんあった。しかし、行事等の取組を通して、クラスの友達との関わりを大切に、仲間との繋がりを大切に、クラス担任と支援学級担任が、常に連絡を取り合いながら、クラスでの居場所作りに努めた。

② 自認する性で生活するために

体育・プール・運動会・トイレ・着替えの場所・宿泊・身体測定など、本人と相談し、周りの状況を見ながら、一つ一つ丁寧に体制を整えていった。

③ 中学校へ向けて

- ・ 私立中学校受験時は、試験・面接・願書等、女性名で受けられるよう依頼する。
- ・ 田中一歩さん、近藤孝子さんと一緒に、校区の中学校長・中学校教諭との話し合いを持ち、中学校生活のよりよいスタートについて考える。(2018年2月)

(4) 教科学習のカリキュラムの見直し等

① 全学年で、全教科学習において、「性」に関して、よく理解した上で、見直しを行った。特に大きく見直した点は、以下のとおり

- 1年生 → 自分にできる家の仕事（男・女の仕事、男・女の役割分担）
- 2年生 → 自分の成長を振り返る（小さい頃の写真や名前の由来を通してのアルバム作り）
- 3年生 → 性器のつくりと働き（男・女だけの性器ではない場合もある）
- 4年生 → 身体の変化（発育には、個人差があり、思春期に、必ず異性を好きになることもない。性の嗜好も様々である）

5年生 → 心の多様性・性の多様性を知る

6年生 → 第二性徴に伴う身体の変化（個人差があり、必ずあるとは限らない）

② 学校生活の中で、不必要な男女分けや「性別」に特化した記述の廃止

- ・ 学校で作る配布物には男女の欄を廃止する
- ・ 本人への全ての配布物は、女性名で記入・配布する

3 取組の成果

(1) 教職員の人権意識の向上

様々な研修や日常の実践を通し、20人に1人はいるLGBTの児童の課題や実態、心のしんどさ、心の叫びが一つ一つ見えてきた。まず、児童の心に寄り添うことが大事であると考え。そして、自尊感情を高め、心の安定を図る居場所作りが必要である。そのための手立てが職員全体に共通理解されるようになった。また、「性の多様性を考える」授業に取り組む姿勢も大きく変化してきた。

(2) 「自分らしく生きていい」という子供たちへの意識付け

出前講座後の感想では、「自分は、変だと思っていた。でも、変じゃなかった。自分らしく生きていきたい。」「いろいろな人がいて、みんな違うけど、おかしいことではない。」「自分の好きなように歩いていくことは大事であり、大切なこと。」と、一人一人が、性について深く考えることができた。

4 課題及び今後の取組の方向

(1) 第二性徴を迎えるにあたって、本人のしんどさが考えられる。関係機関（ドクター）と連携を取りながら、進めていく必要がある。

(2) 小中の連携が、非常に難しい。小学校では出来ていた本人の希望通りの宿泊や、行事への参加や学習も、第二性徴を迎える中学校では取組方が難しいと言われる。また、部活動で大会に出られるのか等の「制度の壁」や疑問点もたくさん出てきた。中学校との連携や話し合いも定期的に行っていく必要を強く感じた。

(3) 保護者への啓発

家庭内での会話の中で、性に関わる差別的な言葉が飛び交っている実態が把握できた。大人・保護者の理解は急務であると考え。

今、こうして取組をまとめながら、「性の多様性」に関する学習は、学校として、まだまだ不十分な取組であることが分かった。今まで、性について悩んだり、つらい思いをしたりしてきた子供達が多くいたことに心が痛む。これからは、どの学校も、「どんな性の在り方も排除されない学級・学校」を作っていかなければならないと考える。まだまだ、課題はたくさんある。その一つ一つに丁寧に向き合い、考え、全ての児童・生徒が楽しく学校生活を送れるように取り組んでいきたい。

養護教諭の専門性を活かした取組

稲美町立天満東小学校
養護教諭 中澤 陽子

1 取組の内容・方法

養護教諭の職務は、学校保健情報の把握、保健指導・保健教育、救急処置、健康相談、健康診断、学校環境衛生、保健室経営等さまざまであり、その年度によってどの職務に重点を置くかは教育課題や学校運営によって変わってくる。また、児童は日々成長し、社会もめまぐるしく変化していく。

しかし、どのような変化があろうとも、児童の命を守り、児童の心とからだの健全な発育の基礎を培うという根本は変わらない。児童がたくましく生きていく力をつけるために、学校で唯一医学的な専門知識を持つ養護教諭として実践してきたことを報告する。

(1) 安全な学校生活を送るための救急体制の確立

全ての児童にとって安全に学校生活を送ることは最も重要であり、食物アレルギーを持つ児童にとっても、自分が守られていると実感できることが必要である。

重度の食物アレルギーを持つ児童が入学してきた年の年度初めに、本校独自のアレルギー対応マニュアルを作成した。まず、全ての教職員で作成したマニュアルをもとに、食物アレルギー児童の情報を共有し、全職員でシミュレーションを行うことで、予期せぬ場面で発生したアナフィラキシーに対して適切な対応を取ることができる体制の構築を図った。次に、食物アレルギーに対応した給食がどのように作られ、どのような安全対策を経て児童に届けられるのか、写真や図などでわかりやすく示した冊子を作成し、入学する子どもを持つ保護者との面談時に使用した。この冊子は、子どもが初め

写真1 緊急カード



写真2 保護者用冊子



て学校給食を経験する保護者の不安感を取り除くのに有効であった。さらに、管理職、学級担任、栄養教諭、養護教諭、そして児童、保護者、児童の「かかりつけ医」との交流会を設け、重度の食物アレルギーを持つ児童に対してどのような給食環境を提供する必要があるのかを話し合った。そして、既存のマンパワーやシステムを効率的に活用しながら望ましい環境を整備するために、学校保健・食育・アレルギー委員会で検討を重ねた。給食に関する特別な配慮の必要な児童への理解を深めることが、全ての児童が楽しい給食時間を過ごすために必要であると考え、保護者の理解と協力を得て、給食開始前に食物アレルギーについての保健指導を行った。

これらの取組によって、全ての児童が安全に学校生活を送ることの重要性が教職員に浸透し、全児童にも食物アレルギーを持つ友達の命を守るために自分が果たすべき役割を考える力を育てることができた。

(2) 悩みながらも共に生きていく強さを養う保健教育の実践

児童の特性のひとつとして「みんなと違う」ということを嫌う一面がある。学年が進むに従って、この特性は強くなる傾向にあり、この点に着目して保健教育を展開している。

写真3 全校生対象の保健学習



全校生には1年に1回の保健学習を行っている。学習のテーマは学校の課題に応じて毎年変更しており、今年度は、本校児童のう歯保有率が高いという課題に対応するため、「歯」をテーマに実施した。この学習は全校生での学習した後、具体的な取組として、保護者による「仕上げ磨き」を宿題としている。日常の教育相談の中で、うまく保護者と話せなくなったと訴える高学年児童やこのごろ子どもが何も話してくれないといった保護者から

らの相談を受けていたこともあり、「仕上げ磨き」と同時にコミュニケーションの時間が確保されることを期待した。初めは、多くの児童が「え〜っ!」と叫んでいたが、感想では、「仕上げ磨き」の時間が歯磨きに対する意識を高めたことと児童・保護者双方にとって良いコミュニケーションの時間となったことが感じられた。

また、2年生には「命の誕生」、4年生には「成長するからだ」と心について保健学習を行っている。4年生では、からだに起こる「目に見える変化」と「目に見えない変化」を学習した後、「心に起こる変化」を学習した。この学習では少人数グループで十分に話し合わせた後、その内容を代表が発表する形式で授業を展開した。各グループ代表の意見を聞いた児童は、「みんな同じなんだ」という安心感を持つことができ、個々の細かな違いも素直に受け入れる様子が見られた。授業後の感想でも、「みんなも悩んでいるから、私も悩みながら成長していきたい」という力強い児童の言葉が見られ、成長という変化を共有することで、自分のからだを愛おしく思う心情を育むことができた。

写真4 4年生「心に起こる変化」の学習



(3) 自分にあった解決策を選択する力を引き出す健康相談活動

近年不登校児童生徒数は増加の一途をたどり、平成 28 年度、本県では小中学生ともに過去最多となった。小学校児童の不登校にかかる要因のうち本人にかかる要因は「不安」が最も多く、自分の気持ちを整理して言葉にすることが容易でない発達段階にある児童が抱える「不安」に共感し、自ら解決策を選択して主体的に問題を乗り越えようと力を引き出すことが養護教諭に求められていることを実感している。

まず、児童が相談しやすい雰囲気を醸成するため、朝と給食時間の教室訪問を行った。1 日 2 回児童と顔を合わせることで、児童との距離をぐっと縮めることができた。次に、全校集会でその時期に必要な健康情報を伝えるとともに、最後には、何か悩みがあれば必ず保健室に相談に来るように繰り返し呼びかけた。気になる児童にはこちらから積極的に声をかけ、保健室を訪ねてくる児童には十分時間をとって話を聞いた。その際には、さまざまな教職員と相談して対応策を検討し、児童にできるだけ複数の具体的な提案ができるよう準備することを心がけた。児童が小さいと感じている悩みは保護者に伝えやすいが、悩みが大きくなればなるほど隠しておきたい気持ちが強くなる傾向がある。まずは、隠したいという「壁」を乗り越えるために支え寄り添い、「壁」を乗り越えたあとは、児童の問題を家族と一緒に考え、悩みを解消していくという姿勢で対応することで、児童と保護者からの信頼を得ることができた。その信頼関係によって、児童やその家族の本来持っている力をさらに引き出すことができたと感じている。

(4) 保護者・地域の方との情報共有のために

情報の発信はとても大切であり、感染症予防にも有効な手立てのひとつである。

児童に対しては、全校集会、児童集会、担任を通して、放送を使って等いろいろな形で情報を発信できるが、家庭や地域への発信となると保健だよりに頼りがちになる。そこで ICT を活用し、学校の Web ページで児童の活動の様子を公開すると同時に、保健・衛生関係で社会的に話題になっていることを取り上げたり、学校で流行してきている感染症について具体的な統計を示したり、またその予防方法についてわかりやすく発信したりしている。これは昨年度の学校評価で、感染症の流行状況をわかりやすく Web ページで発信したらどうかという提案があり、本年度から実施している。今年度の 2 学期末現在では昨年度の閲覧数を超えており、多くの方に関心を持っていただいたことに感謝している。

(5) 委員会活動を通じた自己有用感の育成

健康委員会では、保健や給食に関係した活動を行っており、みんなに伝えたいことを児童集会で発表したり、全クラスの給食台を磨いたり、換気やハンカチチェックなど呼びかけたり、校内放送や掲示板を活用して啓発している。

ある時、給食台を磨いた児童が「僕たちがきれいにしたこと、気がついてくれているのかな？」とつぶやいたことから、磨いたあとに教室に手紙を置くことを提案した。「健康委員会の〇〇が掃除をしました。これからもおいしく給食を食べてください」この手紙を置くことで、児童たちは掃除を担当したクラスのたくさんの人から「ありがとう」の言葉をもらえるようになった。また、全校生に啓発する児童集会では、何度も練習を重ねてセリフを覚え、立ち位置を考え、低学年の児童にもわかりやすく伝えられるよう

自分たちで工夫を重ねてステージを作り上げている。

そして昨年度は、加古川医師会主催の「禁煙・防煙、いのちを守るフォーラム」で発表の機会を得た。児童集会での発表など学校生活での取組をベースに、児童たちは生き生きと自分たちの考えを表現することができた。表彰やインタビュー、新聞への掲載などを通して、多くの地域の方々に評価され、児童たちは自信を深めるとともに、次の活動に意欲を持って取り組むことができている。

写真5 禁煙・防煙、いのちを守るフォーラム



2 取組の成果

- ・救急処置、救急体制を整えることは、児童の命を守るだけでなく、教職員も守ることになる。児童を動かしてもいいのか？1人で保健室にいかせてもいいのか？このまま頑張らせてもいいのか？担任にとってわかりにくい場面も多い。しかし、ひとつひとつ研修を重ねることにより教職員の力量が高まってきた。
- ・本校に赴任して5年目となり、全校対象の保健学習も、2年生と4年生を対象とした保健学習も児童にとっては恒例となっている。4年生で学習をする時には、2年生の時の児童の様子を随所に織り込み、大きくなったということをみんなで確認しあい、喜んでいる。児童は成長することに喜びを感じることができている。
- ・健康相談に力を入れることで、問題を早期に発見することができている。教職員間でいち早く情報を共有し、解決策を考えていくことで問題の早期解決が行えている。このことは児童が安心して学校生活を送ること、また保護者が安心して児童を学校に送り出せることにつながっている。
- ・児童の活動の様子や保健情報を学校のWebページで公開することは、保護者や地域に向けた情報発信に大きく貢献できた。このことは学校と保護者と地域の連携に役かっている。
- ・委員会活動を通して自主的活動を促すことは、児童にとって大きな自信につながった。いろんなことに挑戦したいという意欲へとつなげることができた。

3 課題及び今後の取組の方法

児童が健康な生活を送るために必要な力は、①心身の健康に関する知識・技能 ②自己有用感 ③自ら意思決定、行動選択する力 ④他者と関わる力 この4つがあげられている。まだまだ自分ひとりの力でできることは数少なく歯がゆい気持ちでいっぱいだが、これらの力を育成するために養護教諭の専門性を最大限に活かした取組を行っていききたい。また学校組織の一員として養護教諭の持つコーディネート力を活かした役割を発揮し、教職員間、学校と保護者と地域、そして学校以外の専門スタッフとの連携にも力を注いでいきたい。

「外国につながる子ども達とともに」

姫路市立城東小学校
教諭 西野 明美

1 取組の内容・方法

(1) はじめに

ベトナム戦争終結後、姫路に難民定住促進センターが開設されたことから、本校やその周辺の学校には、外国につながる子ども、特にベトナム人児童・生徒が多数在籍するようになった。最近では日本生まれの児童が増えたが、外国からの編入も時々ある。ほとんどが日本での定住を希望し、将来の日本を背負う若者となる。この子ども達にどのような力が必要なのか。その力をつけるために、教師は、学校は何をするべきなのか。この命題を追求するために、平成19年度前任校での日本語指導教室担当となってから現在まで取り組んできたことを紹介する。

(2) 学ぶ力をつける取組

①教科指導型日本語指導の必要性を教員に知らせる

初めて日本語に触れる子どもにとっては、まず、生きていくための日本語（サバイバル言語）や、日常会話のための日本語（生活言語）の習得が必要だ。本校のように多数の外国につながる児童が在籍している学校には、日本語指導として教員が加配され、日本語指導教室が開設される。日本語指導教室では、学習の時間に取り出し指導を行ない、その子の日本語の力に合わせて初期の日本語指導を行なうことで、生活言語の習得向上を目指している。

しかし、生活言語が習得できたから学習についていけるかというと、そうではない。また、日本生まれで会話が流暢であっても、学習についていけなくなる外国人児童も多い。学校では、ともすれば、それは個々の能力の差であると考えられがちだ。実は、児童の能力差によるものというよりは、むしろ、教師が意識して学習中に活用する授業を行わず、専門的な学習言語の説明不足が原因と考えられる。教師の意識次第で、児童の学習言語の習得が変わってくる。そのことで、児童の学力も変わる。これは、教師の外国人児童への配慮意識の問題だ。まずは、教師の一人一人がそのことを自覚する必要がある。

そこで、外国人児童が在籍する学校の担当者との会議で、「あなたのクラスの子どもは学習言語を理解し、習得できているか？」という内容で、体験や実践を発表したり、教科指導型日本語指導を取り入れた授業を公開したりした。校内でも、教科指導型日本語指導の重要性をことあるごとに話をした。外国人だから理解できなくても仕方がないなど思っているはいないだろうか。日本語指導の担当者だけが頑張っても、子どもの力は伸びない。学級担任が、専科の教師が、教科指導型日本語指導を行なわなければならないということを伝えてきた。

②教科指導型日本語指導で、授業を組み立てる

教科の学習の中では、その教科特有の日本語が多く使われる。日常会話では使われるこ

とが少ない教科特有の言語（学習言語）を理解しながら、さらに学習内容を理解できるようにすることが求められる。例えば、「はたらく」という言葉を例にとると、日常生活で使われる生活言語では、「仕事をする」という意味でつかわれることが大多数である。しかし、理科の「じしゃくのはたらき」の学習場面では、外国人児童の多くが、「磁石が仕事をするの？」と思っている間に授業が進んでしまう。日常では使われることが少ない、理科の学習の中での「はたらく」の意味を教師が新たな活用として意識して教えなければならない。

このように考えると、毎日の授業の中で意識して教えなければならない「学習言語」はかなりある。單元ごとに、学習内容を理解するために必要な「学習言語」をあらかじめピックアップすることが重要となる。

そこで、大阪教育大学の臼井准教授指導のもと、次のような指導案を作成し、本時に指すべき学習言語を教師が意識できるようにした。

図1 指導案目標設定の一例

図1は、1年生算数科「かえますか？ かえませんか？」の指導案に一部分だ。指導案に書く教科の目標以外に、日本語の目標を記入する。指導案の作成時には、学習内容の理解に必要な言葉は何か、それを本時に何度も用いて習得するにはどのような教師の働きかけが必要かを事前に考える。そのことで、本時の「学習言語」と「学習内容」を同時に習得することができる。実際にこの方法で授業を組み立てると、外国につながる子どもはもちろんのこと、学習についていきにくい日本人の子ども達にとってもわかりやすい内容となった。

5. 本時の学習		
(1) 目標		
算数科：1つの品物が50円で買えるか買えないかの判断をもとにして、品物の値段を見積もることができる。		
日本語：「高い」「安い」「買える」「買えない」の意味がわかる。		
・「～円より安いから買えます。」「～円より高いから買えません。」を使ってお菓子を 買えるか買えないか理由をつけて言うことができる。		
(2) 展開		
学 習 活 動	支 援 ・ 指 導 と 評 価 ⑥	備 考
1. 買い物場面を設定する。	・興味をもてるように、実物に似せた菓子の模型を使う。	菓子の模型 ワークシート
2. 1件目の店で買い物をする ・あめが48円です。 ・ガムが47円です。	・何が何円か確認する。 ◎関心をもって取り組もうとしている	大きな財布 50円玉1つ 短冊
(1)50円より安いものを1個買う場合 50円より安いから買えます。	・50円のかえますか？かえませんか？ ・50より大きい数→「50円より高い」、 50より小さい数→「50円より安い」とい う言い方を確認する。	やすい たかい

(3) 自己実現のための取組

①国際交流フェスティバル

日本で学校生活を送り、日本語を話して生活するうちに、親たちが大切にしてきた母国語や母国の文化を忘れ、日本人に同化しようとする傾向がある。また、日本社会の中で不利益を被らないように、名前を日本名に変えてしまう児童もいる。外国人であることを隠すことすらある。どの国の人でも、どの国にいても、自分のアイデンティティ（自分らしさや自己肯定感）をしっかりと持ち、自信を持って生きてほしい。そのような願いから、姫路市国際交流フェスティバルに参加している。近隣の小学校には100人を超えるベトナム人の児童が在籍するため、近隣の3小学校のベトナム人児童の代表が集まり、ベトナムの伝統的な獅子舞（ムーラン）を披露する。ムーランの練習などで顔なじみ



写真1 ムーランの様子

になり仲良くなったり、自分と同じ国にルーツをもつ子どもが他校にもこんなにたくさんいるのかと驚いたりする児童もいる。フェスティバルでは、息を合わせて楽器を鳴らし、舞い、マイクの前で民族名を名乗る。民族名を大切に、大勢の前で堂々と自国の文化を披露し、アイデンティティを高める大切な機会となっている。

②waiwai 子ども交流会 in 姫路

兵庫県在日外国人教育研究協議会が開催する交流会の一つが、毎年姫路で行われる。事前の打ち合わせでは、外国につながる子ども達だけでなく、日本人の子どもたちにも広く呼び掛けて参加者を募る方法や、子ども達が楽しんで交流できる内容を協議する。ここでも3校合同でムーランの披露をする。また、中国や韓国、ベトナムなどのアジアの国々の遊びや、民族衣装を着る体験、韓国のチャンゴや日本の和太鼓鑑賞・体験など、異文化に触れながら交流を深めることができるような内容となっている。自分の国や、他の国のことを知るよい機会となっていると考える。

③日本語・多言語スピーチコンテスト

3月には、日本語・多言語スピーチコンテストに参加する。小学生から大人まで、年齢は問わない。全員が日本語でスピーチをした後、母国語でスピーチをする。「友だちのこと」「家族のこと」「学校のこと」「進路のこと」「将来の夢」「外国人として日本で生きてきて思うこと」など、スピーチの内容は様々だ。

日本生まれの児童・生徒にとっては、母国語であっても普段読み書きしない母国の言語でのスピーチは簡単ではなく、戸惑いはある。また、子どもは日本語で話すことが増え、親子の母語でのコミュニケーションがとれなくなってしまうケースも珍しくはない。思春期になり、保護者に進路などの詳しい話ができなくなる問題も深刻だ。そのような児童の多くは、学校で多文化共生サポーターの先生に、作文を母国語に翻訳して書いてもらったり、読む指導をしてもらったりして練習する。同様に、家でも保護者から母国語の読み方を教えてもらって練習することができれば、親とのコミュニケーションアップにより機会にもなっていく。

滞日期間の浅い児童・生徒にとってのスピーチコンテストは、逆に、日本語でのスピーチは難しいが、母語ではすらすらと話すことができ、自信を持って自己表現する機会となっている。

コンテストでの審査結果はどうであれ、みんなの前で自分の思いを語ることに意義があり、今の自分を見つめるよい機会となる。また、頑張っている先輩達や、友だちの姿を見せ、自分も頑張ろうという思いを持たせることも大きな目的だ。

この他、他の団体と連携し、外国につながる児童たちの未来を拓く支援を他校の教師たちとともにやっている。

「けん玉大会」「BBQ大会」「ウォークラリー」など、国籍を問わず、参加した友だちと仲良くなり、友情を深める体験や、「雪遊び」など、母国では体験できなかった遊びの体験、キザニア甲子園での仕事体験など、学校独自ではできないことをたくさん体験させることができるようになった。これらの体験活動は、これから進む道を考え、友だちと

もに進んでいくための素地をつくる機会となっている。

2 取組の成果

私達教師が外国につながる子ども達につけるべき力は、自分で未来を切り拓いていけるだけの学力と、ともに歩いていくよき仲間をつくる力、そして、自分に自信を持って生きていくためのアイデンティティを確立する力だと考えている。もちろん日本人の子ども達に対しても同じことが言えるが、外国につながる子ども達は、日本人の子ども達の何倍も苦勞することが多いのが現実である。

そのようなことを考え続けてきたこの11年間の毎日の取組は少しずつではあるが、その「少しずつ」が積み重なってきていると実感している。

学校では、国籍に関わらず、児童たちが仲良く遊び、学ぶ姿が見られる。日本語指導教室での取り出し授業で力を伸ばし、学力が上がってきている児童もいる。学習に対して意欲をもって取り組める外国人児童も増えてきた。校内の教職員は、外国につながる子どもにわかりやすい授業を心がけ、日々の授業を行おうとしている。そして、それは、日本人児童の学習にとってもよい成果を上げていると言える。

学校外では、他の学校や団体とつながり、学校だけでは実現できないような様々な体験を児童ができる機会をたくさん得ることができた。

3 課題及び今後の取組の方向

外国人児童の進路は、依然として厳しい。保護者の経済状態によっては、高校や大学への進学をあきらめなければならないこともある。保護者への情報が十分でないために、よりよい進路選択ができないこともある。また、公立高校の外国人枠はまだほんの少ししかなく、日本語が十分でない子どもにとっては、厳しい倍率だ。滞日年数の制限もある。

私達は、小学校の教師であっても小学校でのことだけを考えず、もっと先の、高校や大学への進学に向けて取り組まなければならない。

また、小学生の時から、未来の夢を膨らませられない現実の中で苦しんでいる児童もいる。外国人が集住している学校でない学校に通う場合は、日本語指導の支援を継続して受けられないこともある。

一人でも多くの外国につながる子ども達が、未来を切り拓く力をつけ、日本の未来を背負うたくましい若者に成長できるよう、今後も日々の「少しずつ」を積み重ねたいと思う。

また、他の学校や各種団体との連携はもちろん、子ども達が育つ地域の人々とつながり、日本人の子ども達とともに外国につながる子ども達も一緒に幸せに育っていける関係づくりを目指していきたい。

「安全・安心な学校生活を目指した取組」
～子どもたちの命をつなぐ危機対応訓練研修の充実～

姫路市立高浜小学校
主幹教諭 三村 理加

1 取組の内容・方法

姫路市では、食物アレルギーを有する児童生徒が、安全・安心な学校生活を送ることができるように、平成 22 年度に策定（平成 29 年 3 月改訂）された「姫路市食物アレルギー対応マニュアル」（資料 1）を基に、各学校で学校給食を含む学校生活における個別指導や学級指導などの日常対応を行っている。緊急時対応についても体制整備を求められている。

平成 25 年 2 月には、新たに「学校災害対応マニュアル作成指針」（資料 2）が示され、本市の「災害対応マニュアル」と「危機対応マニュアル」が一本化され、自然災害、人的災害や犯罪など事件、事故も含めた様々な学校災害に対して一元的な対応を行うこととなった。現在、教職員研修に活用している危機管理に関する内容を指針より一部抜粋し、まとめた。

■指針のねらい

- ・危機に対して、平素から未然防止に向けて取り組むこと
- ・発生時には被害を最小限に抑えること
- ・一刻も早く日常の教育活動に戻すこと

■姫路市の学校園が守るべき優先順位

- ①子どもたちと教職員の安全を確保する
（命を守る、保護者へ引き渡す）
- ②避難所として地域住民等を引き受ける
- ③授業を再開する

■緊急時の組織体制(資料 3)

指揮者が近くにいない場合は、その現場にいる者で組織づくりをし、初動対応を行う。「緊急時に直面した場合、普段実践していることしかできない。普段実践していないことは決してできない。」

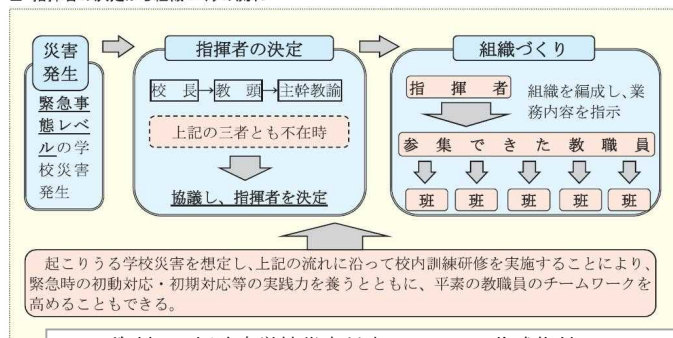
という考えに基づき、災害対応を日常的な学校園教育活動に組み込むことが重要であると示されている。

■迅速で確実な初動対応・初期対応(資料 4)

学校園が守るべき優先順位を全教職員が理解していれば、現場にいた者が迷わずに子どもと教職員の命を守る行動をとることができる。



■ 指揮者の決定から組織づくりの流れ



資料 3 姫路市学校災害対応マニュアル作成指針 P32
http://www.city.himeji.lg.jp/s110/2212774/_28949.html

■より実効性のある教職員研修の実施

資料4 姫路市学校災害対応マニュアル作成指針 P34

本校は児童数 1000 人超の大規模校で、教職員数も 50 人を超える。食物アレルギー対応を必要とする児童は平成 30 年 3 月現在で 70 人、アレルギー原因食物は約 20 食品に及び、エピペン処方 4 人いる。あわせて、それ以外の危機対応事案も決して少なくはない。

危機対応の取組の初期(平成 23 年)の頃は、あらかじめ役割が定められていたシナリオ通りのシミュレーションだったため、スムーズに進む一方で、設定役割以外の教職員の初動・初期対応の体験値が上がらないという課題が出て、シナリオなしのシミュレーションを実施したが、臨機応変に動くことが出来ず、現場は混乱した。

そこで、全教職員の危機対応力の向上を図れるよう実効性のある訓練研修を目指して、この指針を基に学校災害対応マニュアルを作成し、「学校園が備えることや教職員が学ぶこと」を中心に取組を進めた。PDCA サイクルの視点で食物アレルギー緊急対応、学校水泳事故緊急対応、多数傷病者対応等の実際を想定した教職員研修を実施し、検証・改善を行っている。また、平成 25 年度よりその取組を基にパッケージ化した演習プログラムを学校外の研修において紹介する機会をいただいている。その本校と学校外の取組内容について次の 2 点から報告する。

(1) より実効性のある危機対応訓練研修

危機対応の教職員研修は、児童が安全・安心な学校生活を送ることができるよう、校長のリーダーシップのもと、全教職員が日常対応や事故防止及び緊急時における支援体制ができるように行うものとして実施している。マニュアルは作成しただけでは、実効性があるかどうかはわからない。緊急時は、迅速かつ確実にしなければならないことが同時に重なり発生するので、教職員には臨機応変な対応が求められる。

<臨機応変に動ける現場づくり>

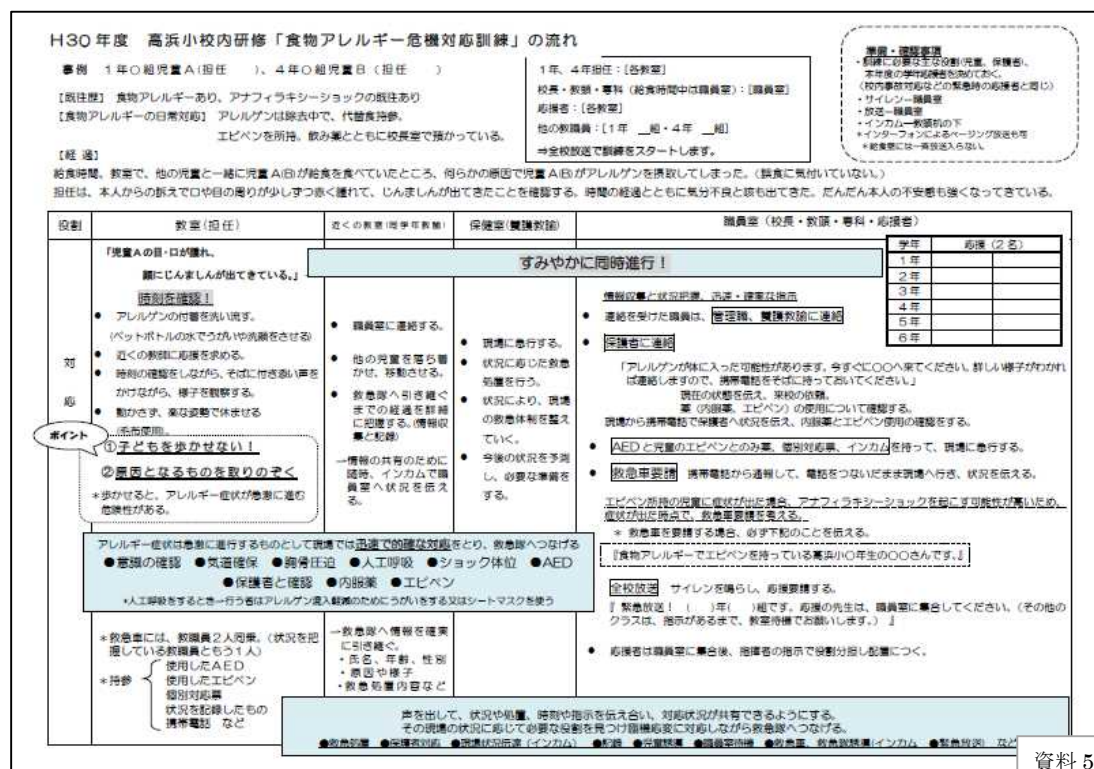
- ・教職員一人一人が、同時にしなければならない幾つものことを知っている。
- ・同時にしなければならない対応のどれでもができる。
- ・対応状況の情報共有が簡単にできる。
- ・普段からチームワーク力がある。
- ・日常生活においても教職員の危機意識が高い。

<関係機関(消防署・救急救命士)との実践的な連携>

- ・実際に、119 番通報(訓練通報)や現場での救急救命士による特定行為を含めたシミュレーションを繰り返すことで、緊急対応の流れの見通しが持てるようになる。
- ・初動及び初期対応へのアドバイスをいただけることで、対応スキルが向上する。
- ・実際の状況のような緊迫感のあるシミュレーション体験ができる。



<p>□ 演習 A 『子どもの命をつなぐ危機対応シミュレーション(実地演習)』 設定：約 30～40 分</p> <p>○ねらい 学校の危機事態における対応シミュレーション(演習)を通して、危機発生時に必要な初動・初期対応(救急処置を含む)や体制を全教職員で共有し、危機対応体制を整えるための修正可能な改善点を明らかにする。</p> <p>○方法 想定された危機事案に対して、実際に学校内の教室や職員室等で、教職員のチーム力を発揮しながら迅速に臨機応変に対応していく。演習後には、全教職員で振り返りを行う。</p>	
<p style="text-align: center;">＜危機対応シミュレーション(実地演習)の要点＞</p>	
事前	<ul style="list-style-type: none"> ●教職員間でチームワーク力や臨機応変な対応力を遠慮せず発揮できる雰囲気づくり。 ●シミュレーションのねらいや重点ポイントを毎回、具体的に決めておく。 <ul style="list-style-type: none"> ・例) 声を出し合う、胸骨圧迫、人工呼吸は交代しながら行う ●全教職員で訓練全体の様子や成果・課題を共有できるようにする。 <ul style="list-style-type: none"> ・例) ビデオカメラ等でシミュレーションを記録する等 ●企画、運営は視点の偏りを防ぐために一人で担わず組織的に行う。 ●環境準備は入念に、演習本番は臨機応変な対応を目指す。 <ul style="list-style-type: none"> ・演習に使用する物品(AED トレーナー等)の準備は確実に行う等
実践	<ul style="list-style-type: none"> ●被害想定をするなかで、自分自身の危機に対する力を知る。 <ul style="list-style-type: none"> ・想定力、技能も含めて対応力、パニック時の自己判断力等 ●現在の立場や役割に関係なく、教職員全員で想定される初動、初期、中期対応について必要な事柄を共通理解する。 <ul style="list-style-type: none"> ・一次救命の方法(*1)、同時進行で必要とされる対応(*2)を具体的に出し合う。 <ul style="list-style-type: none"> (*1) 意識の確認、止血、胸骨圧迫、人工呼吸、AED、ショック体位、エビペン等 (*2) 記録、インターフォン、トランシーバー、緊急放送、担架、救急セット 毛布、119 番通報、110 番通報、保護者連絡、児童生徒誘導と確認、救急車誘導等 ●緊急時にだれもが迷わず、どの役割でも迅速に行動できるようにトレーニングをする。 <ul style="list-style-type: none"> ・例) 個々の練習とショートシミュレーションを組み合わせる工夫 立ち位置を交代して(視点を変えて)シミュレーションを体験する等
事後	<ul style="list-style-type: none"> ●各個人、グループ、学校全体、関係機関等での振り返り、評価(成果、課題を整理)を反映させて、自校の危機対応体制を整えていく。 <ul style="list-style-type: none"> ・例) 振り返りシート等の活用、発展性を持った訓練研修内容の検討 実際に自校で発生した事事故案の対応検証等



(2) パッケージ化した演習 B プログラム

口演習 B 『子どもの命をつなぐ危機対応訓練（机上演習）』設定：約 60～80 分

○ねらい 学校の危機発生時に必要な初動・初期対応（救急処置を含む）や体制について、机上演習を通して全教職員で共有し、自校の危機対応における課題に気づく。

○時間設定
1 クール目：説明 5 分、机上演習 15～20 分、振り返り（課題点、改善点）5 分
2 クール目：担当場所（事業発生時にいる場所）を交代して、机上演習 15～20 分、振り返り（課題点、改善点）10 分

○準備物（1 グループに）
◆紙 横造紙 1/2 大、付箋 7.5×7.5cm の 1/2 カット大（3～4 色で各 20 枚程度）
黒色水性マーカー 数分

○取組
◆例 グループ（1 グループ 10 人程度）に分かれて、横造紙、付箋を使用

	教室	近くの教室	職員室	その他、保健室
a				
b				
c				
d				
e				

＜演習事例＞あらかじめ、発生時刻、場所は設定しておく

	心肺停止対応	食物アレルギー対応	地震（津波）避難対応（ライフライン停止状況）
a	窓のそばで倒れこむ	「かゆくなってきた」と訴えてきた	携帯電話等から緊急地震速報が鳴る
b	櫓の角で顔を切り、出血 顔色悪い	咳も出てきて、気分も悪そう	立っていられない揺れが 3 分くらい起こる
c	呼びかけに反応しなくなってきた 呼吸していない	呼びかけに反応しなくなる 自分呼吸なし	割れたガラスで数人出血している 不安感が強くなってきている
d	救急車到着	救急車到着	次の揺れがくる
e	救急車搬送先決定	救急車搬送先決定	保護者が学校へ次々と駆けつける

○手順
①机上訓練のねらいと重点ポイントを明確
例）危機発生時の対応向上、体制見直し
危機発生時の校内状況を想定する機会
・重点ポイントは、1 クールごとに設定
例）「声を出し合おう」「職務分担は複数で交代」「情報共有の方法は〇〇」「情報収集、記録の方法は□□」等
②参加者の担当場所（事業発生時にいる場所）を決定
・1 場所に 2～5 人
・場所別に異なる色の短冊（付箋）を配布
・グループ全体の動きを観察する役も振り回りの間はグループのリーダーとして（観望のまとめ役 1 人設定）
③事業内容は、演習のなかで 2～5 分経過することに提示 a→b→c→d→e（あらかじめ事業の全内容は示さない）
④対応内容はできるだけ、具体的に記入
例）職員室へ連絡 → 〇〇職員室へインターフォンで「〇〇さんが△△です。」
AED → 〇〇AED を持っていく、△△AED のパッドを装着してスイッチを押す等
⑤短冊（付箋）は、対応する場所（枠）に貼付
例）職員室から廊下で教室へ駆けつけて対応 → 教室の枠に「〇〇を△△する」と書いた短冊（付箋）を貼る
⑥演習を振り返り、意見交流
・設定していた重点ポイントについて課題や修正可能な内容を共有
例）同時進行で必要な初動対応が多い（第一発見者だけでは対応が難しい）⇒現在の立派な定められた役割に開示なく現場で優先される対応は⇒情報共有の方法は⇒情報収集、記録について⇒
⑦ 2 クール目の演習
・設定していた重点ポイントを設定
・グループ内で担当場所を交代
⑧振り返り、意見交流
・危機対応の課題（各学校の課題等）について
・危機対応研修についての気づき、感想

資料 6 H28.29 年度 健康教育指導者養成研修(教職員支援機構主催)の講師担当時にも使用

このプログラムは、各学校において、だれでも簡単に危機対応訓練研修を継続的に取り組めるよう考案した。学校の多様な事案にも対応が可能である。

危機対応訓練「机上演習」

◆趣旨◆
学校の危機発生時に必要な初動・初期対応や体制を机上演習を通して、全教職員で共有し、自校の危機対応における課題に気づく。

資料 6a

危機対応訓練「机上演習」
危機対応の役割は決まらず、その場で優先順位を考えながら役割を見つけ、対応していきます

資料 6b

危機対応訓練「机上演習」
教室（〇年組）第 5 校時開始直後

教室	近くの教室	職員室	その他（保健室）
〇〇が△△	●●を△△		

資料 6c

危機対応訓練「机上演習」
教室（〇年組）第 5 校時開始直後

教室	近くの教室	職員室	その他（保健室）
窓のそばで倒れこむ			
櫓の角で顔を切る ばつとしていて 視線が定まらない			
呼びかけに反応しなくなる 呼吸していない			
救急車到着			
救急車搬送先決定			

2 取組の成果

- (1) シミュレーション研修は、教職員自身の危機対応スキル面の課題（ページング放送の順がわからない。初動対応の優先順位がわかりにくいなど）が明確になりやすい。異なる場所での対応内容についても、事前の DVD（以前のシミュレーション記録動画）視聴で、シミュレーションのイメージがしやすくなった。さらに、軽度な事故対応発生時にも教職員のチームワーク力を発揮し、応急処置と情報共有がスムーズに同時進行できる。危機対応を通して教職員間のつながりがより強まったといえる。
- (2) 演習 B プログラムは、体験した教職員の感想に「危機対応を我ごと意識で考えることができた。校内研修企画見直しの参考にしたい。」とあった。研修を通して、危機意識の変容の機会としての役割は果たせたといえる。

3 課題及び今後の取組の方向

学校を取り巻く環境は、日々、様々なリスクに囲まれている状況である。そのなかで教育活動に携わる教職員は、子どもたちの安全・安心な学校づくりに努めることが求められている。

毎年 2 回の研修で、危機対応力が著しく向上することは難しいといえる。しかし、今後も PDCA サイクルの視点で研修の在り方にも改善や工夫を加え、校内組織と消防署の連携を含めた内容の充実を目指したい。もしもの時に、教職員のチームワーク力で迅速、確実な対応でかけがえのない子どもたちの命をつないでいきたいと強く願っている。

学校給食を活用した食育 ～食育は日々の学校給食から～

相生市立双葉小学校
栄養教諭 塩 津 順 子

1 取組の内容・方法

相生市は平成 23 年度に、それまで選択制の給食を実施していた中学校給食が完全実施となり、さらに週 3 回の幼稚園給食が導入された。同時に、子育て支援施策の一つとして給食は無料化となり、給食に対する関心は一気に高まったが、一方で「無料化になったので給食の質が低下するのでは」という声も聞かれた。給食対象者が増え責任の重さを痛感するとともに、「給食を食べてみんなに喜んでもらいたい、もっと給食を知ってほしい」という思いを強くした。

そこで、「日々の給食を大切にする」「学校だけでなく家庭・地域の人に給食を知ってもらい、食育につなげる」この 2 点について取組を進めた。

(1) 日々の給食を大切にする

① 給食の基本は献立作成

今日の給食は何をねらいとしているのかを考えて献立を作成している。歯とあごの働きをじょうぶにするためのカミカミ献立、相生市内や近隣の市町の食材を使った地産の献立、季節感のある献立、カルシウム・食物繊維・鉄など家庭で不足しがちな栄養素が多く摂れる献立、家庭で食べにくい魚や豆類・根菜類を多く使った献立など、毎日の給食に特色を持たせている。

② 食べやすく楽しい給食にする

毎月各学校から報告された感想と残量報告をもとに、食べやすく、楽しい給食になるように工夫する。キムチなど食べにくい食材や香辛料は、幼稚園給食がない日に使用する。毎日、調理指導を行い、幼稚園児が食べやすいように切り方を小さくしたり、味付けは幼稚園・小学校・中学校に応じて変えたりしている。親子方式・自校方式の良さを生かして、配缶時間にもこだわっている。

毎日、「今日の給食はどうですか？」と全教室を巡回している。「おいしかったよ」と、いつも元気な声が返ってくるが、声の調子で今日の給食の反応がうかがえる。楽しそうに食べているとうれしくなったり、寒い時期にお汁から湯気が出ているのを見ると安心したりする。また、残量もほとんどなく、教職員の給食指導に感謝している。

幼稚園においてもきちんと指導されていて、小学校入学当初の給食指導が困らなくなった。さらに、中学校でも「残量ゼロを目指そう」と提唱し残さず食べていることに感謝している。中学校給食・幼稚園給食が導入されるときには不安があったが、現在は児童生徒の心身の健康のために幼児期から成長期に及ぶ給食が果たす役割を感じうれしく思っている。

③ 特色ある献立を盛り込む

日々の給食の中に特色ある献立を盛り込んでいる。

- ・[月初めの献立] 平成 28 年度は「西播磨の食材を知ろう」をテーマに近隣の市町の食材を使った献立を実施した。この献立の一つを農林水産省が主催する「地産地消メニューコンテスト」に応募し、平成 29 年度近畿農政局長賞を受賞した。
また、平成 29 年度は「オリンピック開催国の料理」として外国の料理を実施している。
- ・[食育の日の献立] 兵庫県は毎月 19 日を食育の日として定めている。この日は地元の食材を使った献立にしている。最近では市内だけでなく近隣の市町の自慢の食材を取り入れている。現在の地産の登録者数は 20 業者、地産の食材は 33 品目になる。西播磨の栄養教諭で地元の食材を使った調理実習を行い、それを再び調理員と試作して相生市の子どもたちにあう味付けや量を検討して新たな献立ができた。
- ・[防災給食] 阪神・淡路大震災の翌年から続けている。「いざというときのために非常食に慣れておく」「冷たい給食を食べることにより、被災された方々の苦労や心の痛みを知る」をねらいとして、アルファー化米やカンパンを使った献立にしている。
- ・[給食週間の献立] 平成 29 年度は「食で関西いいところみつけ」をテーマに関西地方の献立を実施した。奈良漬けに苦戦したり、白みそ仕立ての粕汁のおいしさを知ったり、いろいろな味を発見したりする機会になった。
- ・[市制記念日の献立] 毎年、山と海に囲まれた自然豊かな相生市を愛おしむことのできるような地元の食材を使った献立でお祝いしている。
- ・[お楽しみ給食] 1・2 学期の最後の給食は、献立名を知らせないお楽しみ給食にしている。
- ・[希望献立] 3 月には卒業生が選んだ献立を実施している。昨年度までは小学 6 年生が考えた献立にしていたが、今年度から中学校校区ごとに中学 3 年生と小学校 6 年生が考えた献立を実施した。
- ・[バイキング給食] 年 1 回のバイキング給食を子どもたちはとても楽しみにしている。飲み物とデザートは予約制、主食や主菜は自分で選ぶことができ、選ぶ喜び、友だちとなかよく食べる楽しさを味わうことができる。



④ 地産地消に取り組む

平成 4 年頃に保護者の方から近隣の赤穂市の低農薬のみかんを紹介されたこ

とから始まり、相生市内の野菜（白菜・キャベツ・大根）を使うようになった。相生市は大規模な農家はないが、山と海の囲まれた自然豊かな土地であることから海の幸、山の幸を給食に使用することはできないかと考えた。いかなごは春休み前に調理員が炊いて冷凍し、新学期の給食に出す。生産量の少ないナイルメロンを給食用にとっておいてくれたり、夜明け前から収穫して甘いとうもろこしを届けてくれたりして「安全でおいしい給食を届けたい」という生産者の思いは強い。

2年生の児童が全校生のとうもろこしの皮をむき、そのみずみずしさに驚いている。3年生の児童は環境体験学習で、給食で使用している「うまいか」工場を見学したり、黒豆の鞘むきをしたりして食育と結びつけている。

また、栄養教諭が生産者を訪問した際に作成した資料を試食会や夏休みの親子料理教室などで使用している。

（２）給食を紹介し、食育につなげる

① 「食」のチームティーチングの取組

栄養教諭として、平成 22・23 年度「学校給食を活用した食育推進事業」に携わった。給食を生きた教材として、食生活学習教材・食育ハンドブックなどを活用しながら、相生市の給食の内容や地元の食材にふれた、児童に親しみやすい授業づくりに取り組んだ。カミカミ献立を使った「カミカミもぐもぐじょうぶな歯」、給食のごはんとみそ汁を使った「食べて元気 ごはんとみそ汁」、また、地元の新鮮な食材を使った「とれたて野菜はおいしいよ」、近くの海でとれたしらすを使った「海の小さな宝物を知ろう」など、「給食を知ってほしい」思いで、生活科・総合の学習・学級活動・保健・家庭科の授業にチームティーチングで取り組んでいる。

② 食育だよりによる啓発活動

毎月発行する食育だよりは、家庭への啓発だけでなく児童も読めるように工夫している。講演会や、本で知った内容を取り入れるようにしている。また、裏面には、今月の給食の中から、献立の作り方を紹介している。「今度はこの給食の作り方載せてね」という声も聞かれる。

③ 給食試食会

給食試食会は自分の所属する学校だけでなく、他校にも出向き給食について説明している。献立のねらい、衛生、地産地消、特色ある給食、日々の献立内容、給食時間の児童の様子など資料やパワーポイントを使って説明している。保護者からは「こんなに衛生に気をつけて給食を作っていることに感謝します」「実際に子どもたちが食べているものが分かり安心しました」などの意見をいただいている。

④ ふれあい給食

地域の方と児童が交流した後に、給食を試食していただいている。地域の方に給食の内容を知っていただくよい機会である。年 1 回の行事であるが、毎年楽しみにしている方が多い。

⑤ 食育フェスティバル

相生市では食育推進事業の一つとして平成 23 年度より食育フェスティバルを夏休みに開催している。平成 29 年度のテーマは「相生市の宝を育む学校給食」として、各学校園の食育の取り組みや地産地消等の展示や、豆つかみ、手洗いチェックカーなどの体験コーナー、学校給食の試食がある。地域の方に学校給食を知っていただくよい機会である。

中学校では、かき料理の実習や弁当作り、小学校では、地場産を使ったゆず大福やきな粉だんごづくり、幼稚園では収穫祭など様々な食育に取り組んでいる様子が見えてくる。

⑥ 親子料理教室

夏休みに実施している親子料理教室は毎年恒例の事業である。近年は地元の食材を使った給食の献立を調理実習している。また、調理実習と共に食育の講話を行っている。

今年は「米」をテーマに、米は日本人に欠かせない食べ物であることを知らせ、給食に使用している地元の米の紹介、日本や世界の米料理、米の加工品について話をした。以前は給食の献立以外の調理実習を行っていたが、給食を知ってもらうには給食の献立を実習する意義は大きい。

2 取組の成果

食育は、日々の地道な取り組みである。毎日子どもたちに安心しておいしく食べてもらうことが一番大事なことであり、毎日の給食は大切な作品だと思っている。

先日、相生市 P T A 連絡協議会が発行する「相生 P T A」が、相生市の学校給食を特集していた。「おいしい給食・うれしい給食」と題して、給食を支えてくれている生産者の紹介や、給食室の様子、給食時間の風景、食育フェスティバルなどが載せられていた。P T A の方々が給食に関心を持ってくださり、期待や感謝の言葉が感じられ、とてもうれしく感じた。

3 課題及び今後の取組の方向

本校の平成 29 年度学校評価より、「食事に好き嫌いがある」児童が 2 割強、いることが分かった。家庭とも、さらに連携を深める必要があると思っている。

また、近年食物アレルギー等の児童・生徒が増えており、きめ細かな配慮が必要となっている。

栄養教諭は少数職種ではあるが、子どもたち、教職員、調理員、生産者、業者の人たちに支えられていることに感謝している。これからも人とのつながりを大切にして「元気の給食」を目指して地道に頑張っていきたい。そして、日々の給食を大切に、学校だけでなく家庭・地域の人にもっと給食を知ってもらい、食育推進につなげていきたい。

「生きる力を育む」健康教育
連携・ユニバーサルデザインの視点を取り入れた生活習慣づくり

宍粟市立山崎小学校

養護教諭 山本路子

1 取組の内容・方法

- (1) 児童・生徒の生活習慣づくりについて、幼小中高の連携を軸にした取組(前任校:千種中学校)
 - ・幼小中高が連携した「早寝早起き朝ごはん運動」～地域に根ざした健康づくり～
- (2) 学ぶ楽しさを感じさせるわかりやすい授業づくりの取組(現任校:山崎小学校)
 - ・「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた健康教育」

(1) 幼小中高が連携した「早寝・早起き・朝ごはん運動」～地域に根ざした健康づくり～

前任校は、地域総がかりの教育をめざして、コミュニティスクール推進事業を展開している。その活動の一環として、幼小中高が連携して「早寝早起き朝ごはん運動」に取り組んだ。これは、学校・家庭・地域・関係機関が連携し、生涯にわたる健康の基礎を培うことを目標に、幼小中高14年間を通して、子どもたちの生きる力の向上をめざした取組である。



①基本的な生活習慣の確立をめざして「1週間の生活しらべ」

幼小中高一斉の「生活しらべ」を年3回実施し、一貫性のある生活指導に反映させた。

②幼小中高で取り組む「目覚まし朝ごはん」

- ・「目覚まし朝ごはんレシピ」を募集し、広報誌で紹介した。
- ・朝食指導教材DVD「目覚まし朝ごはん スイッチオン」を作成し、教材を使って小中交流集会、幼稚園保護者会等で保健指導を行った。
- ・食の自立に向けて、自分でご飯を炊いて地産地消の朝ご飯作りを実施した。

③手作り教材で広がる早寝・早起きの睡眠指導

睡眠指導教材DVD「すいみん列車 スリープ9」を作成し、その教材を使って小中学校で授業を行い、睡眠の大切さを呼びかけるとともに、保護者へも睡眠の大切さを啓発し、幼児期からの早寝早起きの習慣化をめざす取組を行った。

④中学生が健康の架け橋 「交流保健出前授業」



毎年、中学生が小学校に行き、「早寝早起き朝ごはん」を啓発している。劇やクイズで交流を深めることで、子どもたちの健康への関心を高め、生活指導につなげるよい機会となっている。また、この活動がきっかけとなって、小学生が幼稚園に行って保健劇をしたり、高校生が小学生に紙芝居をするなど異校種間での健康教育の輪が広がっている。

（２）「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた健康教育」

現任校は、学校教育目標を「学ぶ楽しさ・共に生きる喜び・未来を拓く夢と志を持つ『ささの子』の育成」とし、ユニバーサルデザイン化プロジェクトの推進による児童個々の課題に基づく教育の充実に取り組んでいる。

また、平成２６年度から２８年度まで「心身の健康への適切な対応を行うための養護教諭の複数配置に関する研究校」として、健康課題解決にむけた健康教育を推進した。

＜ＵＤ化の視点と手立て＞

①導入・展開の工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・カードや板書で課題を掲示し、何を学習するのかを明確にする。 ・視覚に訴える教材（映像・具物）を提示することで関心を高める。
②発問の工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・発達段階にあわせたわかりやすい言葉選びをする。
③板書の工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・学習の流れがわかるように板書する。 ・重要な言葉は大きく、色を変える等の工夫をする。
④視覚支援の工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・理解を促し、興味関心を持たせるために、機器や掲示物をねらいや効果を明確にした上で使用する。

①児童とともに作りあげる健康教育

「すべての児童にとってわかりやすい授業づくり」をめざして、教材開発および教材の工夫を行うとともに、健康課題解決にむけて児童自らが考え、全校生・家庭・地域へ発信していく「児童とともに作りあげる健康教育」の取組を行った。

- ・保健室来室者は毎日約３０名、多い日は５０人以上である。（擦り傷・倦怠感等）
- ・就寝時刻が遅く、朝のスタートがうまくきれない児童がいる。



健康課題解決にむけて、児童自らが考え、全校生へ発信していく。

- 「どうして、山崎小学校の保健室来室者は多いのか考えよう。」
 - ・５年生が保健学習「けがの防止」で話し合い、自分たちでできるけがの手当等を学習発表会で全校生、地域に発信する。
 - ・国語の授業の中で、曜日別欠席者数、保健室来室者数のグラフを読み取り、自分たちの生活を振り返る。まとめたものは掲示し、全校生に知らせる。
- 「すいみんの大切さを知らせよう。」
 - ・健康委員会出演ムービー「すいみん列車 スリープ９」を作成し、全校集会で視聴後、「よい睡眠」について健康委員会が全校生に呼びかける。

②保健学習の取組

ア５年（単元）「けがの防止」

目標：事故やけがは、人の「行動」と周りの「環境」が原因で起こることを理解する。

けがの種類、状況を付箋型のカードにし、操作活動を通して分類することで、どの児童も自分の考えを持つことができた。



イ全校、地域へ発信

学習発表会で、全校児童や保護者、地域に保健学習で学んだ事を発表した。

ウ他教科との関連

国語（単元）「グラフや表を用いて書こう」

保健室来室者数・欠席者数から、保健室の利用状況に目を向け考えさせる。

（授業を終えて）自分の考えを持ち発信したことで、自分の行動に責任を持ちだした児童がいた。読みとりだけでなく、保健学習で学んだことを書くことができた。

③保健指導の推進

「ワクワク保健タイム」 8：25～8：40

朝の学習タイムを利用し、養護教諭が各教室に行き、教材の工夫・言葉選び等1年～6年の発達段階に応じた保健指導を行い、健康課題解決にむけた取組を行った。

指導内容	テーマ	指導内容・教材の工夫
姿勢指導	正しい姿勢を心がけよう 「ゲー・チョキ・パーでいい姿勢」 	①背骨の役目を知ろう ②姿勢が体に与える影響について考えよう ③いい姿勢をしてみよう ★背骨Tシャツを着て説明することで子どもたちの興味関心をひき、悪い姿勢の時の内臓や背骨の様子を視覚で理解し、よい姿勢の大切さにつなげることができた。
冬の感染症予防	インフルエンザを予防しよう 	①インフルエンザ予防を考えよう ②うがい・手洗いの大切さを知ろう ③マスクの役目を知ろう ④5つの約束を覚えよう ★インフルエンザという目にみえないウイルスを模型にすることで、予防行動の動機付けとなった。
睡眠指導	すいみんの大切さを知ろう 「すいみん列車に乗って眠りの世界を旅しよう」 	①スリープ9の意味を考えよう ②成長ホルモンの働きを知ろう ③記憶の効果について知ろう ④よい睡眠のとり方を覚えよう ★「スリープ9（ナイン）」＝「9時に寝る」は児童にわかりやすく、生活に結びつけやすかった。視覚教材で説明することで、子どもたちは睡眠の効果を理解することができた。
朝食指導	金メダルの朝ごはんを食べよう 	①朝食の効果を知ろう ②朝食と体温の関係を考えよう ③バランスよい朝食を食べよう ★朝食が「脳・体・おなかの目覚ましスイッチ」であることを説明し、バランスのよい朝食のとり方を知らせた。

④視覚支援 健康ムービーを活用した健康教育

＜山崎小学校元気アップ大作戦＞

健康委員会・トライやる中学生出演の健康ムービーを毎年作成し、全校集会で全校生で視聴した後、健康委員会が「早寝・早起き・朝ごはん」を呼びかけた。児童が出演し、劇化することで、親しみやすくわかりやすい内容となった。また、全校生に大画面で一斉指導することで、同じ目標に向かって取り組む姿勢を養うことができた。



⑤家庭・地域への発信

指導の様子をほけんだよりや校報「山小通信」・HPに掲載し、家庭や地域に学童期の睡眠等の大切さを呼びかけた。また、学期毎に1週間の生活チェックを行い、早く寝る習慣の定着を家庭と連携して行った。29年度は、健康ムービー「山崎小学校元気アップ大作戦」を学校保健委員会で視聴し、養護教諭が「早寝・早起き・朝ごはん」の大切さをPTAに呼びかけるなど、学校保健委員会の活性化につながった。

2 取組の成果

(1) 幼小中高が連携した「早寝・早起き・朝ごはん運動」～地域に根ざした健康づくり～

○学校と家庭、地域が連携して取り組む「早寝早起き朝ごはん」運動は、幼児教育から高校教育までを含めた「千種のつながる教育」へと発展し、子どものみでなく保護者の食生活への意識を高め、健康増進に寄与することができた。それが、千種町内小中学生の朝食摂取率97.6%に表れている。

○中学生の啓発活動は、幼小中高交流へと広がりを見せ、合同文化祭や学校保健委員会で家庭・地域に取組を発信し、協力体制が強化している。⇒ **役割期待の効果**

実践例：合同文化祭で健康ムービー上映、高校生による保健紙芝居

○中学生の早寝・早起きの習慣については、実施率は78%と年々改善傾向にある。

実践例：生徒が主体的に「1030運動（10時30分に寝よう）」を展開

(2) ユニバーサルデザイン(UD)の視点を取り入れた健康教育

○健康課題解決にむけた保健指導・保健学習の充実については、教材を工夫し視覚支援することで、児童の興味・関心を高め知識・理解の定着につなげることができた。

○健康ムービーの作成が、全校生・保護者へ健康増進を啓発する取組となり、学校保健委員会の活性化へとつながった。

3 課題及び今後の取組の方向

生活習慣の確立については、「知識としてはわかっているが、行動としてはできない」といった課題がある。この課題解決のためには、継続的な指導とともに個に応じた指導が必要である。そして、学校間、家庭・地域と連携した健康教育をすすめていかななくてはならない。これからも、健康で安全な生活を送るための指導・支援のあり方や連携についての研究をすすめていきたい。

今後、子どもたちが自立した一人の人間として生きていけることをめざして、子どもと向き合い、一緒に考え、教職員や保護者と連携・協働し、子ども自身が主体的に行動、習慣化できることを願って健康教育の実践を積み重ねていきたい。

「学校業務改善の推進と実践」

西宮市立東山台小学校
学校副主幹 北口 郁子

1 取組の内容・方法

(1) 「My 定時退勤日」を実効あるものにするために

- ・ 学年会計にかかる事務処理

経験したことがない校務分掌を担当する教員が多かったために、どのような事務処理をすればいいのか、聞き方や聞く相手についても分からずに困っていることが、聞き取りにより知ることができた。事務の流れについて、「西宮市立学校園徴収金及び学校園経由支給金取扱規程」「西宮市立学校園徴収金及び学校園経由支給金取扱要領」に基づいた事務処理が必要だが、規程や要領を熟読し理解する時間がない。期限がある処理についても、見通しを立てる余裕がなかったり、経験の少ない教員が多かったり、学年会計事務に多くの時間が取られたりしているため、その対策として次の実践を行った。

- ・ 学年会計担当者打ち合わせ会を早い時期（5月中旬まで）に行い、徴収金にかかる年間予定一覧、主な徴収金の流れや会計処理において留意する点、「学校園徴収金支出伺書」「金銭出納簿」「会計報告書」金融機関の「振込依頼書」の記入例等をプリントにして配布した。
- ・ バスでの校外学習等が多いため、バス代を人数割して算出するための計算シートをエクセルで作成し、人数やバスの台数と料金を入力すれば一人分のバス代が計算でき、引率者等の料金も出せるようにした。この様式は教員の旅費請求にも使用できる内容にしている。
- ・ 学期ごとに業者への支払いを学校でまとめて行っているが、金融機関の入出金伝票の作成の時間を削減できるよう、テンプレートファイルの作成をした。学年ごとのシートとなっていて、番号で通帳内容を選ぶことができ、通帳名義、口座番号、フリガナが表示される。このまま金融機関の入出金伝票にプリントアウトができるものになっている。
- ・ 学年だより等に徴収日の連絡をどの学年にも記載してもらえるように、「学年だより等での学校諸費・給食費振替の連絡」という内容でプリントを作成した。月の初日の作成なので、振替日や再振替日、金額、返金日についても時期を合わせて記載している。全学年、各月、長期休業中前で一年分を作成している。
- ・ どの内容についても、学校共有フォルダ内の「教材採択・会計」フォルダに保存して使用できるようにしている。支出伺書・出納簿の書式については、学年ごとにフォルダを作成し、学年用の書式にして保存している。共有して見ることができるよう、担当教員に直接聞かなくてもファイルを見ることで会計処理の状態が分かる。事務職員が確認できることで、ミスを減らすことにつながっている。
- ・ 業者支払いを事務室が一括で行っている。ほとんども振込処理として現金の取扱いをできるだけ減らすことで、教職員の負担感を軽減している。また、校内すべての資金の流れを把握しているため、学年会計と特別支援学級の会計の整合性の確認

もできている。

- ・ 振替や現金による入金額と振替後の未納者を、学年会計担当教員と管理職で共通理解する流れができている。担任や学年会計担当教員だけで、あるいは事務職員だけで責任を負わない仕組みにしている。未納が続く保護者への連絡は、管理職と相談の上、学校事務職員が中心となって対応している。

(2) 西宮市立小中特別支援学校事務研究会の青年研究会による学校訪問における講師

平成 29 年 8 月 24 日(木) 9 時～12 時 西宮市立東山台小学校にて

講義内容

「これからの業務改善について考える」

- ・ 教員が学校事務職員にばらばらに同様の質問をしてくることがある。また、多くの教員が同じような間違いをしていることに気が付くことがある。そのような内容を解決することが、教員はもちろん、学校事務職員にとっても業務改善となる。
- ・ 教職員が同様の様式や書式を使用することが多いが、各々ばらばらに持っているよりも共有して保存して使用できるようにすることで、初めから作成しなればならないことや、保存場所が分からないということが無くなる。
- ・ 時代に合ったものを工夫することが大切
- ・ 今の自分の学校で、どのような業務改善が行われているかを考えてみる。
- ・ 誰のための改善になるのかも視点となる。教員だけが改善となるのでは意味がなく、どの職種にとっても改善になることを取り組む。

「実務に関する情報交流」

- ・ 事前に 12 項目の質問を受けており、それぞれの項目について回答した。質問内容は、青年研究会のメンバーが一生懸命学校事務職員の職務に取り組んでいることがとてもよく分かる内容だった。自身の今までの経験を生かして学校事務職員として行っている仕事を伝え、青年研究会の思いに答えることができたと思う。質問内容は次の通り。
- ・ 東山台小学校の HP を見て、学校が行っている取組に事務職員がどう関わっているのか。
- ・ 地域とのつながりについて
- ・ 日々の仕事について
- ・ 青年層に向けてのメッセージ

「施設見学」

東山台小学校は、26 年前に建てられ、西宮市としても新しい街づくりの一環としての建物だったため、独特な作りとなっている。特徴的なところや、工夫していることなど、実際に見て知ってもらった。

(3) 県立教育研究所 小・中学校 事務職員（経験者研修Ⅱ）研修講座における講師

講義内容

「学校業務改善の実践から」

この講座は市町組合立小・中学校及び特別支援学校の行政職 3 級及び 4 級の事務職員対象で、今回は県内から 20 名の参加だった。まず、本校の特徴を伝え、具体的に行っている業務改善につながる内容をプリントにして伝えた。本校の校長が毎週水曜日

の定時退勤日ごとに教職員へ配布しているプリントや、転出入児童があった時に各担当に配布するプリント用ファイル、業者支払日に金融機関や支払い業者に対して通知しているプリントなど、使い方などのコメントを盛り込み、実際に使用しているものを参考資料として配布し、各校での取り組みのヒントとなるように考えた。兵庫県教職員の勤務時間適正化取組評価検討会が平成 25 年 2 月に発行した「教職員の勤務時間適正化新対策プラン」と兵庫県教育委員会が平成 29 年 4 月に発行した「教職員の勤務時間適正化推進プラン」を活用して県内の勤務時間適正化の状況を知ってもらい、参加者の市町や学校でどんな業務改善が行われているかについて小グループで話し合い、紹介してもらった。講義のあとに行われた業務改善にかかわるグループワークにも参加して助言した。

2 取組の成果

学校訪問後のアンケートから抜粋

- (1) My 定時退勤日を実践できる日が増えている。
 - ・ 初めて担当していても、何からすればいいのか、どのような事務処理があるのかわかったと思う。転出入があった時の事務処理方法なども正しい会計処理を行えるような方法の伝達もでき、定着してきている。
 - ・ 事務処理の時間短縮はできてきているようだ。入出金伝票のファイルの使用により伝票の記入間違いが無くなった。バス代を算出するシートについては定着している。
 - ・ 校内の学校徴収金における資金の流れを事務職員が把握していることでミスが減り、やり直しをしなければならない内容が少なくなっている。
 - ・ 徴収日などの連絡をどの学年にも学年だよりに記載してもらうことで未納者が減っており、年度末には未納者がいない会計の締めができています。
- (2) 参加者がより学校事務の仕事に対して意欲ややりがいを感じてくれたようだった。
 - ・ 次の世代が確実に育っていることがとても嬉しかった。
 - ・ 作成したファイルや文書は、自己満足で終わりがちですが、周りの人にわかりやすいかどうか尋ねることも大事だと思いました。それがみんなで共有するものなら、なおさらですね。
 - ・ 自校では学校全体の業務改善に事務職員があまり関わっていないので、その辺りがとても勉強になりました。共有フォルダを利用したりそれまでの経験を活かしたりして、自校ならではの負担軽減の方法を考えていきたいです。
 - ・ 講話を聴いて誰かに何かを伝える、ということも意識しつつ継続できる取組とできたらなと思いました。答えてくださった教職員とのコミュニケーションの取り方を参考に、先生方と連携していきたいです。
- (3) 参加者が業務改善と勤務時間の適正化が少しはつながって自分のことにできたのではないと思う。あてがわれるものではなく、自発的に行うものであることや、管理職や事務職員だけが進めるものでもなく、教職員全員が意識的に進めなければならぬことという内容が伝わったのではないと思う。実践内容を具体的に示したことで、各学校でできることや、既に進めていることの確認ができたようだ。

3 課題及び今後の取組の方向

学校徴収金については、誰が見てもお金の流れがわかる事務処理ができるような仕組みを確立したい。間違いがない会計処理方法を担当教員や会計監査担当が理解できることで、業務にかかる時間を短縮することを目指したい。

さらに校内でアンケートによる聞き取りをし、進めるべき改善を把握し実践を続けていきたい。

本校の実践で使用しているファイルやテンプレートを市内の学校事務職員が共有して使用できる内容にし、提案していきたい。西宮市教育委員会とも連携して行える業務改善の提案も続けていきたい。

次年度の県立教育研究所の講師についても、依頼があれば、さらに進めた考え方を伝えていきたい。

2 中学校

「協同的探究学習による“わかる学力”を高める授業づくり」

尼崎市立大庄北中学校

教諭 西前 孝嗣

1 取組の内容・方法

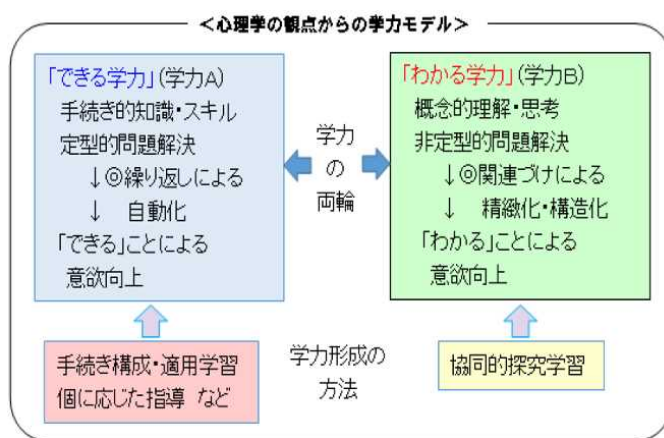
(1) はじめに

全国学力・学習状況調査をうけ、尼崎市では市を挙げて学力向上に取り組んでいる。尼崎市中学校数学研究会でも『数学的活動を通して、思考力、判断力、表現力を高める授業づくり』を研究テーマとして各中学校において研究を進め、市全体に広めるよう、研究授業を行ってきた。

本校では、平成 26 年度より、グループ学習を取り入れた授業改善に取り組んできた。GLT (Group Learning Time) というグループ学習の時間を、授業の中に取り入れることで、一人では学習が困難な生徒に対し、複数で解決に向かうことで、授業での「分からないから学習を止めてしまう」という現象の解決を図ることとした。平成 27 年度より兵庫つまずきポイント指導事例集作成委員として、県内の小中学生の算数・数学における「つまずき」を、全国学力学習状況調査の結果をもとに作成した調査問題により明らかにした。その結果、各問題において学習してから年数が経つにつれ、正答率が下がっていることが分かった。すなわち、知識が薄れていくことが「つまずき」の大きな原因となっていることが明らかとなった。同じ形式の問題を解くドリル形式の学習で得た知識は、その時ばかりの知識であり、月日とともに忘れ去られていく。そこで、本校では平成 28 年度より東京大学大学院教育学研究科の藤村宣之教授にご指導いただき、知識から理解へと深化する“わかる学力”を育成するため、『協同的探究学習』をテーマとした授業改善を行うこととした。

(2) 『協同的探究学習』による、“わかる学力”の獲得を目指した授業づくり

藤村教授のご指導の下、学力には、“できる学力”と“わかる学力”の2つがあり、日本の児童・生徒は“わかる学力”が低いと言われている。全国学力学習状況調査においても、単に知識を問う A 問題の正答率が高い傾向にあるが、「なぜそうなるのか？」や「何を根拠に考えたか？」と問われる B 問題においては無回答率が目立つ。数学においては計算結果ももちろんだが、その過程に面白みや大切さがある。し

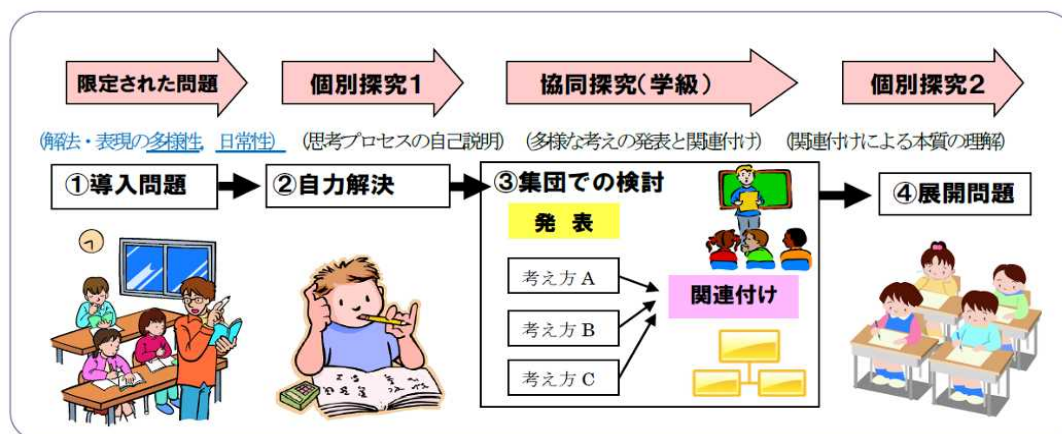


藤村宣之 (2012) 『数学的・科学的リテラシーの心理学』(有斐閣) より

かし、現在の数学の授業において、その面白みを教えるには至っていない。藤村教授から、「知識を関連付け、ある一定の枠組みができて、はじめて理解をしたと言える」ということを教えていただいた。確かに、すべての知識が関連している数学の授業において、その知識は、ぶつ切りにされ、別々のものとして認識されている場合が多いように感じる。そこで、『協同的探究学習』による授業改善が必須となる。

数学では、“できる学力”とは、計算や方程式等を解く力であり、ドリル学習のような同じ形式の問題を繰り返し説く解くことで付けることができる学力を指す。それに対し、“わかる学力”とは、自身の解法を説明し合うことや、見通しを持って問題の解決に向かう力を指す。本研究では、“わかる学力”を『協同的探究学習』を通して育成するための授業改善を行うものである。

具体的には、授業内に「個別探究」と「協同探究」の時間を設定し、自己の考えを他者と比較し、検討する中で昇華させていく。協同探究では単なるグループでの学習ではなく、教室全体での探究を目指す。生徒からの説明において、教師からの全体への聞き返しを行うことで、より深い理解へとつなげるものである。



『協同的探究学習』における基本的な1単位時間の流れ

(3) 『協同的探究学習』を取り入れた指導計画

『協同的探究学習』は、単元の目標に沿って、導入時（第1時）や発展教材（単元終結時）を中心に位置付けると効果的である。各単元において生徒に身に付けさせたい能力を明確化し、単元ごとの計画に『協同的探究学習』を位置付ける。授業における課題（非定型問題）を工夫することで、より多様な考えを引き出すことが可能となる。多様な考えを引き出し、関連付けることで知識が整理され、より深い理解へとつなげていく。そのような授業を展開することで、新学習指導要領の中で記されている主体的・対話的で深い学びを実現させることができる。



『協同探究』の様子

	学 習 活 動	指導上の留意点																																										
導 入	<u>○課題把握（3分）</u> ・ 本時のねらい 「規則的に並んでいる数字の列について考えてみよう！」	・ ホワイトボードを使用。 ・ 規則的に並んでいる数字の表を理解させる。																																										
展 開	<u>○問題把握（4分）</u> <div><div>次の表をみて、以下の問いに答えなさい。 (1) 12 行目の 5 番目の数を求めなさい。 (2) 4 行目の 3 番目の数を求めなさい。 (3) 6 行目の 2 番目の数を求めなさい。</div><table><tr><th></th><th>1番目</th><th>2番目</th><th>3番目</th><th>4番目</th><th>5番目</th></tr><tr><td>1行目</td><td>1</td><td>2</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td></tr><tr><td>2行目</td><td>6</td><td>7</td><td>8</td><td>9</td><td>10</td></tr><tr><td>3行目</td><td>11</td><td>12</td><td>13</td><td>14</td><td>15</td></tr><tr><td>⋮</td><td>⋮</td><td>⋮</td><td>⋮</td><td>⋮</td><td>⋮</td></tr><tr><td></td><td>□</td><td>A</td><td>B</td><td>□</td><td>□</td></tr><tr><td></td><td>⋮</td><td>⋮</td><td>⋮</td><td>⋮</td><td>⋮</td></tr></table></div>		1番目	2番目	3番目	4番目	5番目	1行目	1	2	3	4	5	2行目	6	7	8	9	10	3行目	11	12	13	14	15	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮		□	A	B	□	□		⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	
		1番目	2番目	3番目	4番目	5番目																																						
	1行目	1	2	3	4	5																																						
	2行目	6	7	8	9	10																																						
3行目	11	12	13	14	15																																							
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮																																							
	□	A	B	□	□																																							
	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮																																							
	<u>○個別探究（8分）</u> ・ (1) ～ (3) の問題に各自で取り組む。 (1), (2) については 2 分程度 ・ (3) について考えを深める。 (導入問題)	・ (1), (2) の考え方をもとに、 (3) を考えさせる。 ・ (3) をどのように求めたかを説明できるようにと指示を与える。																																										
	<u>○協同探究（15分）</u> ・ (3) についての求め方を説明することができる。 ①すべて書く ②縦の関係に着目する ③横の関係に着目する など	・ クラス全体でできるだけ多くの考え方を発表させ、関連付ける。																																										
	<div>ある同じ行の 2 番目と 3 番目の数 A, B の積が「1806」であるとき、 A, B は何行目にある数か？ (展開問題)</div> <u>○個別探究（5分）</u> ・ 個人で中心発問（展開問題）について前問を使って考える。 <u>○GLT（協同探究）（10分）</u> ・ 前問を参考にし、各班で解決する。 ・ x 列目として、 x を使ってその列の数を表すことを考える。 ・ 2 次方程式の解き方について理解する。 ・ 2 次方程式の解の吟味をする。 ・ クラス全体で多様な解法を共有し、関連付ける。	・ 個人での解決（見通しを持つ）ことを促す。 ・ 各班での解決を促す。 ・ 意見交換ができていない班には前問の解決法を利用するように指示する。																																										
ま と め	<u>○振り返り（5分）</u> ・ 本時の振り返りとして理解した内容を書く。																																											

研究発表授業時の指導案（6月30日実施）

2 取組の成果

(1) 本校の教師の変化

指導計画時において、『協同的探究学習』を取り入れた授業の計画を立てる教師が増えた。また、普段の授業においても発問や課題の設定に工夫が見られるようになった。特に、本時のねらいに沿った中心課題において、学年を越えた教科会が活発に行われるようになった。各教科においての『協同的探究学習』を教科ごとに話し合い、単元ごとの計画の作成に当たる教師が増えた。

(2) 本校の生徒の変化

授業において、自己の考えだけでなく他者の意見を聞くことや比較することで、自己の考えを、自信を持って発表できる生徒が多くなった。また、他者に自己の意見を説明することで、より論理的に説明する力も付いてきた。数学が苦手であった生徒も、安心感を持って受けることができ、積極的に自身の考えを説明することや、解決困難な問題にも積極的に取り組む姿勢を見ることができた。

3 課題及び今後の取組の方向性

(1) 課題

若手教員の増加に伴い、経験の少なさが目立つことがある。また、生徒主体で行う授業であるため、あらかじめ用意していたものを越えた意見が出たときに、戸惑う姿が見られることがある。さらに、教科によっては、まだまだ『協同的探究学習』を取り入れにくい教科もあるようだ。全教科において、『協同的探究学習』を指導計画に位置付けて取り組むことが必要である。

(2) 今後の取組の方向性

課題を踏まえ、より具体的な授業スタイルの提案が行える市内での研究発表の実施及び『協同的探究学習』の考えを深めるための職員研修が必要となる。また、若手教員への支援として、普段の授業見学や研究協議を進めることや、教科・学年を越えた授業見学が必要である。教科の枠を越えた取組を進めることで、より多様な『協同学習』を目指していく。また、生徒たちの定期考査における点数の変移や授業への取組に対する生徒アンケートなどによる分析を通して『協同的探究学習』の成果や生徒への影響などを調べていくことが大切であると考えている。

「次世代を担う生徒と後進育成のために～教科等指導員・研究主任として～」

伊丹市立西中学校
主幹教諭 野田 義子

1 取組の内容・方法

(1) 研究主任として

① 授業研究や研修会を通して

ここ最近の教育界ではベテラン教員の大量退職、それに伴う若手教員の大量採用により、本校でも30代以下の教員の締める割合が7割近くに上る。

一方、保護者の学校に寄せる学力向上への期待の大きさは、学校評価からも伺い知ることができる。生徒の学力向上のためには、教員一人一人の授業力向上抜きには考えられない。研究主任として、このように自校の課題解決と学習指導要領のねらいを鑑み、毎年研究テーマの設定を心掛け、研究推進委員会のメンバーはもとより、全教員で共通理解を図りながら研究を推進してきた。

本年度は、研究テーマを「自ら学び、自ら表現できる生徒の育成」、副題を「思考を深め、生き生きと活動する生徒の育成」とした。その具現化のため、年2回の校内研究会における研究授業と全教員による年1回の公開授業を設定した。研究授業の授業者は20代の若手教員や30代のミドル世代の教員から人選し、全教員で一つの授業を参観することで公開授業における課題を共有するようにした。授業後は、毎回、大学から講師を招聘し、次期学習指導要領実施を見据えた講話や本校の課題解決のための講話を拝聴することで自身の授業改善に生かすことができている。

また、若手教員育成のために、定期的にOJT研修を実施している。授業力向上に繋げる教科研修はもとより、若手教員が日々直面する様々な課題をタイムリーに取り上げ、解決への糸口を共に探ったり、先輩教員からの経験談を聞いたりすることでチーム意識の醸成を図っている。

② 子供たちに「育成すべき力」を付ける取組を通して

学習指導要領の改訂ごとに、その理念に基づき、子供たちに育成すべき力が示される。9教科の授業はもとより、「総合的な学習の時間」等を通して、変化の激しい世の中で生き抜くための逞しさが身に付くような研究テーマを設定している。

前任校で研究主任として取り組んだ際には、「総合的な学習の時間」に自己と向き合い、自己を見付けることを大テーマとし、病院、消費者センターをはじめ、多方面の関係機関と連携しながら、「自分史の作成」や「命」「日常生活に潜む危険や課題」に目を向けた取組を計画した。生徒に調べたことを発表させるには、まず教員のプレゼンテーション力向上を図ることに着眼して、研修を重ねた。

また、現任校では、生徒の「表現力の育成」を目指し、3年間で発達段階に応じたテーマを設定し、1分間スピーチを行っている。クラス内発表から学年発表へと広げ、平成27年度の伊丹市の研究発表会では、継続した取組の成果として、生徒によるスピーチを来校頂いた方々に披露した。

(2) 教科等指導員として

平成22年度から4年間、伊丹市教科等指導員（中学校美術科）として、また、平成26年度からは兵庫県教科等指導員としての機会をいただき、初任者研修や中堅教諭等資質向上研修会において後進の育成に携わっている。美術科という教科指導を通して

生徒にどのような力を付けていくのか、また、美術教育を次世代の担い手である若手教員にどう繋いでいくのか。常に自問自答している。

しかし、現状は少子化に伴い、美術科の一人配置の学校が多くを占める。授業計画、テスト、評価等について、新任及び若手の美術主任は、周囲に相談すべき相手が存在しない。非力ではあるが、彼らの悩みや不安を払拭し、自信を持って授業に臨んでもらえるような研修を企画している。

2 取組の成果

- (1) 教員は、研究授業の授業者を担ったり、年に1回授業を公開したりすることで、日々の授業を振り返り、自身の授業力向上に繋げることができる。中でも教科を超えて指導案を検討することは、双方にとって学びの場となる。さらに若手教員は、ミドル、ベテラン世代の教員から授業づくりのノウハウ等を学び、逆に、ベテラン教員は若手教員から ICT 機器の効果的な取り入れ方を学ぶなど、共に学び続ける研究授業や研修会となりつつある。
- (2) 変化が激しく、先行き不透明で多くの課題が山積する時代を生き抜く生徒にとって、今後必要となる力をいかに身に付けさせていくのかを考えることは、私たち教員にとっても、時代を先読みし、先見の明を養うための重要な機会と言える。次期学習指導要領で、「生きる力」を育むため、全ての教科で3つの柱が示された。それらの課題追求のために、教科等指導員として様々な研修会や講演会に赴いたり、次期学習指導要領を伝達したりしたことは、非常に自分自身の学びにも繋がった。

3 課題及び今後の取組の方向

私たち教員は、日々、自身の教育実践を振り返り、授業改善に努めるのが本来あるべき姿である。目の前にいる生徒も、時代の変化と共に孤立し、メンタル面の弱さが目立つようになってきたと感じる。このような生徒たちがこれからの時代を担っていくためには、様々な能力が要求される。次期学習指導要領にも「生きる力」が提示されているのには、大きな意味を感じる。

今後は、次の時代に向けて、俯瞰の目で学習指導要領を熟知していきたい。また、授業での学びが知恵となって活用できるような生徒の育成も心掛けていきたいと考える。一人一人の生徒たちが幸福な人生を送るためには、どのような力を付けていくことが必要とされているのかを常に考え、現状を踏まえた上で、研究の在り方を常に模索し、研究主任として、また、教科等指導員として有機的な研修の場をコーディネートしていく所存である。



スピーチを通した表現力の育成



OJT 研修で学びの時間を共有

**「ひょうごつまずきポイント指導事例集に係る授業改善と
読書活動推進加配教員としての図書館教育の推進」**

明石市立魚住東中学校
主幹教諭 山端 早百合

1 全国学力・学習状況調査に見られる兵庫県のつまずきの解消に向けての取組

(1) 取組の内容・方法

1年・・・「芸術作品の鑑賞文を書こう。」

(目標) 芸術作品を鑑賞し、自分が選んだ絵の魅力を鑑賞文で伝える。その過程で、類義語辞典や国語辞書、パソコンを使って類義語を調べ、言葉に対する興味を持ち、語彙を増やす。

(成果) ・言葉の多様性や奥深さに気づくことができた。
・自分の語彙数の少なさに気づき、言葉に関心をもつことができた。
・辞書やパソコンを使って、意欲的に類義語を探すことができた。

2年・・・「対義語辞典を作ろう」

(目標) 資料（主に国語辞典）を使って、対義語辞典を作成することを通して、言葉に対する興味を持ち、語彙を増やしていく。

(成果) ・目的に応じた資料（対義語辞典・類語辞典等）を選択することができるようになった。
・例文を考え互いに推敲することで、新しく得た知識（言葉）を適切な使い方で表現しよう意識できるようになった。
・辞書に対する興味が深まり、意味以外の対義語や類義語、用例までを意識し、記入するようになった。

3年・・・「ことわざカルタを作ろう」

(目標) 慣用句やことわざに関する知識を広げ、「伝統的な言語文化」の一部としての意味を知り、普段の生活の中に活用していけるよう、語彙を豊かにすること。

(成果) ・ことわざを使うことによって、自分の思いを豊かにわかりやすく伝えるが出来るようになった。
・絵や吹き出しを作ることで、ことわざを身近なものと感じられた。
・曖昧に覚えていたものや思い込みで使っていたものを正しく理解し使えるようになった。

全学年・・・語彙力向上プリント「ことのは」

(目標) 語彙をふやし、表現活動に活かしていくことができる。

(成果) ・辞書を使い、言葉の意味調べや用例を記録していく中で、少しずつ正しい使い方が理解できるようになっていった。

・選択した語句を使い空想作文を創作することは楽しみにしており、「書く」ことへの抵抗感が減っていった。

(2) 取組の成果

①ひょうごつまずきポイントの実践事例を作成するにあたり、指導内容やつまずきが予想されるところの指導の工夫を行った結果、生徒たちの主体的・協働的な学びの姿が見られた。また、言葉に対する興味やそれを日常の表現活動に活用しようとする意識が高まった。

②語彙力向上プリント「ことのは」は、今年度から全学年で実施されることになり、「書く力」

を系統立てて伸ばす手だてを3学年通して教える体制ができた。

- ③「ことのは」の作文は、担当者がABC評価に加えて、各自の作文に励ましのコメントを書くことによって、書く意欲はついてきた。また全体共有の時に仲間の書いた「文章名人」を読み参考にしていた。逆に、間違った使い方をしている文を全体で確認し、正しい使い方を提示することによって、言葉の感覚が磨かれていった。

「ことのは」の取組については、8月の実践発表以来、他校からの問い合わせもあり、本校以外に、東播地区の学校に少しずつ広がりを見せていることはうれしいことである。

(3) 課題及び今後の取組の方向

- ①「言葉」や「書く」ことに対する意識は向上したものの、質的な向上はまだ不十分である。

＜そのための手立て＞

- ・獲得した語彙を短作文やスピーチなどの表現活動につなげるための手だて
- ・推敲するための観点の明確化
- ・班活動における班内の役割分担
- ・「質問力」の鍛え方
- ・評価の仕方（効率化も含めたよい評価法があるのか）

- ②国語科の学びを9年間で育てていく方向で**小中連携の取組**をしていきたい。

＜そのための手立て＞

- ・各学年の年間指導内容を互いに知ること、重複事項を減らし、応用のための時間に使う。
- ・話型の引き継ぎをし、授業規律をつないでいく。
- ・系統立てた「書く」取組の実践を行う。
- ・「辞書」の活用を小中共通で行う。
- ・読書活動の推進を小中で行う。
- ・今後も「ひょうごつまずきポイント指導事例集」の活用を推進し、市内や東播磨地区の先生方と共に、授業改善を行う研修の場づくりが必要である。



2 読書活動の推進

(1) 取組の内容・方法

「読書センター」と「学習・情報センター」としての機能を果たしていけるように、推進教員が中心となり、「読書活動の推進」を図ってきた。その結果、図書館利用率が大幅に上昇し、図書

の稼働率も高まっている。しかしながら、視聴覚教育部の協力のもと、大型テレビとノートパソコン、プリンターを設置し、調べ学習等に利用しやすい環境を整えたが、授業での活用はたいへん少なかった。また、図書館に対する職員の関心も低いと思われる。そこで、今年度は、読書センターとしての機能に加え、学習センターとして環境を整備し、授業での活用や調べ学習用の図書の提供方法を紹介し、職員に対しての啓発を図っていった。また、教職員が図書館に足を運ぶ手だてを行い、図書館への関心を高めていった。

学校図書館を活用した授業実践

『ビブリオバトル（知的書評合戦）』

～ 私のおすすめの1冊を紹介しよう ～



学級ビブリオバトルの様子



学年ビブリオバトルの講評（明石市立図書館館長）

【 学級ビブリオバトルから学年ビブリオバトルまでの流れ 】

- ・「おすすめの本」を決め、スピーチ原稿を作成する。
 - ・班内発表会を行う。相互評価を行う。
 - ・班代表6名によるスピーチを聞く *本（特に表紙）が見えるように、書画カメラを使い拡大する。
 - ・どの本が一番読みたくなったかの投票を行う。学級代表の決定。
 - ・学年全体のチャンプ本は決定せず、ビブリオトークとする。
- *学年ビブリオバトルでは、プロジェクターを使い表紙を拡大し、視覚的にも興味を持たせた。
- *学年ビブリオバトルの時に、明石市立図書館の館長さんにきていただき、講評していただいた。
- ・明石市立図書館と連携を図り、後に各クラスの班のチャンプ本に選ばれた本を複数冊と同作者の他の作品を“集団貸出”してもらった。

【 取組の成果と課題 】

- ビブリオバトルという形式をとることによって、スピーチへの意欲が高まった。
 - 読書への興味関心が高まり、図書室への来館者数・貸出冊数が伸びた。
 - 明石市立図書館との連携を図ることができた。また学年代表2名がひょうご子ども読書活動推進フォーラム播磨東地区のビブリオ大会に参加した。
- △スピーチ力の差が大きく、今後も機会を増やし、慣れていくことが必要である。
- △スピーチの内容を深めるため、質問力をつけることが必要である。

【 学校図書館とのかかわり 】

教室から離れ、図書館という本に囲まれた空間で行うことによって、「ビブリオバトル」に集中することができた。また、図書館には、大型テレビが設置されているため書画カメラと接続して、表紙や本のページを拡大して見せることも可能になった。

本だけでなくパソコンやテレビなどを常時設置しておくことは、「学習センター」としての機能をより効果的にしている。

(2) 取組の成果

- ・読書活動の推進を、学校全体に広めるために行った取組が効を奏し、魚住東中学校の図書館を「見て、使う」ことが増えた2年であった。
特に、担任の先生は、学期ごとに「学級文庫」の選定を学級図書委員と一緒にしてもらい、足を運んでもらった。それ以降、学級の生徒がどのような本を読んでいるか興味を持つようになり、教師も同じシリーズの本を読む姿が見られた。
- ・図書館のレイアウトや図書の配架については、明石市読書推進課の職員の方にアドバイスをいただきながら、図書委員の手によって行っていた。作業をしながらお互いが本のことを話す姿があり、委員自らの読書意欲が高まったようである。
- ・生徒たちは、図書委員会の仕事を主体的に協同的に行うことでやりがいを感じている。学期ごとに改選される委員選挙で、図書委員のリピーターは多い。
- ・学校図書館を使った授業は、国語科は3学年にわたり実施され、その他英語科（1年生）や総合学習（2年生）で実施された。常時設置されているノートパソコンやプリンター、大型テレビも活躍した。
- ・昼休み10分間だけの開館であるが、毎日たくさんの生徒が来館し、利用者数の大幅増加が見られた。

(3) 課題及び今後の取組の方向

読書推進事業が今年度で終了するが、2年間だけの一時的なものに終わらせることなく、今後も「図書室に行けば人がいて、魅力ある本がある」といった環境が維持できることが大切である。そのために、まず、図書館業務をチームとして取り組んでいくことである。特に図書のデータ管理や更新の仕方などは、図書館の心臓部といえる部分であるので、複数の職員が関わっていくことによって、スムーズな図書館運営を測っていくことができる。

次に、図書委員の主体的な動きを作ることである。図書の配架や書架のレイアウトなど、生徒に委ねることによって、「どこにどんな本があるか」を委員自らが知り、生徒から生徒への口コミによる「本の紹介」が行われていった。教師からの紹介よりも、同世代のおすすめによる方が共感を得られるのかもしれない。

三つ目は、学校図書館を使った授業は、今年度増えたとはいえ、まだまだ偏りがある。年度当初に各教科で必要とする図書の選定を行ってもらい、年間授業計画に組み込んでいただく取組が必要である。公共図書館との連携によって、調べ学習に必要な本をそろえる手だてがあることなど、もっと教職員に広めていくことが必要である。

最後に、読書活動は、生涯にわたって行われる活動である。そこで、もっと地域の図書館のサービスを利用することによって、公共図書館を身近な施設にしていきたい。そのために、外部講師として「読み聞かせ」や講演会の講師として招聘していきたいと考えている。

若手教員とともに考えるこれからの技術科教育

三木市立吉川中学校

主幹教諭 梶尾 保

1 取組の内容・方法

(1) はじめに

平成7年に三木市で技術科教員として採用され、今年度で教員生活22年を迎えた。技術・家庭科は、どの生徒にも学習を成立させること、どの生徒にも良さがあってそれを引き出し、伸ばすこと、生徒が心の底から学習の喜びを感じ、やる気を示すよう、質の高い主体的学習を展開すること等を実現させようという教育理念に基づき指導を行っている。昭和40年頃に発足した兵庫県技術・家庭科研究会は、毎年各地区研究大会、県大会を開催し公開授業の参観や各地区の具体的な研究実践が発表されている。私も平成15年度、六甲アイランドにある神戸市立向洋中学校で開催された県大会の分科会において実践発表を行った。

また、平成26年度から技術科の教科等指導員に県教育委員会から任命され、初任者研修、2・3年次研修の講師を3年間務めた。この経験において若手教員とともにこれからの技術科教育を考える経験をさせていただいたことは、これまでの私自身の技術科指導を振り返るとともに、平成33年度から全面実施となる次期学習指導要領改訂に伴う「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の積極的な研修の機会となった。

現在は、本校生徒の学力向上をめざし、「主体的に学び合い 集団を育て 個を高める教育」を研究主題として主体的に課題解決に取り組む姿勢を身につけさせ、思いや根拠をしっかりとって活発な意見交換（対話）ができるよう学校全体で取り組んでいる。

(2) 第31回兵庫県中学校技術・家庭科研究大会（神戸大会）での実践発表

研究のテーマは「Web ページの製作を通して、相互評価による表現する能力と評価できる能力を養う」であった。素材としては自分たちが毎日生活している「学校」を選び、「学校案内をつくろう」と題してWeb ページで身近な情報を発信することとした。

まず、情報活用能力を5つの段階に分類した。分類内容は、コンピュータリテラシーと言われる「基本的な操作能力」、「情報を収集する能力」、「情報を加工する能力」、「情報を表現する能力」、「評価できる能力」である。「情報を収集する能力」では、デジタルカメラやデジタルビデオの活用、過去のアルバムや学校要覧等からの情報を発掘し、アイデアを育成することを目指した。「情報を加工する能力」では、AVI・JPG・WAV といったファイルを肖像権に配慮しながら、情報の配信に適した内容、サイズに加工することに力を入れた。「情報を表現する能力」では人にやさしいWeb ページの作成を目指した。そして、自分たちの作成したWeb ページを相互評価する中で「評価できる能力」を養っていこうと考えた。その中で、情報を発信する喜びを感じさせることもねらいとした。また、その指導の中で情報モラル・マナーの育成を絶えず意識していくことに努めた。インターネット上には様々な立場・思想・信条の人々が存

在している。そのため、誰もが傷つけられたり、逆に加害者になってしまう危険性を秘めている。ブロードバンドの時代の中で真の情報活用能力とは何なのか、情報化社会を生きていくための資質とは何なのかを考え、技術・家庭科の授業の中で実践していった。

(3) 技術科の教科等指導員としての取組

〈初任者、2・3年目の教員が研修所で行う研修・授業実践研修の講師としての活動〉

平成26年度から初任者、2・3年目の教員が行う研修・授業実践研修が県立教育研修所で集中的に行われるようになった。その趣旨は、教員の実践的指導力向上に向け、講義、演習、協議、実習や公開授業に関する授業研究などを行うことである。

〈3年間の活動〉

ア 「ねらいに基づいた授業構成」(授業プランの作成、相互評価の演習と協議)

技術分野における材料と加工に関する木材の特徴についての単元を、各自で授業プランシートの展開部分を作成し、相互評価を行う研修を行った。

イ 「技術科の指導における充実の視点」(技術科における課題とその改善に向けての演習・講義)

木材の特徴や利用方法を知る場面での学習指導において、木材の特徴を理解させ、木材各部の名称や、木質材料の利点を知らせる指導案を作成し、発表をする演習を行った。更に師範授業を行い受講者へ振り返りの研修を行った。

ウ 「技術科の授業改善の方向性」(授業改善に向けた方向性の整理の講義と指導)

技術科における基礎的・基本的な知識と技能の習得、年間を見通したカリキュラム作成についての講義と、はんだ付け等、危険が伴う工具や機器の安全な扱い方についての実習の指導を行った。

エ 「技術科における問題解決的な学習を取り入れた授業づくり」(演習と講義)

エネルギー変換に関する技術分野と情報に関する技術分野から問題解決的な学習を通した思考力、判断力、表現力を育成させるため、各自で授業プランシートの展開部分を作成し、相互評価を行う研修を行った。

オ 「言語活動を意図的、計画的に位置付けた授業づくり」(演習と講義)

材料と加工に関する技術分野の木材の切断場面を想定し、のこぎりの構造やしくみを理解させ、正確にのこぎりびきができる方法を生徒自ら考え、表現させるために各自で授業プランシートの展開部分を作成し、相互評価を行う研修を行った。

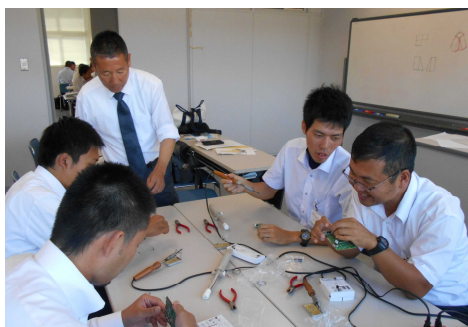


写真 1



写真 2

(4) 平成28年度 東播磨・北播磨技術家庭科研究大会（三木市大会）での取組

次期学習指導要領の移行期に全国大会を開催する東播磨・北播磨研究会や県研究会では、技術・家庭科での基礎・基本的な「知識や技能」を持続可能社会の実現や現在の社会にどう関わりをもたせるか、探究することを「学びに向かう力」と定義しているが、「思考・判断・表現」で深い学びにしていけることが、最適の方向性であると三木市中学校技術・家庭科研究会で提案した。その提案は以下のア～ウの3点である。

ア 単元ごとに、持続可能社会や循環型社会の実現に向け、学習した知識・技能を使い、社会への提案やあるべき社会を思考・判断・表現させる場面をつくる。

イ 「アクティブラーニング」の方法研究より、生徒は主体的になれたか、対話で自分の考えが深まったか、社会のあり方を考えたか、について数年間継続して研究する。

ウ 「さつま芋の空中栽培」(近大鈴木教授発案)、「ホセムヒカ大統領のリオ会議演説」などで、技術・家庭科での学びを社会的に広げようとした試みへの正しい評価をし、来年度の加西大会、2年後の明石での全国プレ大会へとつなぎたい。

今回、平成28年度 東播磨・北播磨技術家庭科研究大会（三木大会）において、現行の学習指導要領の内容にある「技術にかかわる倫理観や新しい発想を生み出し活用しようとする態度の育成」として、動画「鈴木教授の思い」を鑑賞後した。その後持続可能社会に向け、『さつま芋を農地や家以外で、どこで栽培するか』という課題で、生徒たちはA2版のホワイトボードを使ったグループワークを行い、発表した。

2 取組の成果

(1) 第31回兵庫県中学校技術・家庭科研究大会（神戸大会）での実践発表

課題が新入生に向けての「学校紹介」という身近なものであったため、内容の検討・役割分担・情報の収集そして、Webページの作成と各段階とも生徒たちが主体的に学習を進めることができた。そして、プレゼンテーション後の相互評価では、他の意見に耳を傾けさらにより作品に仕上げるための校正作業に入るなど情報発信に向けての意欲的な態度の育成の一助となった。授業の中では、高度な技術を希望する生徒（音声・映像の編集）とコンピュータに対して苦手意識を持っている生徒に大きな技能的な差が生じ、一人の教師では対応に苦慮した。グループ内での役割を工夫すること等で、やる気を失わぬよう配慮していったが、複数指導で、このような面をカバーしていくことが望ましいと思われる。今回のWebページについては校内だけの公開であるが、一般に発信するにあたっては著作権や個人情報などモラルやマナーについて、慎重に対応しなければならない。その中で、技能だけでなく真の情報活用に対する資質を養っていかなければならないと感じた。

(2) 技術科の教科等指導員としての取組

初任者、2・3年目の教員の授業実践研修講師としての活動

A教諭 金属製品の設計・製作(文鎮の製作)。

文鎮の製作を通してものづくりに必要な基礎的技術を身につけさせることや、技術が

果たす役割について理解を深めさせる授業を展開した。

B教諭 情報処理の手順を考え、簡単なプログラムが制作できること。
計測・制御用補助教具 **hidapio** を使用し、計測・制御のしくみを理解させ、プログラムの基礎的・基本的な知識や技能を習得する授業を展開した。

C教諭 プログラムによる計測・制御。
プログラミング教材スクラッチを教材として順次処理及び繰り返しのフローチャートを図式化させる授業を展開した。



写真 3



写真 4

講師として3年間、若手教員の実践的指導力向上に向け、講義、演習、協議、実習など様々な研修の形態で指導してきた。指導した若手教員が校内研究授業や第45回兵庫県中学校技術・家庭科研究大会(丹有大会)において、「情報と私たちの生活(情報に関する技術分野)」を題材に実践発表するなど、研修や授業実践研修での取組の成果が少しでも生かされたのではないかと考えている。

(3) 平成28年度 東播磨・北播磨技術家庭科研究大会(三木市大会)での成果

2年後の全国大会に向け、「生活や社会につながる課題を発見・解決する主体的・対話的で深い学びの創造」(案)をサブテーマとしている県技術家庭科研究会の方向性を確立するための一助となる取組ができた。ありがちな教科書とワークによる知識の切り売りではなく、生物育成では基礎基本的な知識・技能を実践的・体験的な活動を展開することで身につけ、それらを活用して「持続可能社会の実現」に向けて思考力・判断力・表現力を働かせ解決していく授業を展開し、新たな方向性を示すことができた。また、本研究大会の授業実践発表者は、初任者を、2・3年次研修で指導したC教諭であった。

3 課題及び今後の取組の方向

ベテラン教員の大量退職、若手教員の大量採用により経験の浅い教員が増えたことや教員の年齢構成の不均衡により、知識・技能の継承が図りにくい状況である。しかし、兵庫県の技術・家庭科研修部会では、先にも述べたように毎年、各地区の研究発表や県大会を通して実践発表を行っている。今後も各研修会に積極的に参加し、「若手教員とともに考える技術科教員」となるように取組んで行きたい。

豊かな人間関係を育む生徒会活動

神河町立神河中学校
教諭 上 月 里 香

はじめに

長きにわたり特別活動に関わる中で、行事や生徒会活動で生徒は育つと強く感じる。生徒会活動がうまく機能している学校には、生徒同士も互いを認め合う心が育ち、あたたかい雰囲気が流れているように思う。

ここに紹介させていただく取り組みは、生徒指導上の諸問題が山積していた前任校での取り組みである。問題の多い学校に対する地域の目は、決して肯定的なものばかりではなかった。生徒会活動は停滞ぎみで生徒の自尊感情も低かった。そんな中、「西中魂（プライド）」を生徒会の合言葉に特別活動担当として、生徒会担当や諸先生方とともに進めた活動の一部である。

1 取組の内容や方法とその成果

(1) 西の日活動

毎月24日（にしの日）に地域に出かけて清掃・街頭募金などのボランティア活動を行う取り組み。『地域の一人として自分が存在することを自覚する』ために非常に有効な活動となっている。地域の方々からも高い評価をいただいております、この活動は生徒会を支える大切な柱となっている。

専門部会でその月の活動内容を考えたり、生徒会本部が、必要な活動を提案したりして、内容にも工夫をこらしている。

今年で10年目を迎えるが、今ではすっかり定着しており、ボランティアを希望する生徒も毎回150名を超えている。



(2) 今月のMVPは誰だ！？

月に1度、自分の周りで頑張っている生徒を各学年から選び、その月のMVP（とても頑張った人）を決める。行事等での活躍だけでなく、清掃を頑張っている人、授業中発表を頑張っている人など多くの生徒が認められるように工夫している。

今月のMVPアンケートの結果は、生徒会新聞で紹介される。新聞には、「〇〇さんが〇〇に頑張っていた」という記事が多数掲載される。新聞を読んでいる生徒の眼はとてもおだやかである。互いを認め合うことができ、自尊感情を高めるのに役立っている。

また、「今月のMVP」に選ばれた生徒は、全校集会で表彰される。自分だけのために考えられた表彰状を手にする生徒は誇らしげである。

☆ 今月のMVPは誰だ！？ ☆

生徒会本部

西中には頑張る、という人がたくさんいます。
例えば「授業で頑張る」「掃除で頑張る」「給食で頑張る」...などです。
そんな頑張る、という西中生を月に1回、選んでもらい
生徒会新聞で紹介したいと思います。同じ学年でも
違う学年でもOKです。理由も書いてください。うれいでも
皆さんもMVPになれるように頑張ってください。

1 授業とホームも裏面にはうけていたのは誰？

年 組 くん さん
(理由:)

2 掃除と頑張る、そのほかの誰？

年 組 くん さん
(理由:)

3 みんなはあまり知らないけど実はすごく頑張っているのは誰？

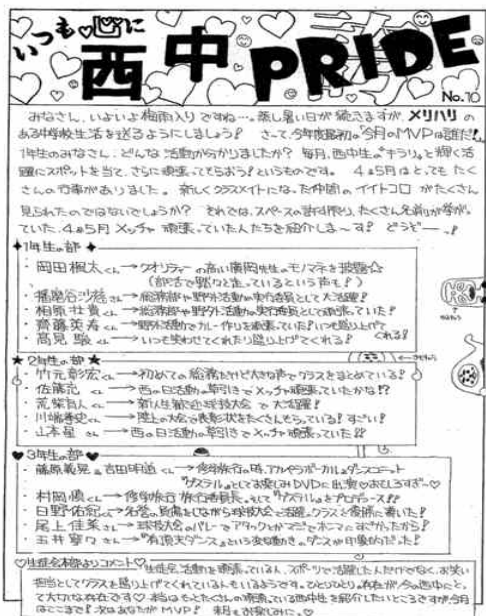
年 組 くん さん
(理由:)

4 最近「ほんまええやば〜」と思ってるのは誰？

年 組 くん さん
(理由:)

5 「あの子がいかにいい子と憧れる尊敬するの？」

年 組 くん さん
(理由:)



表彰状

平成28年4・5月

最優秀生徒賞

1年生の部 1年1組

あなたは野外活動の実行委員長として72回生をまとめました。また、レクではコーラを一気飲みをして他の生徒を驚かせ、野外活動を盛り上げました。これからも西中の行事をさらに盛り上げ、頑張ってください。

平成28年5月30日

福岡市立福岡西中学校

生徒会本部役員一同

(3) 笑顔満開プロジェクト

5年前の生徒会が「いじめのない西中」にするためにと取り組んだ活動である。

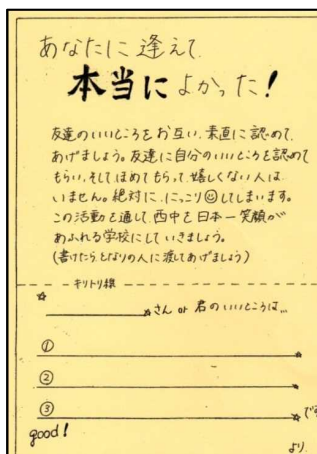
まず、全校生にどんな学校にしたいかをアンケートするとともに、「物を隠す」「あだ名を呼ぶ」といった行為に対する意識調査を行った。

「全校生が、毎日笑顔で過ごせる学校」「明るくさわやかな福岡西中学校」をつくりたいという生徒の願いがうかがえた。その一方で些細な行為が相手を傷つけていることに気づいていない生徒が多いことも分かった。そこで、取り組まれたのが「笑顔満開プロジェクト」である。

◎ あなたに逢えて本当によかった（平成26年度）

全校生徒に下のようなカードを配布、〇〇さんのいいところを3つあげて下さいという内容。集められた用紙を生徒会本部でまとめ、全校生に返した。自分のいいところが記されたカードを見た生徒は、ニコニコしながら書いてある内容を読んでいる。

下の「えがおまんかい」の写真は、自分のいいところを読み、それぞれが感想を書いた紙を貼り付けて掲示したものである。



- 1年生
- 自分にもいいところがあるな、と思った。
 - ほめられ、自分もうれしかったし、相手もうれしかったと思う。
 - 普段、話さない子と仲良くなった。
 - 自然と、ニコニコした。
 - いいところたくさんあった！
- 2年生
- 私も、いいところを友達にあげられた。
 - みんな笑顔になった。
 - 今度は他のクラスもやりたい。
 - 自分が相手にどう思われているか知れた。
 - みんな素直に書いてくれた。
- 3年生
- 楽しかった、嬉しかった。
 - 渡すのが恥ずかしかった。
 - うれしくて、うれしくて、言葉にできない。
 - この企画、いいねー！



◎ ありがとうって伝えたくて(平成27年度)

◎ ごめんね、ありがとう(平成28年度)

平成27年度は、「伝えたくても伝えられなかったありがとう」を、平成28年度は、「照れくさくて言えなかったありがとうやごめんね」をカードに書いて提出。その内容を放送で発表した。



笑顔満開プロジェクトまとめ

プロジェクト開始当初の生徒会は、「こんなことで本当にみんなが笑顔になるのだろうか?」と心配していたが、活動をすすめるにつれて手応えを感じるようになった。この活動により、学校が柔らかい空気に包まれる時間を生徒と職員が共有できている。

「いじめ」をなくすためには、豊かな人間関係を形成し、「いじめを生まない土壌づくり」を行っていくことが大切である。いいところを見つけあったり、感謝の気持ちを伝えあったりすることで、仲間として互いを認め合うことの大切さや、一人ひとりが大事にされていることに気づけたのではないかと考える。

(4) SNSに関するルール作り

スマートフォンや iPod TOUCH などの所持率が高くなり、生徒間での SNS (特に LINE) を介してのトラブルが増えてきた。

そのため、SNS 利用に潜む危険等についての講演会を3年連続で催した。講演の中で、「使用のルールを君たちで決められたらいいですね」というコメントがあり、生徒会本部が「それでは、僕たちで作しましょう!」と、ルール作りが始まった。生徒会本部が中心となり SNS 委員会を立ち上げた。そして、全校生がルール作りに参加し、何度も話し合いを持った。

【SNS委員会メンバー】 生徒会本部 専門部部長 各クラス総務
【協力教師】 特別活動・生徒会担当教師 生徒指導担当教師
総務部担当教師

I 実態調査実施(アンケート)

実態調査の集計結果から西中の現状と使用上の問題点をまとめる。

II 第1回学級討議

- ① SNS 使用に関するアンケート結果について
— 西中の現状と問題点
- ② SNS を使用する上で不安なことや心配なことについて



SNS委員会

クラスでの討議の様子や出てきた意見の報告。
次のルール作りに備え、ポイントとなる部分の確認。



Ⅲ 第2回、第3回学級討議

西中のルールを考える

- ① 個人の意見を出し合う ② 班で話し合い意見をまとめる
- ③ 班ごとの意見を討議し、クラスの意見をまとめる



SNS委員会

「ルールなど作らなくても良い。」「利用は自己責任」「作っても守るのか。」などの意見もあったことが報告される。

SNS委員会で話し合い、「自分や友達、まわりの人を守るためには必要」「みんなが守れそうなルールを考えて行くことが今回の取り組みの大切なポイントである」と方向を決定。クラス全員にも伝える。そして、2度の学級討議を経て出されたクラスからの提案をもとに「西中SNS憲章（仮）」を作る。

Ⅳ 第4回学級討議

- ① SNS委員会原案の確認ー1つ1つ確認していく。
- ② より良いルールにするための改善点を考える。



SNS委員会

各クラスで出た意見を基に改善し、ルールを完成。名前も考え、「SNSのおきて～福岡西中7つの心得～」と決定する。

Ⅴ 全校集会

「誰もが安心してSNSを利用できるように、みんなで考えたルールであり、意識を高め、守っていくことが、西中生としての誇りだ。」と生徒会長が宣言した。

その後は、毎週金曜日に週番部がルールを守っているかどうかをチェックする活動を継続している。

ルール作りを通して

このルール作りは新聞でも大きく報道された。「日が変わったらしない」というルールは甘いのではないか、という声も聞こえてきた。しかし、このルールは生徒が自分たちの実態をもとに考え、決定したものであり、そこに意義があると考えます。

すでにルール制定から2年半を経過した。今の在校生はルール作りに直接かわってはいない。毎年、ルール制定の日を「メモリアルデー」とし、ルール作りの経過を振り返っている。ルール作りの意義をいかにして継承していくかが今後の課題といえる。



4 課題及び今後の取組の方向

上記した取組等によって、地域から認められ、一人ひとりが所属感、存在感を感じることで、生徒は自信を持ち、生き生きと学校生活を送れるようになってきた。

生徒会の自主的な取組が活発になるに従って、行事や学校全体に「勢い」を感じるようになってきた。かつて、閉塞感のあった生徒会活動や行事も変貌し、学校のかもし出す雰囲気もあたたかく優しいものになった。

しかし、友人間のトラブルが皆無となったわけではないし、不登校生や不登校傾向の生徒がいないわけではない。また、今年度より、着任した本校も前任校と同様、友人間のトラブルや不登校生の問題は同じようにある。今度は現任校で、互いを認め合う仲間づくり、すなわち「豊かな人間関係づくり」を通して、「この中学校が好き」「うちの中学校ってすごいやろ!!」と母校に誇りを持つ生徒作りの手助けをし、今以上に地域から愛される学校にしていきたいと考えている。そのために、今後も生徒の豊かな発想をもとにした自主的な取組を応援していきたい。

小・中・高の系統性のある英語教育をめざして

朝来市立生野中学校
教諭 藤本 美千代

1 はじめに

本校は、平成26年度から4年間、市内の5校（朝来市立生野小学校、山口小学校、中川小学校、朝来中学校、兵庫県立生野高等学校）と共に、文部科学省より外国語（英語）教育強化地域拠点事業としての研究開発校の指定を受けた。この事業に関わり、本市では、「国際社会の一員として様々な分野で活躍できるグローバル人材の育成」を研究テーマとし、各校種の目指す児童像・生徒像を設定した上で、小・中・高の系統性のあるカリキュラムの作成、指導力の向上、評価方法の確立等に取り組んだ。

私は研究主任として、中学校が小学校との学びの連結、高等学校への連携をする本事業の要であるという認識と使命感をもち、本事業に係る取組を推進してきた。

2 取組の内容・方法

(1) 目指す児童・生徒像の設定

校 種	目指す児童・生徒像
高等学校	英語を用いてディベートをしている生徒
中 学 校	英語を用いてプレゼンテーションをしている生徒
小学校（高学年）	英語を用いてコミュニケーションを楽しんでいる児童
小学校（低学年）	英語を用いて楽しくコミュニケーションをとっている児童

(2) 小・中・高一貫した CAN-DO リストの作成

各校の担当者と共に、4技能（5領域）に関する小・中・高の一貫した CAN-DO リストを作成した。（一部抜粋）

目指すこと CEFR-J		英語を用いてディベートをしている生徒			英語を用いてコミュニケーションを楽しんでいる児童		
B2.1	3 年 次	やりとり 時事的な話題についてディベート することができる。	発表(Speech) 色々なテーマについて相手の意見 を聞いた後、質問したり、それに 対しての自分の意見を述べるこ とができる。	発表(Presentation) 自発的にテーマを選び、それにつ いて自分の意見を即興的に発表で きる。	A1.2	6 小 年 次	将来の夢やオリンピックパリンピッ クでみたい競技などについて、慣れ親 しんだ表現を使って、自分の意思を伝 えたり、相手に意見を求めたりする3 ～4往復程度の簡単なやりとりする ことができる。
	B1.2	2 年 次	身近な話題について簡単な内容の ディベートができる。	色々なテーマについて読んだ内容 について相手に自分の意見を正確に 述べるができる。		5 小 年 次	丁寧な要求の仕方や自分のあこがれ の人についてなど、慣れ親しんだ表現 を使って2～3往復程度の簡単なやり とりすることができる。
	B1.1	1 年 次	様々な話題について、簡単な意見 交換ができる。	短い読み物や記事を読んで、メモを 見ながら概要を説明することができる。		4 小 年 次	自身思い出や中学校生活などにつ いて、日常生活に関わる簡単な内容 の話題について、3～4文程度の発表 をすることができる。
		英語を用いてプレゼンテーションをしている生徒			英語を用いて楽しくコミュニケーションをとっている児童		
A2.2	3 中 年 次	行ったことのある場所について、そ こがどのような場所で行ったこと があるか会話することができる。	行きたい場所やそこでしたいこと について、メモを見ながら発表するこ とができる。	日本文化について発表資料を英語 で作成しその資料を見せながら発 表することができる。	A1.1	4 小 年 次	持ち物や欲しいものなどについて、1 ～2往復程度の簡単なやりとりする ことができる。
	A2.1	2 中 年 次	自分のお気に入りの店や場所につ いて、会話することができる。	メモをみながら自分の将来の夢や 希望について、原稿を基にスピー チすることができる。		3 小 年 次	好きなものや数などについて、1往復 のやりとりすることができる。
	A1.3	1 中 年 次	自分の得意なことについて短い会 話することができる。	自分の大切にしているものにつ いて、準備をしたうえで発表するこ とができる。		PreA. 1	自分の感情や状態、好きなものなど について、1文程度の発表をすることが できる。

(3) 各単元に落とし込んだ評価規準の作成

小・中・高で教科書の内容に沿い、新学習指導要領に合わせ、4技能（5領域）についての評価規準を作成した。以下は中学校2年生 Lesson1 の評価規準である。

第2学年					
Lesson 1	Listening	Reading	Speaking(1方向)	Speaking(やりとり)	Writing
知識・技能	一般動詞の過去形を理解した上で、「春休みの出来事」についての発表の内容を聞き取ることができる。 旅行に関する語句を聞き、理解することができる。	一般動詞の過去形を理解した上で、「春休みの出来事」についての会話の内容を読み取ることができる。 旅行に関する語句を語句を読み、理解することができる。	一般動詞の過去形を理解した上で、「春休みの出来事」を伝えることができる。 旅行に関する語句を正しく言うことができる。	一般動詞の過去形を理解した上で、相手の話を聞き、質問したり、質問に答えることができる。	一般動詞の過去形を使って、春休みについての作文を書くことができる。 旅行に関する語句を正確に書くことができる。
思考力・判断力・表現力など	一般動詞の過去形を含む相手の話を聞き、その内容を的確に理解することができる。	一般動詞の過去形を含むハワイ滞在の物語文を読み、その概要を要約することができる。	一般動詞の過去形を含む文を使って、春休みを振り返り、事実や思いを形成・再構築し伝えることができる。	一般動詞の過去形を含む文を使った春休みについての話を聞き、それについての自分の感想を伝えることができる。	一般動詞の過去形を使って、春休みについての作文を時系列に書くことができる。
主体的に学習に取り組む態度	一般動詞の過去形を含む「春休みの出来事」についての発表に関心を持って聞き、その意図や気持ちを理解することができる。	ハワイ滞在の物語文を自ら進んで読み、ハワイの伝統文化について考えることができる。	春休みについてを聞き手に伝えるように自ら進んで発表することができる。	春休みについての話を聞き、思い出を共有しながら感想を伝えることができる。	春休みについての作文を、読み手に伝えるように配慮しながら自ら進んで書くことができる。

(4) 講師招聘研修の実施

本事業では、関西大学外国語学部長の竹内理教授、兵庫教育大学吉田達弘教授の指導を受けた。一年間に各校1～2回程度の講師招聘研修を行い、校内ならびに市の内外にも案内を出し、広く教職員の参加を求め、研修を深めることができた。

小学校の校内研修はレベルが高く、協議の柱を立てそれに基づいての議論を参観したことは、貴重な経験となった。また、以前は小学校、高等学校の授業を見ることは少なかったが、この事業を通して互いの風通しもよくなり、小・中・高の系統性をより意識した授業づくりに役立った。さらに、小学校での指導方法、内容を知ることが学びの連結に不可欠であることも再認識できた。同じことは高等学校においても言える。

(5) 定期的な担当者会の実施

市教委のバックアップにより、月1～2回、担当者会をもつことができた。ここでの情報交換やCAN-DOリストの作成等は、本事業を進めるに当たって不可欠であった。また、小学校からの質問や高等学校からの大学入試の情報提供により、広い視野に立って本事業を推進することとなった。

バックアップは市教委だけでなく、所属校からもあったことがとても大きい。担当者会のため学校を留守にする間、他の教職員の負担は増えるにもかかわらず、快く送り出してくれた。市教委、所属校の高い同僚性が本事業の肝であった。

(6) 中央研修への参加により指導力の向上

平成27年度文部科学省英語教育推進リーダーとして、中央研修に参加し、4技能の言語活動を通した指導力の向上を主として学んだ。特に生徒の総合的なコミュニケ

ーション能力の育成、英語を用いた言語活動が中心の指導方法等は非常に勉強になった。2週間の中央研修を経て、翌年より但馬地域の英語科教員に対し、伝達講習を4回行った。自分で学んだことを地域の教職員に伝えることにより、さらに自分の中で学んだことが身についた。また、この中央研修では、自分がそれまでに行ってきた指導の方向性が間違っていなかったことを再確認できたことに加えて、生徒の力をさらに伸ばせる指導方法を学べたことが大きかった。

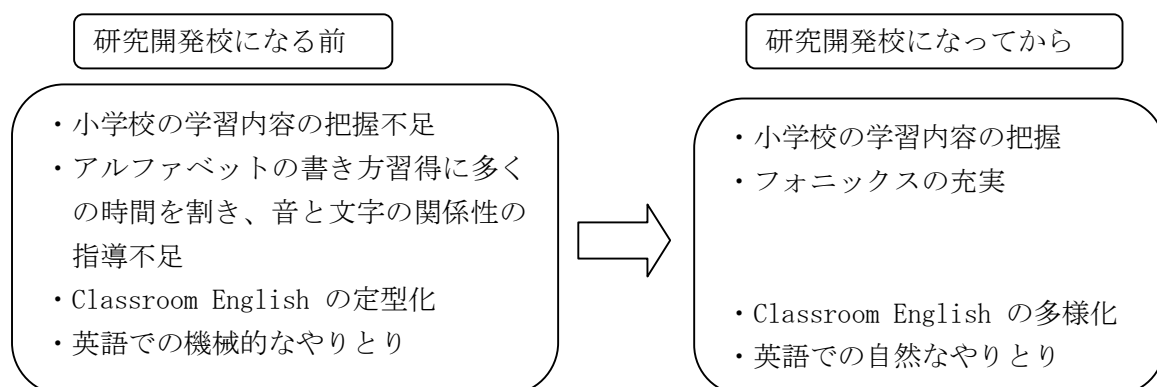
3 取組の成果

研究開発校となってからの本校を取り巻く英語教育は大きく変化した。文部科学省が発表している「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」の中にも「授業を英語で行うことを基本とする」とあるが、それは教員が一方的に英語を話すのではなく、生徒から教員へ、生徒から生徒へという方向も視野に入れている。

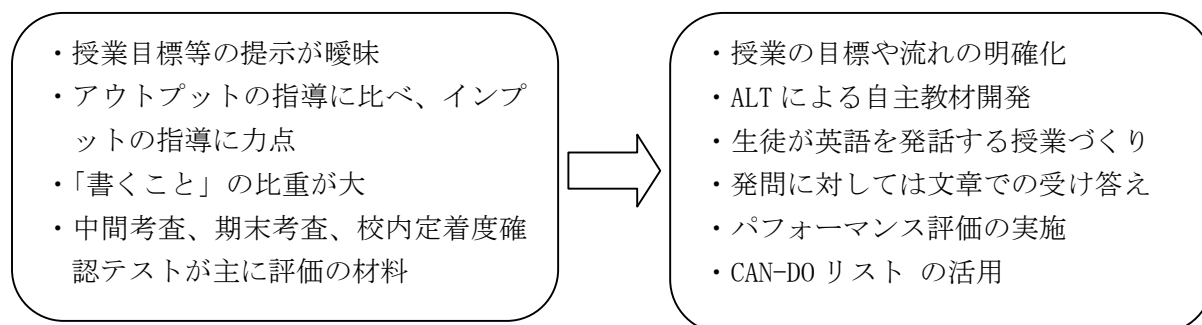
本事業では、各校の目標として、「生徒が英語で発話する時間を増やす」ということについて、こだわって行ってきた。以下に教師、組織、生徒の変容を示す。

(1) 教師の変容

ア 学びの連結部である中学1年生の年度当初の指導について



イ 全学年の指導について



ウ 4年間を通して見えてきた成果と課題

<成果> ・授業の見通しを明確にした指導ができた。

・コミュニケーション能力を重視した指導ができた。

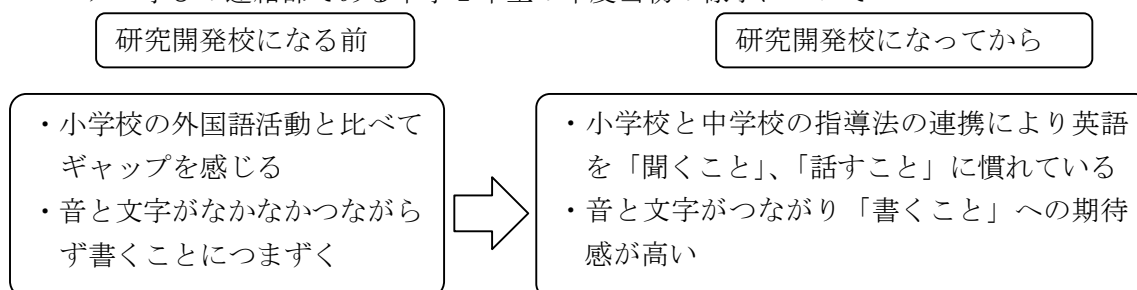
<課題> ・新学習指導要領の趣旨及び児童生徒の実態を踏まえた校種間連携の充実

(2) 組織の変容

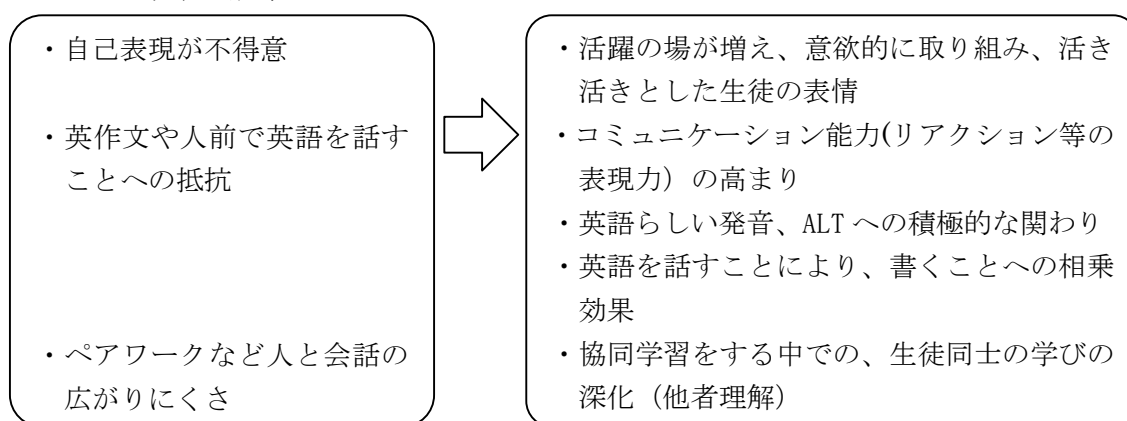
- ・ 学校全職員でベクトルを同方向に向け研究を深めることにより、教科の専門性や所属する学年の枠を超えて意見を出し合い、互いに高め合う組織集団が形成された。
- ・ グローバル人材育成に向けた研修テーマを掲げることにより、具体的な課題を設定した校内研修を通してより実践的なものへと深化させることができた。
- ・ 全教科、全領域で言語活動を取り入れたカリキュラムを編成することにより、生徒の主体性や学びに向かう力を引き出すことに成功した。
- ・ 専門教科の枠を超え、互いの授業参観をする機会が増えた。
- ・ カリキュラムマネジメントにより教科間の指導内容に連続性をもたせることで、より深い指導を行うことができた。

(3) 生徒の変容

ア 学びの連結部である中学1年生の年度当初の様子について



イ 全学年の指導について



4 課題及び今後の取組の方向

この4年間の指定研究では、予算が確保された中で安心して研究開発を進めることができた。指定研究がなくなる今後は現状の予算確保が難しく、生徒の英語力を客観的に測るための外部試験等の活用も困難となってしまう。

しかし、この4年間の取組が新学習指導要領を踏まえた今後の小・中学校における外国語教育の礎となるよう、成果と課題を踏まえて継続して取り組んでいくだけでなく、先進校としての取組を県の内外へ情報発信していくことも大切である。

「場面の展開や場面の設定の仕方をとらえて『読む』ことに関するつまずき解消に向けた取組」

丹波市立和田中学校

教諭 西田 美和

1 取組の内容・方法

平成27年度から3年間に渡って、ひょうごつまずきポイント事例集等作成に係る検討委員の任を受け、「読む」ことに関するつまずき解消に向けた取組という視点で研究を進めてきた。その中でも、特に「場面の展開や場面の設定の仕方をとらえて『読む』ことに関するつまずき解消に向けた取組」について、学びサポート協力校としての実践してきたことを以下に記す。

(1) 分野ごとのつまずきの系統性を明らかにする

ひょうごつまずきポイント事例集等作成検討委員会では、過去数年間の全国学力・学習状況調査の結果から兵庫県の児童生徒のつまずきを洗い出し、再度検証するために類似問題を作成した。それらを中学校版「ひょうごつまずき状況調査」として、学びサポート協力校の指定を受けた中学校6校、1,872人の生徒を対象に実施した。実施全学年で同様の調査問題と生徒質問紙への回答を行い、どの学年段階でつまずきが見られ始めるかを分析し、つまずきの系統性を明らかにした。

分析の結果、「読む領域」で見えてきた課題は、「複数の資料の中から必要な情報を選択すること」と「文章の構成についての理解や文章全体から必要な要素を見つけること」であった。これらの分析結果を踏まえつつ、文学的教材の「読み」の分野のつまずき解消に向けた研究・実践を中心に進めた。

文学的教材の読みの場合 お話は大好きなんだけどなあ	
各学年に見られるつまずき	
第1学年	登場人物の行動描写から心情を的確にとらえることができない。
第2学年	場面の展開をとらえながら、文章全体のつながりを考えることができない。
第3学年	登場人物の設定や心情・情景の描写から作品の主題を理解することができない。

① 第1学年に見られるつまずき

第1学年では、「登場人物の行動描写から心情を的確にとらえることができない」というつまずきが見えてきた。原因として、じっくりと文章に向き合う習慣がなかったり、語彙力が低かったりすることが考えられる。

(例)『少年の日の思い出』の授業から
全文を読んでみて、気になった一文を抜き出し、その理由を書かせる。多くの生徒が、最後の一文の「…指で粉々に押しつぶしてしまった」の部分

を抜き出す。その部分の選択の理由に、「何もかも終わったと感じたから、潰したのだろうか、もっと詳しく知りたい」と、初発の段階から深く内容をつかみとっていると思われる感想もあるが、これらは一部の生徒の感想にしかすぎない。「大事にしていたチョウをなぜ粉々にしたのか分かりませんでした」のように最後の一文の示す意味を全くつかむことができていないもの、「エーミールに冷たい目で見られ、どうしようもなく潰したのだろうか」「とても珍しいチョウなのに、押し潰したことが気になりました」と、表面的な部分しか読み取ることでできていないものなどの理由が多くあり、初発の段階から読み取りに大きな差があることが分かる。

② 第2学年に見られるつまずき

第2学年では「場面の展開をとらえながら、文章全体のつながりを考えることができない」というつまずきが見えてきた。原因として、第1学年でのつまずきが、第2学年での課題につながるのではと考えられる。

(例)『走れメロス』の授業から

『走れメロス』の後半部分の授業の中心発問、「メロスが再び走り始めたのはなぜでしょう」につい

て考える。「ここでやめたら、セリヌンティウスを裏切ることになるからかな?」「セリヌンティウスを殺されたくないから」など、これらからは、発問の「メロスが再び走り始めた」場面でしか考えられていないことが分かる。また、「自分の名誉を守るために走っているのだと思う」に対しては、文章中にメロスが「我が身を殺して、名誉を守る希望」が生まれたと言っている場面がある。「我が身を殺して」という言葉の意味が正しくとらえられていれば「自分の名誉を守るために」という言葉は出てこないはずである。このように、場面の展開や全体のつながりを意識させる必要が見えてきた。

③ 第3学年に見られるつまずき

第3学年では、「登場人物の設定や心情・情景の描写から作品の主題を理解することができない」というつまずきが見えてきた。第1・2学年でのつまずきが、第3学年の課題につながるのではないかと考えられる。

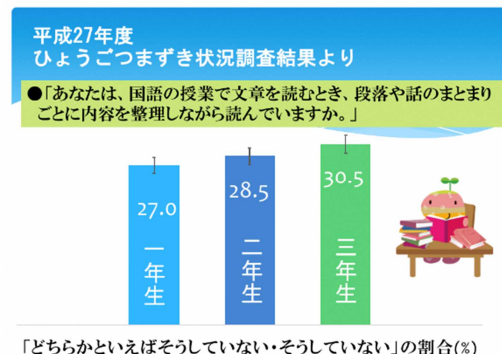


(例)『故郷』の授業から

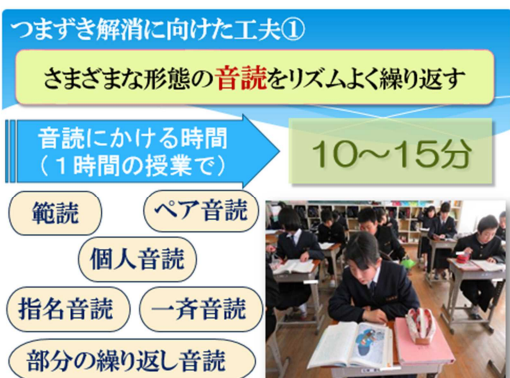
『故郷』は、個人と社会との関係性にまで視野を広げて読み取らなければならない教材である。舞台となる国や時代、人々の生き方への理解がなければ、文章全体がさらに難解に感じられ、「内容が頭の中にずっと入ってこない」という感想を口にする生徒もいる。

物語終盤に、すさんだ気持ちで故郷をあとにしようとする主人公の「私」が、若い世代の甥の「ホニル」たちの様子にはっとさせられ、新たな気持ちで前に進もうとする場面がある。そこに登場するのが「希望」というキーワードである。

「私」がどきどきとした理由から作品の主題に迫りたいところだが、それ以前に話の内容をつかむことに大きな壁を感じる生徒がいる。まずは「文章を話のまとまりごとに整理しながら、丁寧に読んでいく必要」がある。



左に示したのは、「ひょうごつまずき状況調査」の生徒質問紙調査結果の一部である。このことから同様のことが見えてきた。「あなたは、国語の授業で文章を読むとき、段落や話のまとまりごとに内容を整理しながら読んでいますか」という質問に対して、「そうしていない」という生徒の割合が、学年が上がるにつれて増えていく傾向にある。学年が上がるにつれ、文章の質も上がってくる。ますます深く丁寧な読みが必要な時期に、文章をじっくりと読むことを避ける傾向が強まるとすれば、これらの読みの浅さが、3年生でのつまずきにつながるのではないかと考えられる。



(2) つまずきの解消に向けたポイントを整理する

①「音読を繰り返す」

さまざまな形態の音読をリズムよく取り入れ、何度も繰り返す。音読にかかる時間は、1授業の中で10～15分程度を基本とする。その方法として、範読、ペアでの音読、個人での音読、指名による音読、生徒全員での一斉音読、発問につながる読み深めたい部分の繰り返し音読などがあげられる。

様々なパターンの音読をリズムよく、テンポよく繰り返すことが大切となる。間髪入れずに指示を出していくことで、集中力を高めていく。

つまづき解消に向けた工夫②

登場人物の行為の意味について、**根拠**を示しながら考えを書く活動を取り入れる。

発問

「走り続けるメロスが伝えようとしていることは、なんだろう。」



ノートに
5行で
書こう。

つまづき解消に向けた工夫③

ペアやクラス全体で交流し、自分の考えと比較させる。

友達の意見は
赤ペンでメモ
しましょう。

意図的な指名発表

友だちからの
新たな視点

登場人物の行為の
意味、根拠となる
表現をより意識

考える視点
●根拠と理由は
合っている？
●場面的変化や
つながりは？



つまづき解消に向けた工夫③

2年A組	シロバネ	梅田	左メロス
並にありたい あきらめると 後悔	あきらめると 後悔	信頼 あきらめ たくない	あきらめ たくない
勇気 感謝 信頼	勇気 感謝 信頼	信頼 あきらめ たくない	あきらめ たくない
信頼 あきらめ たくない	信頼 あきらめ たくない	信頼 あきらめ たくない	あきらめ たくない
信頼 あきらめ たくない	信頼 あきらめ たくない	信頼 あきらめ たくない	あきらめ たくない

座席表を用いた
字ひを深めるためのキーワードの記録

つまづき解消に向けた工夫

3つの工夫(生徒の視点から)

① 音読を繰り返す

② 発問について考え、自分の考えを
ノートに書く

③ 自分の考えを交流する



②「自分の考えをノートに書く」

休みなく音読を繰り返したところで、すかさず、その時間にもっとも深めたいことについての発問を投げかける。その発問について、自分の考えをノートに書いていく。ここでは、『走れメロス』の授業を例に紹介する。繰り返し、たっぷり音読した後、「走り続けるメロスが伝えようとしていることは、なんだろう」と問いかけることで、メロスの行為の意味について根拠を求めようと、文章と深く向き合わせることができる。何度も読んだ上で、投げかけられた発問ということに大きな意味がある。「5行で」などと書く分量を指示し、ある程度の長さの文章を書かせることを繰り返してきた。

③「ペアやクラス全体で交流し、自分の考えと比較する」

個々の読みの共通点や相違点を比較させ、学級全体の読みに広げるために、必要に応じて意図的に指名発表を行う。その際、友達の意見は赤ペンでメモするように習慣づけている。聞き取りながら、友達から新たな視点を得ることで、さらに読みが深くなる。また、「自分の根拠と理由が合っているか」「場面ごとの変化やつながりに基づいているか」などの考える視点を示すことで、登場人物の行為の意味について、根拠となる表現をより意識できるようになる。

考えの交流時に大切にしているのが、座席表である。生徒がノートに考えを書いている間に、机間指導を行い、生徒のノートに線を引いたりキーワードに印をつけたりと、赤ペン指導を行っていく。このような授業の進め方を続けてきた。

2 取組の成果

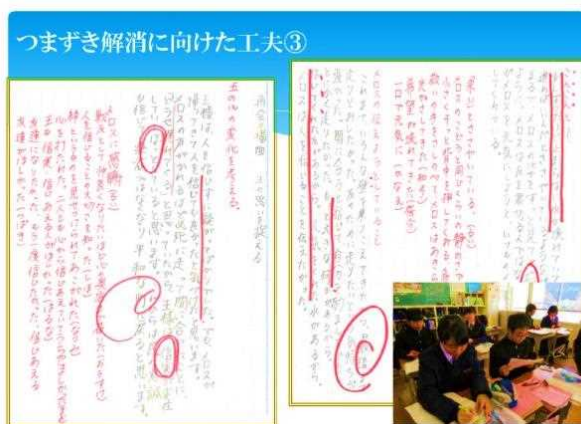
(1) 音読を繰り返すことから

音読を繰り返すことで何度も文章に触れることができる。着目すべき方向性が分かれば、授業がわかる、書けるにもつながる。中心発問につながるような読みの工夫をすることで、生徒は大切な部分に気づくことができる。その結果、読み取る力が伸びてきた。分かるということは、授業への意欲を高めることになると実感した。

(2) 発問について自分の考えをノートに書くことから

発問の良し悪しが授業を左右するといっても過言ではない。考えるべき方向性をはっきりすると生徒は安心して学習を進めることができるようになる。つまり、深く考えるに値する発問が提示されれば、授業の質はぐっと高まるということである。

自分の考えをノートに書かせることで、深く文章を読み取ることができるようになってくる。また、「書く分量を示す」という、少しの工夫が大きな効果を生み、生徒は頭をフル回転させて、考えをノートに書くようになってきた。書くことへの抵抗感が薄らぎ、自信を持つ生徒も増えた。



(3) ノートに書いた自分の考えをペアや学級全体で交流することから

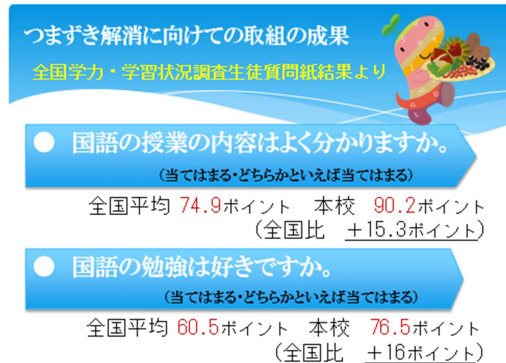
交流の際には、意図的な指名発表を中心とし、座席表に生徒の読み取り度合いをチェックすることをしてきた。一枚の紙にまとめることで、生徒やクラスの理解度を一目で把握することができ、授業を組み立てる重要な材料となっている。赤字は友達の発表の聞き取りメモである。友達の意見をメモすることで、友達の考えを注意深く聞くようになる。「ほー!」「そんなこと、よく思いつくなあ」などと、感動をもって友だちを認める姿も見られるよう

になってきた。

また、このメモするという作業を通して、考え方やまとめ方を学ぶことができてきた。自分のノートに文字が埋まっていくことで、学習への満足感を味わうことのできる生徒も少なくない。

(4) 全国学力・学習調査の結果から見てきたこと

生徒の学習への意欲の表れは、平成 29 年度全国学力・学習状況調査の生徒質問紙調査の結果からも読み取ることができる。「国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしていますか。」「意見などを発表するとき、うまく伝わるように話の組み立てを工夫していますか。」「自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気を付けて書いていますか。」「解答を文章で書く問題がありましたが、最後まで解答を書こうと努力しましたか。」これらの項目について、全国平均を大きく上回る結果が出た。また、「国語の授業の内容はよく分かりますか。」「国語の勉強は好きですか。」という質問に対しても、同様の結果が見られ、さらに本校の過去 5 年間のなかでも最高の値となった。



3 年間の学習のしめくくり (3 年・生徒感想文)

3 年間、同じ先生と国語を学んできました。学ぶ中で 1 年生から 3 年生の間で一番多かったのは、静かな時間でした。全員が一つのことに真剣に取り組み、全員が人の考え方を聞こうと静かにしている時が多くありました。そして、二番目に多いと感じたのは「笑」でした。少しやんちゃな子が一言言って笑ったり、誰かがちょっぴりピントの外れた一言を言って笑ったり、それだけならいつもと変わらないのですが、全員の考えが一つに向いている中だからこそ、温かいような相手をバカにする「笑」は一つもなかったように思えます。これらを通じ、国語の授業では全員の考え、意識をまとめ、いつもの生活以上に相手を知ることができたり、考え方を読み取ったりできました。国語の文章の多くは穏やかな文章です。それらを通して、人の心を豊かにしてくれるものだと感じました。

(平成 30 年 2 月 22 日実施の学年末テストより)

3 課題及び今後の取組の方向

3 年間の取組の中で、国語の学習への意欲が高まってきたこと、書くことへの抵抗感が薄らいだこと、課題意識を持って文章を読むようになったことなどの成果が見え、読み取ったことを自分なりに記述する力がついてきたと考えられるが、適切なものを選択し吟味する力にはまだ課題が見られる。今後も、つまずき解消に向けた 3 つの視点を、文学的な教材の「読む領域」に限らず、授業の基本として進めていくことで、さらなる「読み」の力をつけていきたいと考えている。

「えー、もうチャイム鳴った? 国語の授業って時間が過ぎるのがはやいわあ」「国語って、頭使うからしんどいわ」このような生徒のつぶやきが聞こえる、学びにひたり心地よい疲労感を得られる授業を続けていくことで、一人ひとりの生徒の読み取る力のみならず、書く力、話す力をさらに伸ばしていきたいと考える。

防災を意識した業務改善 ～ 防災教育から「事務をつかさどる」事務職員への変革 ～

多可町立加美中学校
学校副主幹 溝垣 隆宏

1 取組の内容・方法

私は、平成16年度に兵庫県教育委員会より震災・学校支援チームEARTHの委嘱を受け、早いもので13年が経過した。私たちは災害があれば被災地へ赴き、学校の早期再開を目指して活動することはもちろんのこと、阪神・淡路大震災を語り伝えることが責務である。一方で学校教育法が変わり、事務職員の職務が「事務に従事する」から「事務をつかさどる」になり、事務職員も変革の時期に来了。私は、「事務をつかさどる」ことへのきっかけを「防災」と位置づけ、事務職員の防災への関わりについてきっかけをつかむため、講義中心の講話から実態に即したワークショップを取り入れた。これらを実践する中で、業務改善を進めるには、防災の視点が必要であることに気づいた。

(1) 防災士会との連携（避難所運営ゲームHUGとの出会い）

防災士が各地で積極的に様々な取組をされていることを知り、会合へ招かれた。ここで、防災士の取組の一つである「避難所運営ゲームHUG」の取組を知った。避難所運営ゲームとはHUGは、H(hinanzyo 避難所)、U(unei 運営)、G(game ゲーム)の略称で、静岡県が開発して普及している。この手法を習得するため、防災士会の研修会に参加し、研修を積んだ。

(2) 各地の防災研修会への参加

ア 寝屋川市第四中学校区教職員研修会

寝屋川市第四中学校区の教職員90名を対象にワークショップを行う。東南海地震の発生が予測されるため、教職員の災害に対する意識高揚を図った。阪神・淡路大震災の時に教職員が陥ったジレンマにどう対応するかについてグループワークを行った。グループ発表に対し、奥尻島地震から阪神・淡路大震災当時の対応状況、救援物資を保管することにかかった経費、教職員の対応状況などを説明した。

イ 高知市教育研究会学校事務部会研修会

高知市は南海トラフ地震により、甚大な被害を受けると予測されており、津波に関する研修を積まれている。高知市事務職員100名が対象であったため、講義形式で講話を行った。高知市内の数校を抽出し、その学校をモデルに、震災発生時のジレンマについてグループワークを行った。

ウ 三重県桑名郡市小中学校事務研究会防災教育研修会

桑名郡市の事務職員を対象とした研修会において、ワークショップを行った。ワークシートを縦に割り、行政が対応するもの、学校が対応するもの、右端に事務職員が対応することの欄を設け、付箋により対応状況をまとめた。桑名郡市事務研修会では、事務職員対応の防災マニュアルづくりに取り組んでおられ、このワークショップのまとめの結果を受けて、引き続き、完成に向けて取り組まれて

いる。基本は学校の防災マニュアルであること、事務職員版の作成は、災害時の手続き、服務関係、給与関係など区分を明確にする必要性を伝えた。

エ 県立教育研修所事務職員経験者研修 HUG

学校の危機管理対応の一つが「防災」である。危機管理の対応の詳細について1部で講義を行い、2部では防災ワークショップ（HUG）を行っている。1グループがおおよそ6人で開始するワークショップで、読み手が一人、残りの5人は災害発生直後、出勤した職員という想定の下、300人以上の地域住民が学校へ押し寄せることを想定して読み手は次から次へと休むことなくカードを読み上げ、グループ内の他の班員へカードを渡す。カードには、避難所での避難者誘導に始まり、マスコミ対応、救援物資対応、家族の特徴などが記されており、カードをもらった他の班員は即座に対応しないと、次から次へと押し寄せる避難者に対応できなくなる。あえて緊迫した状況下でどう対応するかの紙上訓練である。全員を誘導し、終わった後、各グループから対応で困ったことなどを発表させ、災害時の事務職員の果たす役割について再確認した。

オ 地域での活動

平成23年度～平成26年度の4年間、私は地元集落の区長を拝命し、その間、予想しなかった災害に2度見舞われた。多可町にこれまで経験したことのない台風による豪雨のため、幹線道路が2箇所で寸断され集落が一時孤立しかけた。また、土砂崩れの前兆が現れたため、住民を小学校や町の施設へ避難させた。また、避難時に逃げ遅れた独居老人も無事に救出できた。当時中学生（加美中学校）であった私の集落の生徒が、このときの消防団や集落の様子を作文で発表してくれたことは、EARTH員、集落の一員であった私以下集落住民に感動と勇気を与えてくれた。EARTHで学んだ迅速な状況判断、緊迫した状況の中であらゆる方々の意見を聞き、避難の判断できたことや一人のけが人も出すことなく避難させることが出来たことは大きく、地域の防災訓練に出向くことにより、様々な防災上の問題点を見ることができた。

（熊本派遣報告会の様子）

(3) 事務職員としての知識を防災マニュアルへ

校長の指示により、防災担当教員からの依頼を受け、事務職員として防災マニュアルの改定作業に加わった。通勤届をもとに、職員ごとに学校に到着できる距離から時間を割り出し、防災マニュアルに記載した。



(4) 防災を意識した業務改善（あたりまえの事務処理）

いつ災害が起こるかわからない、いつ講義の依頼があるかもわからない。このような状況下で私が考えたことはそう難しくはなかった。正確で迅速な事務処理を行うための「業務改善」である。今、「業務改善」という言葉を多く聞くが、「危機管理（防災）」を意識した業務改善でなければならないのである。日々煩雑になる給与・服務・旅費などの効率的な事務処理を痛感している。具体的な取組は次のとおりである。

ア 机上、机の引き出しの整理

事務処理の基本。机の引き出しの役割を決め、手前の真ん中の引き出しは一時的な書類の保管スペース。右端の上は必要最低限の文具。右端の真ん中はパソコンと処理中の書類を置くスペース。一日の終了時に次の日の仕事の整理を行い、給与、財務処理など漏れ落ちがないようにした。事務処理のミスを防ぐため、机の上には余計な書類は一切置かないことを徹底している。

イ 旅行命令簿・復命書の個別フォルダー

これまでの簿冊形式を改め、個別フォルダー形式にすることにより回転が速くなった。同時に、見た目の書類もきれいになり、事務支援等で相手に与える印象も良い。書類をきれいに揃え、帳簿をきれいに保つことは事務の基本である。

ウ 諸帳簿の毎日の点検

まとめて行うから間違いが起こる。毎日点検出来るように習慣づけを行った。

エ 旅費請求書の随時作成

個別フォルダーと連動させ、復命が確認されるとすぐに作成し、保管しておくなど、校長決裁前にまとめて入力に絶対には避けるようにした。また、万が一の誤りに、承認期間内で対応するために、特別な事情を除き、承認期間初日に校長決裁をもらうよう配慮した。

オ 学年会計の様式統一（学校徴収金処理）

学年会計様式を統一し、保護者が同じ会計報告を目にすることが出来るようになった。また、学年会計の決裁時、同じ学年会計の書類と同じ通帳、同じ計算方法であるため、事務、教頭、校長の決裁がスムーズになった。また、学校徴収金に対する教員の意識が変わった。

(5) 多可郡事務研修会の活性化

郡内に小中8校しかない事務研修会をどのように活性化するのが課題であるが、「業務改善」を把握しきれていない事務職員が多い。前述の「防災を意識した業務改善」について、事務研修会での情報交換の場で伝えることにしている。本年度から2校ずつではあるが、会場校の事務処理の執務環境を見るとともに、問題点を見だし、全員で情報共有し、問題点を解決できるよう活動を続けている。この中に、特に危機管理を意識した事務処理についても同時に考えるよう配慮した。また、本年度は業務改善事務職員側から見た学校について講話をいただき、作成していただいた各種ファイルを活用し定着させていくことを確認した。

2 取組の成果

(1) 「事務をつかさどる」きっかけづくりとして

「防災」に関わることで、事務職員であっても小学校の教壇に立つことや、指導案に触れることも出来た。これを良い機会と捉え、日々の事務処理の糧としたい。さらに、私は、講義について壁に当たった時、必ず校長に助言を求めた。小学校ではどのような手法で訴えたら良いのか、また、学校再開に向けての学校の動きの確認など様々な指導をいただいた。同じ事務職員のEARTH員にも助言を求め、事務職員と防災についての指導を仰いだ。また、県内外の事務研究会から防災についての講話やワークショップの依頼が増え、防災における事務職員の役割が全国的に大きくなっている。

ことがわかった。

(2) 避難所運営ゲーム HUG の普及

講義で伝えることも大切なことであるが、「体感する」ことを目的にワークショップを行えたことは大きい。例えば学校に6人しか職員が出勤できない場合に、おおよそ300人のあらゆる境遇の避難者を体育館、解放した教室等へ効率よく誘導し、外部の対応などあらゆる事象に対応できるか、あえて緊迫した状況を作り、避難誘導等を体感してもらうことができた。県立教育研修所の事務職員経験者研修の一コマとして研修に入れて頂くことができ、事務職員からは好評を得ることができた。この中でも、「業務改善」についても触れることが出来、事務職員にも防災への取組のきっかけを与えることができた。

(3) 防災を意識した業務改善の効果

防災へ取り組むという意識の下に事務処理を日々行っていると、迅速かつ的確に事務処理しなければ両立は困難であると気づいた。防災をはじめとする危機管理に対応すべく、事務処理は迅速に処理しておかなければならない。派遣により事務が対応できないということは絶対に避けなければならない。防災に取り組むようになり、それと平行して旅行命令簿等帳簿の見直し、学年会計様式の統一化、旅費請求から校長決裁までの事務の流れの見直し、旅費請求書の作成タイミング等業務改善を行うことが出来た。この業務改善により、書類作成よりも書類点検の時間に多くの時間を割けるようになり、事務処理の誤りを格段に減らすことが出来た。

3 課題及び今後の取組の方向

(1) 災害を意識した業務改善

阪神・淡路大震災では、給与・旅費・服務などあらゆる事務処理も困難を極めた。このようなことから、普段より事務処理は期日より1週間前には提出できるような意識づけを求めたい。

(2) 誤りの少ない事務処理をめざして

多可町内でも財務会計を始めとして事務処理が全体に遅いのが現実である。「事務をつかさどる」ことへ向かっていくには、学校が共同して「事務処理」を点検するシステムづくりが急務だと考える。まずは、学校内での決裁処理の見直しを徹底させる。職員に決裁の意識付けを確実に行之、多可町内共同でのチェック体制の構築を進めたい。校内の文書の保存期限など、職員室内の文書のルールづくりも主導してきたい。

(3) 防災マニュアルへの関わり

私を始め、職員が防災マニュアルを目にする機会はきわめて少なく、職員間で情報を共有し、災害時には連携が図れるよう、どのように定着させるかが課題である。

(4) これからの事務職員

事務職員は最大の転換期を迎えている。これまで行ってきた給与、旅費、財務等については、学校で事務職員が処理しなくなる日も近いと言われている。また、「コミュニティスクール」という言葉も身近に聞かれるようになった。これからは地域との連絡調整を担い、学校の運営に積極的に係わっていかなければならない。

業務改善は何かを意識しないと前に進まないのが現状である。「防災」に押され必然的ではあるが業務改善を進めることが出来たことは今後の自信となる。

「生涯を通してたくましくしなやかに生きる子どもの育成をめざす」健康教育の取組

たつの市立御津中学校
養護教諭 嵯峨山 文子

1 取組の内容・方法

(1) はじめに

養護教諭は自校の学校教育目標を達成するために養護教諭としての視点を大切にしながら、社会環境や時代と共に刻々と変化する子どもの健康課題に真摯に向き合い、課題解決の為に取り組むことが求められる。

9年前本校へ赴任した当時、不登校の生徒が全校生徒の約1割にも及び、体調不良で保健室に来室する生徒も多かった。ケンカやトラブルも絶えず、学校生活が落ち着かない状況であった。中学生の体調不良は親の手を離れようとする思春期の始まりにおいて、生活習慣が乱れることや、友達関係などのストレスが原因の事が多い。また本校の生徒は自尊感情が低く、全校集会を開く事ができないほど学校のルールを守れない生徒が多かった。

そこで本校の学校教育目標『輝く希望 不屈の闘魂 豊かな情感 照心の真眼』を達成するために学校保健目標を『生涯を通してたくましくしなやかに生きる子どもの育成をめざして』とし、いくつかの本校の健康課題の中から重点目標を2つに絞り設定し、数年前から取り組んできた。

重点目標の1つは「望ましい生活習慣の形成を目指し生活改善に向けた指導の充実をはかる」である。従来から取り組んでいる健康教育に加えて、もう一度基本に立ち返り、生活習慣の実態把握と立て直しに向けて取り組むことにした。

重点目標の2つめは、「健康観察により、心身の健康問題の早期発見・早期対応を図る」とした。学校においてまず大切なのは、子どものいのちであることを全職員が忘れてはならないと考えたからである。これらを達成するために担任だけではなく全職員が毎朝・給食時・休憩時間・黙想と放送終会時には必ず全教室へ行き、子どもの健康観察を実施することにした。観察した結果は職員で共通理解し、欠席者・遅刻者・体調不良・子ども同志のトラブルや子どものストレス状況の把握と、早期の支援を図ることにした。

(2) 取組

・ 通年の健康教育

本校は学校保健年間計画に基づいて、1年生は養護教諭と生活指導担当のTTによる喫煙防止教育と学校歯科医による歯科衛生講話を、2年生は学校薬剤師による薬物乱用防止教室（薬教育を含む内容）を、受験を控えた3年生はSSWによるストレスマネジメント教室を実施している。これらの健康教育は学校外の『三師会』の先生方や職員全体の協力によるところが大きいと感じる。

健康教育の効果を高める為に工夫していることは、3つある。1つめは学習後に子どもに感想を書かせて理解度をチェックし、質問に対して返事を書き子どもとやりとりをする中で学習内容への理解が深まるようにすることである。このやりとりを次年度の内容に反映させることもできる。2つめは、学習に関する記憶の定着をはかる事を目的として一定時間経過した翌日の読書タイムの時に、同じ内容の教材を読ませていることである。記憶は学習後に時間が経過して忘却しかけたころ、再度学習をすると高まるといわれている。この時に使用する冊子は文部科学省から毎年発行されている「かけがえのない自分 かけが

えない健康」である。この冊子はライフスキルの考え方をベースに作成されていて大変分かりやすく視覚に訴える資料も豊富である。具体的には喫煙防止教室・薬物乱用防止教室・ストレスマネジメント教室を実施した翌朝の読書タイム時に生徒に配布して読ませる。それを回収し、次の健康教育に再度使用するなどして3年間大切に使用させ、卒業時に生徒に配布している。3つめは体育科と連携し、定期テストに出題することである。これにより生徒はあっという間に集中して学習に参加する。そして翌朝文部科学省の冊子を読み、後日定期テスト準備のために再び学習する。反復学習する仕組みをつくる事で知識の定着をはかっている。

- ・ 生徒会保健委員会による「ミニミニ」「デカデカ」保健指導

生徒自らの健康への意識を高める事をねらいとし、保健室経営計画重点目標に基づいた生活習慣改善の取組を生徒会保健委員会と連携して実施している。具体的には生活習慣に関するアンケートを生徒全員に実施し、集計と分析を行い本校生徒の健康課題を把握した上で、全校生徒に訴えている。

保健委員会が行う保健指導は生徒が各クラスを回る「ミニミニ保健指導」と体育館で全校集会や文化祭に実施する「デカデカ保健指導」、放送集会での呼びかけやポスターの作成などがある。内容は、睡眠・朝食・排便・ストレス対処法・スマホ使用時間など生活アンケートの結果から現状と改善策を訴えるものであるが、それ以外にもケガの予防や対処法・熱中症の予防など多岐にわたっている。常に生徒と相談し本校の現状や健康課題に適したものを取り上げている。今年度は、生活アンケートで体調が良いと答えた生徒が増え、就寝時刻は学校全体で早まり、効果が数字で表れた部分を発表した。反面スマホの使用時間が増えた生徒が多かった事実も取り上げて改善を呼びかけた。また歯科保健に関する意識をさらに高めたいという生徒の意見を取り入れ、歯科保健に関する内容「君にもできる応急手当パートⅢ歯が抜けた編」も「デカデカ保健指導」のテーマに取り上げた。実施する保健委員もそれを見る側の生徒も共に楽しみながらの活動である。生徒が主体となり練習の計画や方法も進めていき教師はその活動を支援している。部活動で活躍する生徒も多いので短い時間で集中して練習する工夫も欠かせない。最近のテーマは「風邪インフルエンザの予防・咳エチケット」「換気」「君にもできる応急手当パートⅠ～Ⅲ」「君にもできるけがの予防」「腸活」などがある。

- ・ 全職員での健康観察でいのちを守る

重点目標2つめの健康観察は全職員が朝会・昼食時・黙想・放送終会時（場合により休憩時間中）に各教室に行き、生徒の様子を観察するとともに、必要な支援をすることである。具体的には、いつもより登校時間が5分遅かったことから生徒の体調の変化に気づく事ができた事例や、登校時の表情がいつもと少し違うことから声をかけることで友達関係のトラブルの早期解決につながった事例が多数ある。生徒の健康状態を把握するだけでなく、人間関係などのトラブルの早期把握と対策、ケンカや（廊下で暴れたり走ったりすることによる）怪我を防止する事ができた。赴任当初は、読書タイムや授業中に立ち歩く生徒に席に着くよう声をかける状況であったが、現在は朝の読書タイムも落ち着いて始めることができ、授業にも集中して取り組む姿がみられる。また全職員の健康観察で得た情報は、職員室内前面のホワイトボードに随時記入し、欠席・遅刻・早退・体調不良などの生徒の様子を常に共通理解している。

- ・ 兵庫県の学校保健の一助に

縁あって、兵庫県養護教諭研究会連盟に関わり 4 年目になる。本会は諸先輩方が戦後まもなく子どもの健康課題を解決するために立ち上げ、真摯に研究を重ねてこられた歴史がある。兵庫の学校保健に資する事を目的とし、県学校保健会・県教委事務局体育保健課の先生方・校長会のご理解やご支援を賜りながら、兵庫県の養護教諭の資質向上のための事業を行っている。今後も兵庫の子どもがたくましくしなやかに育ちゆくための連盟で有り続ける事を祈念してやまない。

2 取組の成果

重点目標の生活習慣改善の取組により、生活アンケート結果で「普段の体調が良い」と答えた生徒が増えるなど生活習慣の改善がみられた。同時に怪我や体調不良で保健室に来室する生徒も激減した。また全職員あげての健康観察の取組により不登校の生徒も激減し 28 年度は全校欠席ゼロの日も数日あった。

現在は学校生活全体が落ち着き、朝の読書タイムもスムーズに座席に着き読書に集中する様子がみられる。学校生活が穏やかになると同時に、ストレスレベルが高くイライラしている様子がみられる生徒も減った。ストレスから人や物にあたるという行動もなくなり、人に相談したり音楽を聴くなど自分なりのストレス解消法を試みる様子もみられる。結果として、授業中も集中して勉強できており、生徒の表情も明るい。生徒会活動も活発になり、自主的な活動で達成感や充実感が得られた生徒は自己有用感も高まるという良い循環を生み出している。生徒保健委員の中には保健指導を経験することにより就職面接でしっかりと話ができ、就職先が決まったと報告にきた卒業生もいる。また歯科保健においても生徒会保健委員会と、学校歯科医による健康教育や保健指導の成果により、DMF 歯数の改善がみられた。

3 課題及び今後の取組の方向

私はこれまで養護教諭として、子どもの健康課題を解決するために試行錯誤してきた。思うように効果が上がらなかった時と現在を比較すると、その違いは個々の取組が学校全体を巻き込んだ組織的な取組に育ったか否かということだと考える。健康教育も健康観察も養護教諭一人だけでなし得ることは不可能であり、その学校の課題に合った「仕組み作り」が重要である。

養護教諭は学校保健の中核として子どもの健康課題を解決することを通し、学校教育目標の具現化に貢献する。そのためには自校の教育課題と子どもの健康課題を的確に捉えた上で、個々の取組の意義を職員に説明し、協力体制を生みだすことが重要である。保健室経営計画は養護教諭の視点からチーム学校として取り組む方向性を提案する重要な道しるべとなる。従って保健室経営計画を立案する際には子どもの健康課題をしっかりと分析し、どんな方法をとればどのような教育効果が期待できるのかを発信し、取り組んでいくことが大切である。また年度末には自他の評価を実施し、その結果をいかして次年度はより良く改善する。昨日より今日、今日より明日は少しでも前進するのだという気持ちと地道な積み重ねにより取組を根付かせることができると考える。

今回、保健室経営計画の下で、校内外の先生方や生徒会保健委員会と連携し生活習慣の改善を柱とした健康教育を推進できた事と、チーム学校として全職員が子どものいのちを守るという認識の下での健康観察に取り組めた事で、学校が良い方向に進んだと考える。

本校の学校教育目標と学校保健目標『輝く希望→健康で明るく 不屈の闘魂→たくましく豊かな情感→しなやかに 照心の真眼→激動の時代を生き抜く力』は対をなしている。落ち着いた学校生活や授業を大切に、集団生活の良さをいかしながら子どもの成長を支援する事と、子どもの健康課題を解決する事はまさに両輪である。

成長著しい中学校生活で確かな学力や基本的生活習慣を身につけさせることは子どもの一生の財産となり、これからの激動の社会をたくましくしなやかに生き抜く子どもの育成にもつながる。今後もチーム学校の一員として子どものいのちを守りつつ現代的健康課題解決に尽力したい。

【参考資料 保健室経営計画】

平成28年度		たつの市立御津中学校		保健室経営計画		養護教諭 嵯峨山 文子	
学校教育目標							
輝く希望 不屈の闘魂 豊かな情感 照心の真眼							
学校保健目標				生徒の主な健康課題			
生涯を通してたくましくしなやかに生きる子どもの育成をめざして				・生活習慣の乱れから心身の不調を訴える生徒がいる。(減少傾向) ・人間関係などでストレスを抱える生徒が多く心因性が疑われる不調を訴える生徒がみられる。生活アンケートの結果、ストレスを多く抱えている生徒・ストレス対処法について一人で悩むと答えた生徒が、約10%いる。 ・未成年の喫煙・飲酒が健康に悪影響を及ぼす認識が低く、時にそれらを容認する発言もみられる ・ここ数年減少傾向にあった未処置う歯の本数が昨年に引き続き増加していた			
重点目標							
・望ましい生活習慣の形成を目指し生活改善にむけた指導の充実を図る。 ・健康観察の充実により、心身の健康問題の早期発見・早期対応を図る							

中学校における「通級による指導」の取組について

太子町立太子東中学校
教諭 寺内 和恵

1 取組の内容・方法

太子町には小学校4校、中学校2校があり、学校生活支援教員が3名配置されています。太子東中学校は、平成24年度から支援拠点校となりました。私は学校生活支援教員になり6年になります。平成29年度は、自校通級9名、巡回指導7名の計16名を対象に自立活動を中心とした指導を行っています。中学校での指導を切れ目なく円滑に進めるために、校種間の移行期の支援について特徴的な取組を行いました。

(1) 中学校入学当初の円滑な支援の導入

太子町では、小学校から引き続き中学校でも通級による指導を希望する生徒がいます。しかし、児童や保護者の中には中学校の通級による指導に不安をもつ場合も少なくありません。

そこで、入学前の2学期に、対象の児童と保護者に中学校の通級による指導の様子を見学してもらう機会を持ちます。また、3学期には中学校の担当教員が小学校の指導を参観します。その際、自己紹介をしたり、部活動や教科担当の先生が変わること等、小学校と中学校での生活の違いについて話をしたり、本人が不安に思っていることや得意なこと、苦手なこと等を聞き取ったりします。その後には、児童が使用している教材やワークシート類、指導の記録を基に、指導内容を小学校と中学校で共有します。

(2) 高等学校での継続した支援に向けて

太子東中学校では、平成28年度から、播磨西地区サポートネット会議で提案された「中学校から高等学校へ引き継ぐためのガイドライン」、「特別支援教育にかかる中学校・高等学校連携シート」等を活用して、合格発表直後に支援の引継ぎを行っています。その成果もあって対象生徒は入学後スムーズに学校生活を送っています。

高等学校への引継ぎを行ったAさんの保護者からは、「資料を引き継いでもらったので、高等学校では早速に面談していただき、子どものことについて相談することができました。今では休まず登校しています。」と言われ、私自身も高等学校へ引き継ぐことの大切さと責任を強く感じました。

引継ぎを受けた高等学校では、クラス分けや選択科目の決定時にAさんに応じた配慮が行われました。また、早い段階から保護者と連絡を取ることができ、学年はじめの宿泊合宿にもスムーズに参加できました。

<div> <div> <div>特別支援教育にかかる</div> <div>中学校・高等学校連携シート（記入例）</div> </div> </div>			作成日		平成 年 月 日	
			中学校名		△△市立〇〇中学校	
			記入者職名		教諭 〇〇〇〇	
名	まえ	〇 〇 〇 〇	性別	男	生年月日	平成12・12・12
住 所			△△市〇〇町1-2-3		連絡先	〇〇〇-〇〇〇-〇〇〇〇
<div> <div>本人の状況</div> </div>			<div> <div>性格・行動の特徴</div> <div> <input type="checkbox"/>緊張しやすい <input type="checkbox"/>口数が少ない <input type="checkbox"/>感覚過敏がある <input type="checkbox"/>幼い面がある <input type="checkbox"/>ストレスに対して逃避的である <input type="checkbox"/>性格が穏やか <input type="checkbox"/>不快な感情を表現することが苦手 <input checked="" type="checkbox"/>落ち着きがない <input checked="" type="checkbox"/>集団での遊びを好まない <input checked="" type="checkbox"/>感情のコントロールが難しい <input checked="" type="checkbox"/>人の気持ちを理解することが苦手 <input checked="" type="checkbox"/>新しい環境が苦手 </div> </div>			
			<div> <div>その他</div> <div> 自分が納得がいくまで質問を続ける。授業中などに本人が納得せずに質問を続けるときは、授業後に個別に受け付けることを伝える。納得ができれば、次の行動に移ることができる。 </div> </div>			
			<div> <div>学校生活の様子</div> <div> (授業態度、提出物、休み時間の様子など) 上の空で授業に集中できないことがある。好きな教科(理科、社会)では積極的に自分から質問をする。メモを取るように指導すると、提出物はきちんと出せる。家庭では提出物の完成に時間がかかっている。 (部活動・委員会・係・当番活動の様子、学校行事等への参加状況など) 陸上競技部(長距離)、市総合体育大会オープン1500m第3位。 清掃や係活動は、明確な仕事の指示が必要。何をやるのかが分からないと動きづらい。全体での行事(体育祭、文化祭など)では、参加への配慮が必要。 (出欠状況及び特記すべきこと) <input type="checkbox"/> 通常の登校 <input type="checkbox"/> 別室登校 <input checked="" type="checkbox"/> その他(一時的に保健室登校) (具体的な状況) 中学校1年生の1学期後半から登校しふりがあり、保健室の個別指導を経て、2年生からは通常の登校となる。 </div> </div>			
			<div> <div>得意なことや苦手なこと</div> <div> (得意なこと、興味あること…作業、行動、教科など) 体を動かすことは得意。体育などでは見本となることもある。 </div> </div>			
			<div> <div>自分の特性理解の程度</div> <div> (苦手なこと…作業、行動、教科など) 待つこと。見通しが持てないと落ち着きをなくすので、スケジュール等簡単な見通しを口頭でもよいので、伝えておく必要がある。 よく理解できている、ある程度理解できている、あまり理解できていない、理解できていない (具体的な状況) 特性について具体的に本人と話し合ったことはないが、配慮されていることは理解している。 </div> </div>			
			<div> <div>中学校での支援の方針や内容及び結果の評価</div> <div> <div> <div>学習への支援</div> <div> (別室指導の有無、通常授業内での個別支援、授業外での個別支援の内容や頻度、定期考査での配慮事項など) 新しいパターンの授業が始まる時には、丁寧に説明し見通しを持たせることが必要。個別に説明することで理解が進む。 (定期考査での配慮事項) ありなし 具体的な配慮: 時間の見通しが持てないと時間内に回答を終えることが難しいので、テスト用紙に1問10分など所要時間の目安を鉛筆で記入しておく。 </div> </div> <div> <div>日常生活での支援(医療、福祉サービスを含む。)</div> <div> (身辺自立の程度、身体面や心理面での支援など) スクールカウンセラーによるカウンセリングを定期的に受けている。(月1回) </div> </div> <div> <div>友達・コミュニケーション等の支援</div> <div> (コミュニケーションや集団内での社会性を育むために、発達上必要とされる支援など) 2〜3人の小集団で設定されたやりとりや話し合い活動であれば、自分の思い違いがあっても修正しながらコミュニケーションがとれる。休み時間など自由な時間で、友だちのことばを思い違いして、トラブルに発展したことがあるので、その都度友だちのことばの真意等を教師が丁寧に伝え直すことが必要。頼りになるキーパーソンの教師がいることが重要。 </div> </div> </div> </div>			
			<div> <div>その他</div> <div> (診断名や心理検査(検査名、検査日、検査機関、検査結果)等) アスペルガー症候群＋注意欠陥・多動性障害(おひさまにここクリニック平成25年10月3日診断)。WISC-IV FSIQ95(おひさまにここクリニック平成25年8月10日検査)。 </div> </div>			

私は、上記の内容を確認し、進学する高等学校へ情報提供することについて同意しました。						
平成 年 月 日			保護者名	〇 〇 〇 〇	印	
			* 自署又は記名押印			

中学校・高等学校連携シートってなに？

中学校・高等学校連携シートは、中学校での生活の様子や、学習の状況などを1枚にまとめたものです。発達の特徴などにより学校生活や学習に困難を抱えているお子さんのために作成します。このシートを使って、進学する高等学校へお子さんの中学校での様子を引き継ぎます。

お子さんが高等学校で一貫した支援が受けられるように高等学校の先生に適切に理解してもらうために役立てていきます。

1 毎日の学校生活が送りやすくなります

お子さんに対する共通理解が進むことで、お子さんが毎日の学校生活を送りやすくするのに役立ちます。また、必要な支援が途切れることなく引き継がれていくことにも役立ちます。

2 保護者の負担が減ります

高等学校に入学すると、保護者も新しい先生と連携をとっていくことになります。このシートを引き継ぎに活用することで、基本的な情報のやり取りがスムーズになります。

※ 合格発表後引き継ぐため、合否判定には一切影響を与えません

裏面をご覧ください！！



【問い合わせ先】

- ① 在籍している中学校（高等学校入学以前）
進学先の高等学校（高等学校入学後）
- ② お住まいの市教育委員会
太子町教育委員会管理課 掛保郡太子町鶴2

西はり太郎さんの引き継ぎ（例）



2 取組の成果

- (1) 中学校入学当初の円滑な支援の導入の成果として、中学校入学後に以前会った先生がいるという安心感が得られることと入学後の早い時期から引き継いだ視覚的な支援やソーシャルスキルやコミュニケーションスキル等の指導を進めることができました。
- (2) 高等学校での継続した支援につなげた成果として、対象生徒は高等学校入学後スムーズに学校生活を送ることができています。高等学校の特別支援教育コーディネーターの先生や学年の先生方と本人・保護者が常に相談できる環境にあります。
平成30年度から高等学校でも通級指導が開始されます。本人・保護者の期待も高まっています。小学校や中学校で丁寧に行ってきた通級による指導や本人・保護者の思いに寄り添う指導が継続されることに期待が膨らみます。

3 課題及び今後の取組の方向

- (1) 早期支援の必要性
 - ①幼稚園、こども園から小学校への引継ぎを行うことにより、保護者の理解を進める。
 - ②一枚で簡単に情報提供を行うことができる「中高連携シート」のように、小学校でも「小中連携シート」のようなものがあれば、保護者の引継ぐための意識的レベルのハードルが下がると考えられる。
- (2) 中高連携のためには、小中連携は欠かせない。
 - ①小中の特別支援教育コーディネーターとの連携
 - ②中高の特別支援教育コーディネーターとの連携
 - ③教職員の特別支援教育への理解と支援の実践への具現化
 - ④授業のユニバーサルデザイン化
- (3) 支援のつながりが子どもの自立と成長につながる。
 - ①医療、福祉、保健等の関係機関との連携
 - ②スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーとの連携
- (4) 本人・保護者に寄り添った支援
 - ①環境を整える。「心のバリアフリー」（障害者理解）を学校全体としての理解と啓発が大切である。
 - ②学びの場の連携と連続。通級の成果を通常学級で生かす。情報の共有とつなぎ。
 - ③可能な限りその意向の尊重。

学校生活支援教員や特別支援教育コーディネーターは、本人・保護者の気持ちに共感し、寄り添う支援を行い、共に歩む熱意が信頼を生むことになり、よき相談者であることが大切です。周りに理解してくれる人が増えれば、子どもも保護者も勇気がもらえ、次へのステップとなります。

今後の方向性として、特別支援教育を進めていくにあたり、「人の育成」・「理解者」・「実践者」を増やすことが大切です。学校生活支援教員や特別支援教育コーディネーターは、その中心的役割を担うが、そのポジションの人だけではなく、教職員全体で実践していき、社会全体で意識して実践していくことが、子どもの自立と成長につながります。

3 高等学校

「定時制高校に通う生徒の自立・自律へ向けての取り組み」

兵庫県立湊川高等学校
教諭 田口 順一

はじめに

定時制高校には、様々な環境で育ち、それぞれ状況も違う生徒たちが、昼間アルバイトなどをした後に登校し、毎日の学校生活を送っている。本校にも不登校経験のある生徒、怠学傾向のある生徒、他校を退学した生徒、単親家庭の生徒、成人生徒、高齢の年配者生徒など多種多様な生徒たちが通っている。私が過去に担任をしたクラスでは、生徒 26 名中 22 名が単親家庭もしくは親と生活をしていないということもあった。そういった中で、大人や教師に対して不信感をもつ生徒、どう接していいのか分からない生徒、距離感をつかめない生徒も多数いるのが現状である。

そのような生徒達を指導していくには、個に応じた指導が必要であり、そのためには一人ひとりに対する生徒理解が不可欠である。こちらの指導が生徒の心に届くようにするためには、生徒との信頼関係がなければならず、生徒理解と信頼関係の構築に私自身も多くの時間をかけてきた。

私は初任の全日制高校で4年間の勤務を終え、定時制の湊川高校に赴任してきた。本校では、8年間担任をし、その後進路指導部長、総務部長として生徒の自立・自律へ向けて取り組んできたが、私が生徒からの学びをもとに取り組んできた生徒指導・進路指導に関する内容をまとめてみたいと思う。

1 取り組みの内容・方法

(1) 学校生活全般を通して

生徒の自立・自律を促すということは、言い換えれば生徒指導・進路指導ともいえ、これは学校生活全般において生徒と接していくうえで根幹となる部分である。そのため、そのことを肝に銘じ学校生活の全ての場面を使って指導していく必要があると考える。

生徒たちは、どれだけ良い話をしようとも、他の人と同じ話をしようとも信頼のおける教員の話でないと聞かない、聞けないという場面を今までも何度も見てきた。特に大人や教員に対する不信感を持つ生徒はなおさらのことである。そういった生徒と信頼関係を築いていくということは、一朝一夕にはいかず、毎日コツコツとコミュニケーションを積み重ねていくしかない。授業時間はもちろんのこと、空き時間には廊下に立ち、挨拶から始まり他愛のない会話を重ねていくほかなのである。もちろん毎日生徒を観察し、コミュニケーションを重ねる中で、生徒が自分から話をしたいタイプなのか、自分からは話しかけられないが実は話を聞いてほしいタイプなのか、まわりに人がいると話しかけられたくないタイプなのかなど、生徒一人ひとりを理解することにもつ



ながら、そのことが信頼関係の構築にもつながっていくのである。

私自身も「生徒と関わる」ということを大切にしているが、生徒一人ひとりの個に応じた「関わり方」を知り、接していくこともまた重要なのである。こうした毎日の活動を通して生徒たちの自立・自律へむけて指導を行っていくわけであるが、最終的に自立・自律するためには進路の実現も欠かせない目標となってくる。

(2) 進路指導部長（平成 26 年度兵庫県進路指導研究会定通部会進路開拓幹事）として

入学当初、定時制高校に通う生徒の最大の目標は「高校を卒業する」ということである。そのため、卒業後の進路にまで考えが至らなかったり、具体的に卒業後の姿を想像できる生徒が少ないのが現状である。ただ、そういった生徒たちとも深く関わっていくと実は夢や目標を持っており、高校生活を送っていく中でそれをより具体的なものとして取り組ませていく必要がある。進路指導担当としては、生徒たちが進路を実現するための手立てを考えなければならないのである。

私は、平成 26 年度に兵庫県進路指導研究会定通部会進路開拓幹事を務めることとなり、労働局やハローワークの関係者、企業関係者、そして他校の進路指導担当の先生方と接する機会を多く持つことができた。その中で、生徒が進路を実現し就職内定を勝ち取るために以下のような取り組みを行った。

(ア) 定通枠求人の開拓

労働局・ハローワークの協力を得て、企業説明会などで「定通枠求人」（県の定時制通信制高校全体を 1 つの高校のようなものとしてとらえ、指定校求人と同じ扱いで求人の枠をいただくもの）の説明を行ったり、企業を訪問したりして組織的に働きかける。また、合わせて定時制高校生の長所や特長などをその際に伝え、アピールを行う。

(イ) 定通枠求人に対する選考会及び指導会

いただいた定通枠求人を各校に公開し、応募者を募り、選考会にて応募生徒の決定を行う。また、決定した生徒に対して面接及び一般常識の筆記試験対策の指導会を実施し、就職試験に備える。

(ウ) 兵庫労働局・職業安定所・県進指研定通部会交流会の実施

情報交換を主な目的とした交流会を実施し、高校側の状況や問題点を伝えるとともに行政・職安からの報告や意見を聞き、今後の進路指導の活動に活かす。

(3) 総務部長（平成 27～29 年度）として

生徒の自立・自律へ向けて、総務部長として以下のような様々な事業に関わり、生徒の自己有用感や自己肯定感を高めるような取り組みを行っている。

(ア) クリーン作戦の実施

年間 2 回、全校生が少人数のグループに分かれ、学校周辺の地域の清掃活動に取り組む。地域の自治会にも連絡をし、ゴミの分別をしながらゴミ拾いを行う。

(イ) 地域交流学習会の実施

毎年、夏休み中に地域の方に参加していただき、本校生徒とともに学ぶ学習会を実施している。特



地域交流学習会

に平成 29 年度からは、本校の歴史をふまえ「多文化共生・異文化理解」をテーマに講師を招き学習会を実施することとした。平成 29 年度は韓国の文化について学ぶこととし、講義「韓国の文化について」と調理実習「野菜たっぷり海鮮チヂミ」を行った。

(ウ) 防災に関わる取り組み

現状に合わせ、学校防災マニュアルを平成 29 年度に改訂した。また、防災訓練の際には避難場所を変更するとともに、Ｊアラートの対応について生徒に説明を行った。



防災訓練・Ｊアラート対応

2 取り組みの成果

(1) 学校生活全般を通して

毎日の活動の中で生徒とコミュニケーションを取ることによって、少しずつではあるが信頼関係の構築ができていくと考える。何より大事なのは、本当に伝えたいこと、伝えなければならないことを伝えたい時に伝えることができるように、他愛のない会話でもコツコツと積み重ねておくことである。今まで向き合ってきた生徒たちがそうであったが、劇的に関係が良くなるようなドラマみたいな話は現実にはほとんど起こらず、なにより日々の積み重ねが大事である。ただし、ある出来事によって一度に信頼を失ってしまうことはあるので、その点に関しても注意が必要である。

生徒とコミュニケーションを図りながら生徒理解をしていくわけであるが、合わせて生徒の方もこちらがどういった教員なのか、人間なのかを非常によく観察していることを忘れてはいけない。したがって、生徒たちの学年が上がるにつれてより良い関係を築くことができるわけだが、これを特定の生徒のみに行うのではなく、幅広く生徒全体に対して行っていくことでより成果が上がっていくことになる。こういった毎日の活動の先に、生徒の自立・自律へ向けた取り組みが成り立ち、生徒指導や進路指導の効果も上がっていくと考える。

(2) 進路指導部長（平成 26 年度兵庫県進路指導研究会定通部会進路開拓幹事）として

(ア) 平成 26 年度においては、企業の求人説明会への参加や企業訪問を組織的に行い、定通制高校生がすでに勤労経験があり、働くことの大変さを知り、社会人としてのマナーを身につけている点などをアピールすることによって定通枠の求人数が前年より 5 社 17 名増加し、過去 7 年間で最高になり、ピーク時の平成 19 年度レベルに回復することができた。もちろん景気の動向との関係もあるが、積極的に活動した結果、数値が向上した。

※参考 求人数：H19(28 社, 42 名)H20(25 社, 31 名)H21(13 社, 17 名)H22(3 社, 6 名)

H23(10 社, 13 名)H24(15 社, 18 名)H25(21 社, 22 名)H26(26 社, 39 名)

(イ) 定通枠求人を定通制県下全校に公開し、応募者を募り、各校の担当教員との面接などを行い応募生徒を決定した。また、応募することが決定した生徒に対し、模擬面接による面接指導と一般常識に関する筆記試験対策として模擬試験を実施し、定

通卒求人に関する就職試験の指導を行った。その結果、定通卒求人に関する内定率も過去6年間で最高となった。

※参考 内定率：H21(63.6%)H22(28.6%)H23(60.0%)H24(50.0%)H25(58.3%)**H26(77.8%)**

- (ウ) 交流会を実施することで、労働局・職安より様々な情報を得ることができ、高校側からも各校の現状や問題点などを伝えることで意見交換ができ、お互いの要望なども伝えることで今後の進路指導に関する活動について有意義なものとなった。

(3) 総務部長（平成27～29年度）として

- (ア) 地域の清掃活動（クリーン作戦）に取り組むことで地域貢献や美化意識の向上につながることはもちろんのこと、活動中に地域の方から声を掛けられたり、その中でも「ありがとう。」と言われたりすることによって生徒の自己有用感が高められていることが、生徒の事後アンケートからも読み取ることができる。
- (イ) 地域交流学習会に参加した地域の方々と共に生徒が講義を受け、共に調理実習を行い、そして一緒に食事をするという活動を通して、普段接することのない方とコミュニケーションを取り、様々な話を聞くことで生徒の社会性の成長につながった。また、自分たちとは違う国や文化のことを学ぶことによって、人としての視野が広がり、そのことによって自分を認めることにもなり、自己肯定感の向上にもつながった。
- (ウ) 防災面において、定時制高校の生徒には不登校経験のある生徒も多く、避難訓練をあまり経験していない生徒もいる。そういった生徒たちにとって、正しい知識を身につけることがいかに大事なことであるか理解させることが重要である。単に避難やJアラートの対応の仕方について学ぶだけでなく、正しい知識を身につけておくことの重要性やそれをどのように活用して行動する必要があるのかということも理解させなければならない。実際の訓練等を通して正しい知識を身につけることが社会を生き抜く力となり、ひいては自立・自律へとつながるということを意識させることができた。

3 課題及び今後の取組の方向

定時制高校に通う生徒たちが、将来社会に出て自立・自律し自分達の力で生き抜いていくために身につけなければならないことは多い。しかし、生徒たちの多くはアルバイトなどをしており、学校だけでなく様々な場面で社会性などを身につけ、成長していく機会を多く持っている。その中で我々教員は、学校生活においてあらゆる活動を通して生徒たちを指導し、生きる力を身につけさせ自立・自律できるよう導かなければならない。

様々な背景を持つ生徒たちと積極的に関わることでそれぞれの個に応じた生徒理解をし、信頼関係を築き、生徒がこちらの話に耳を傾ける状況を何よりも作っていかなければならない。そういった土台の上に、生徒指導や進路指導を生徒一人ひとりに応じて行っていく、高校卒業、進路実現をできるようサポートしていく必要がある。個性豊かな生徒たちに対して、これが正解だというような指導はなかなか見つからないものであるが、それでも毎日の学校生活の中で時間を大切にし、コツコツと今後も取り組んでいきたいと思う。それが、生徒が社会に出て、生き抜いていく力を身につけていくことにつながると信じて。

「生徒パーソナルファイル」の構築とその取組について

兵庫県立社高等学校
教諭 西本 高丈

はじめに

本校は、県立学校唯一の体育科、地域商業施設の活性化等に貢献している生活科学科、そして医療看護類型など4つの類型を設置している普通科の3学科からなり、それぞれの学科の特色を生かした充実した教育活動により、地域や保護者等から高い評価を得ている。一方、個々の生徒に目を向けると、学校生活への目的意識を見いだせない者や学習意欲の低下している者、さらには、良好な人間関係を築けず集団への帰属意識の低い者、自己有用感や存在感を実感できずにいる者、不登校傾向を示す者、リストカットや自殺未遂を起こす者等、課題を抱えた生徒も少なからず在籍している。

特に、体育科、寮生において、学校生活や寮生活になじめず、不適応や不登校傾向を見せる者が増えており、ここ3年間で進路変更した生徒が、120名中9名も出続けているという現状から「心のサポート推進事業」の指定を頂いたところからこの取り組みは始まっている。

1 取組の内容・方法

(1) 生徒支援システムの構築とその変遷

冒頭にもあったように、本校生徒の多くは、明朗快活で基本的生活習慣が確立できている。しかしながら、一部の生徒の中には、深い課題を抱えた者もあり、より細かな対応が求められていた。そこで、特別支援にあるサポートファイルを参考として生徒一人一人の情報を細かく集約し、それを全教職員が把握することができるシステムの構築に着手した。

パーソナルファイルの観点は、高校生活を始めるにあたり、不安な点や、配慮してほしい事など、本人・保護者・中学校より情報をもらい集約したものをベースとしている。それを校内教職員用のサーバーに保管し、いつでも閲覧、入力が可能となるよう設置した。

また、ポストイット形式を採用することで、日々起こった出来事などを、随時入力することができ、生徒たちの変化を詳細にまとめるようにシステムを構築した。

初年度の書式は、図1のようにし、ポストイット形式のものは、どんどん追加されていくような形で、閲覧しにくいものであった。また、学期に1回プリントアウトしてファイリングして置くことも検討していたが、個人情報であるためセキュリティーの観点

図1 パーソナルファイル原本（初版）

また、個別に支援を要する場合には、その計画を立て、ポストイットの部分に焦点を当て、別ファイルとして活用することも行った。実際に、本事業の対象外の生徒であったが、対応する先生に対してそれぞれ違ったことを言っているケースがあり、パーソナルファイルを活用し、柔軟かつ適切に生徒対応をすることができた。

図 2 パーソナルファイル入力フォーム

図3 ポストイット形式シート

生徒パーソナルファイルの活用の最重要点は、情報をいかに収集していくかにある。また、様々な活動を行うことで、普段見られない状況などを把握し、ポストイットでどんどん情報を集めていくことがポイントとなる。初年度は、本校でも問題を抱えている県一区で寮生活を行っている生徒が多い、体育科1年生40名を対象に行った。

中学校を訪問して、パーソナルファイルの趣
説明と、記入方法の説明、そして生徒個人の
情報収集を行う。全県一区の体育科なので、全
県の中学校訪問には正直難しい面もあるが、直
接会うことで、保護者や生徒からは聞くことの
できない生徒の内面や、家庭環境等も把握する
ことができたのが、一番の成果と捉えている。

- ・各種活動を通じて、ポストイット情報の蓄積

図4 パーソナルファイル説明シート

- 100 -

ることができた。また、2年目も体育科寮生については同様に行い、生活科学科、普通科については、それぞれの科の先生方にご協力頂き、面談や特別活動中の様子などをピックアップしてもらい情報の蓄積を図った。寮生活は以下の通り。

(ア) 7月末まで、1年生の入浴と食事を上級生が来るまでに完了するよう部活動終了時間を早めに設定する。また、可能な限りこの時間帯に教員が寮に待機し、いつでも相談に乗れる体制を考える。

(イ) 舎監の機会を活用し、部活動顧問や第3者による1年生の個人面談を実施する。
(4・5月を中心)

(ウ) 寮生集会を充実・活用し、講演会等、人権感覚育成の取組を行う。

(エ) 保健部と連携し、寮生の希望者を対象とした定期的なカウンセリングを設定(月1回程度)。また、状況によっては、専門機関との連携ができるようにする。

(オ) 寮生自ら寮の規則やマナーを考えさせる取組を行うとともに、寮主催のレクリエーション行事等を開催し、寮生全員の親睦を図る。

(カ) 体育科通学生の寮生活体験において、寮生に指導的な役割、相談役的な役割を担当させる。

(キ) 体育科教員以外の教員が定期的に舎監を担当し、学習支援にあたる。



図5 寮生面談①



図6 寮生面談②



図7 寮生ボーリング大会

・ポストイット形式に重点を置いた活用法

(1)の末尾にも記載したが、応用方法として、ポストイットに重点を置いた活用法も見出すことができた。生徒本人が、対応する先生に対してそれぞれ発言内容が違い情報が錯綜することがあった。その為、実際のやり取りをポストイットに記載しながら、携帯電話のLINE上のやり取りをそのまま画像として貼り付け、生徒の発言に対し共通認識で対応する場面も見られ、情報集約の簡素化がよい結果を導いた。今後の活用方法にも兆しが見られる部分であった。

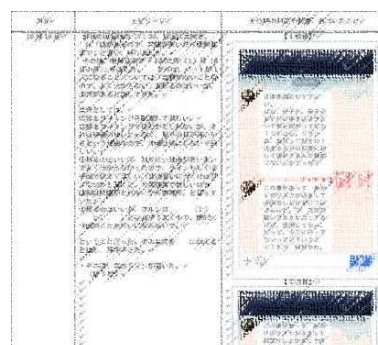


図8 ポストイット形式例

2 取組の成果

(1) 「いじめ未然防止プログラム」を活用した成果

生徒パーソナルファイルの活用と共に、いじめ未然防止プログラムを実践した。アンケート結果の変化を成果の一つとしてとらえている。

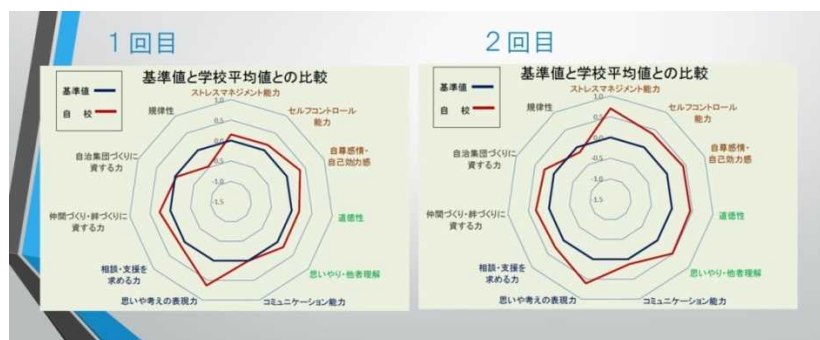


図9 いじめ未然防止プログラムアンケート結果比較

1回目は、入学後1カ月以内に実施したアンケート結果である。その後、数々の取組やパーソナルファイルの活用により、9月に実施した2回目では、ストレスマネジメント能力と思いやり・他者理解の観点がアップしているのがわかる。

また、このグラフは、1つのクラス内で比較したものである。2年目実施のグラフでは各クラス間の違いなども見ることができ、同じ学年でも、集団としての感性の違いなどを把握できるのは大きな情報と言える。

(2) 生活実態調査による成果

初年度は、対象が体育科のみということで、生活実態調査体育科バージョンを作成し、実際に高校生活への満足度変化を追った。1年間の追跡では、長期休業中から帰ってきた時期が、低迷しやすいという結果があり、2年目以降の指導に取り入れた。

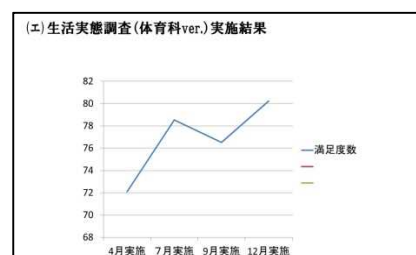


図10 生活実態調査集計

(3) 生徒進路変更者数による成果

過去4年間の体育科生徒40名中の進路変更者数の内訳である。パーソナルファイル実施初年度の平成28年度は、進路変更者がなく、現在も0名のままである。

入学年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度
進路変更者数	5名	3名	0名	3名

3 課題及び今後の取組の方向

- ・計画当初は、この生徒パーソナルファイルをより実用性を高めたものとするため、他校での実施を計画していた。しかし情報管理の厳しさや、担当職員にかなりの負担を強いる可能性があるので、どのように実施してもらうか検討する。
- ・今後の取組として、問題行動を未然に防ぐために、担任、顧問、授業担当者等の観点別評価をパーソナルファイルに取り入れ、その危険因子等を事前に把握できるようなシステムへの発展。
- ・教師からの情報だけでなく、生徒が発した言葉などの情報も取り入れ、教師が生徒対応でどう配慮すべきかという気づきの観点が導入できるものへと発展できれば幸いである。

「働きながら学ぶ生徒の健康管理と進路実現のために」

兵庫県立洲本高等学校

教諭 上 谷 円

1 取組の内容・方法

(1) 兵庫県立青雲高等学校（通信制）における生徒の健康管理のマネジメントと進路実現の模索

平成 18 年度～平成 21 年度まで、保健部長を特に平成 18 年度には保健部長会の定通制部会の幹事を務めさせていただきました。通信制高校では、生徒はスクーリング日のみの登校であり、健康状態を観察することは難しいものがあります。そこで、尿検査を健康管理の第一歩と位置付けて徹底して回収をしました。検尿によってさまざまな生活習慣が知られることを恐れる生徒がいることも想定されるので、検尿でわかることがどこまでかをくりかえし説明し続けました。また、エクセルを利用して健康診断の結果の集計と治療勧告書の配付も始めました。生徒の健康管理に活用するとともに職員の負担軽減もはかりました。

平成 22 年度～平成 24 年度までの年次主任を経て、平成 25 年度～平成 27 年度には進路指導部長を、平成 26 年度には県高校進路指導研究会の神戸地区幹事を務めさせていただきました。年々増加傾向にあった不登校経験や学び直しの生徒の進路をどのように実現していくかが課題でした。就職希望はあるものの、社会経験が乏しく、キャリアプランニングが難しい生徒に対しては、就職に対しての心のハードルを下げることを意識して、ジョブカフェ兵庫やハローワークへの生徒引率し、企業見学、校内説明会を行いました。

進学希望者のために進路指導室の資料も充実させました。毎月生徒に送付する「進路のしおり」は、最新の受験情報を盛り込み、資料の需要具合から生徒の進学希望分野を予測しての紙面を構成していくよう心がけました。また、進学についての説明会を実施し、個別の進学相談にも丁寧に応じました。業者テストは、受験の雰囲気慣れしてもらうために校外の会場を紹介しました。

これらの活動と同時に、企業、大学・専門学校には、不登校経験、学び直しの生徒に対する理解を求めました。

(2) 兵庫県立洲本高等学校（定時制）での生徒理解と支援についての活動

平成 28 年度に洲本高校に着任してから、総務部長として、毎日の打合せ時に「生徒の情報交換」を行っています。最近見聞きした生徒の情報「学ぶ」・「働く」・「学校生活」・「地域の一員として」の良いこと、悪いことを含めて、ざっくばらんに話せる雰囲気づくりを心がけています。

「ふるさと貢献事業」も担当させていただき、地域の老人会、社会福祉協議会などと連携して、地域の一員として生徒の活躍できる場を拡げ、地域住民にこれまで以上に定時制高校を応援していただけるようにしています。

また、地歴公民科として学校設定科目「郷土研究」を担当し、「ふるさと淡路島」に対する基本的な知識の充実と郷土愛の育成を図りました。



＜「郷土研究」 学校近隣のため池の護岸工事の様子を見学する生徒＞

2 取組の成果

(1) 兵庫県立青雲高等学校での取組について

検尿での健康管理の呼びかけの徹底によって、毎年約 1000 人分の検体を集めることができました。結果、若年性糖尿病の罹患者の早期発見・早期治療につなげることができ、若年者の健康を守ることができたことが、もっとも嬉しかったことです。非常勤の養護教員、保健部の先生方、保健体育科の先生方のご協力あってこそこの成果です。また、学校内研修で得た技能をもとにして作成したエクセルの集計表は、現在も改良を続けて使用されていると伺っています。

学卒就職への心のハードルを下げることで、1 度の不採用通知で諦めないよう励まし続けた結果、多数が学卒就職し、それを知った生徒が次に学卒就職を志すというよい循環が生まれました。就職先送りを考える生徒に自分のこれからのキャリアを考えさせることができたことなど、就職担当、就職開拓支援員と機動的にケース会議を持ち、生徒を指導できたことが大きかったと思います。

進学では、国公立大学を含む 4 年制大学や短期大学、専門学校への進学者も順調に増え、生徒にやればできるとの自信をつけることができたのではないかと思います。

生徒への指導と並行して、通信制高校で学ぶ生徒への理解を求める働きかけでは、ハローワークが企業への求人説明会にて通信制高校生への配慮を呼び掛けて下さり、また多くの大学・専門学校が推薦入試での欠席要件から通信制高校を除く旨を明記して、生徒の努力を評価して下さることになりました。

就職・進学を問わず、若年者が社会とつながり続けることに微力ながら寄与できたと思っております。

(2) 兵庫県立洲本高等学校での取組について

「生徒の情報交換」を頻繁におこなうことから情報を共有し、一人一人の生徒を全教員が、「学ぶ」・「働く」・「地域の一員」としてなど、多角的に見ることができるようになり、ここから、生徒の成長を支援する、多面的で多様な指導へとつながり、生徒指導件数の大幅な減少、不登校経験生徒の学習継続率の向上につなげることができたと考えています。

地元の老人会とは、学校周辺清掃や学校行事を通じて交流しています。清掃では、「いつもは清掃できないようなところも清掃できてうれしい」と喜んでもらっています。体育祭は、地元老人会チームと定時制チームとの綱引きを楽しみに、多くの方が参加して下さっています。

学校設定科目「郷土研究」についても、文献を読んだり、巡検を行う中で生徒が「ふるさと淡路島」について島外出身の私に教えるという双方向の授業が展開できるという思わぬ成果があがり、生徒が淡路島に対して深い愛情を持っていることが感じられました。



＜海水浴シーズンを前に^{たけのくち}炬口海水浴場の清掃をする＞



＜洲本高校定時制ののぼりを立てて、学校周辺を地元老人会とともに清掃する＞



＜ 体育祭 生徒優勝学年と地元老人会の綱引きエキシビジョンマッチ＞

3 課題及び今後の取組の方向

定時制通信制には生産年齢人口の最も若い層が「働きながら学んで」います。健康管理や進路実現は見落とされてしまう可能性があり、また、勤労高校生については、若年者労働の問題研究からも取り残されている感があります。この勤労高校生の労働と学びについて考えていくことが、これからの課題と考えています。

たとえば、生徒の多くは小規模な事業所でのアルバイトなどの非正規就労が多く、体調の悪化を「勤務多忙による疲労蓄積」と自己判断してしまう場合もあり得ます。その点から学校健診は健康を守る上で重要な位置を占めていると思われます。

働きながらの「学び」についても授業や教材の見直しを進めます。世界史Aの授業でも「国王のかけもちがブラックやで～」と自らに引きつけて共感する生徒たちです。高校は多くの生徒にとって最後の学校となることから、幅広い教養を身に付けて社会に送り出したいと考えています。生徒たちは、下校時には「お疲れ～」と挨拶をします。教える者と学ぶ者との厳然たる違いはありますが、同じ働く者としての共感がそこにはあります。一人一人の生徒を多面的にとらえ、個々に応じた指導を進めていくために、今後も情報交換を続けていきたいと思っています。

最後になりましたが、淡路島は、若年者人口の流出という問題があります。その中で、地域を支える若者として、定時制の生徒は期待されています。学校と地域とが一つになって、若年者の進路が実現できるよう協力を仰ぐこと、それが進められるよう洲本高校のチームワークを今以上に高めていくことに微力を尽くしていきたいと思っています。

「未知への挑戦 ―三田祥雲館高校天文部 9 年間の歩み―」

兵庫県立三田祥雲館高等学校

教諭 谷川 智 康

1 取組の内容・方法

(1) 天文部の概要

私は 2009 年 4 月に三田祥雲館高校に着任した。そして準備期間を経て 2010 年 1 月に天文同好会を設立した。本校は今年度よりスーパーサイエンスハイスクール (SSH) にⅡ期目の指定を受けているが、私が本校に着任した 2009 年度は 1 期目の SSH がスタートする時であった。三田祥雲館高校の第Ⅰ期 SSH の目的の一つとして“理数系クラブ活動の支援”とあったため、天文部を立ち上げるには良いタイミングであった。

天文部は設立当初より「研究活動」と「天文普及活動」を活動の 2 本柱として活動が続けてきた。「研究」については、まだ誰も知らない事実 を世界で初めて手にする “未知への挑戦 “こそ、研究の醍醐味 であるとし、新しいテーマに果敢にチャレンジしてきた。「天文普及」については、“祥雲星空教室”を年に数回開き、地域の小中学生を中心に星空解説を生徒たちの手で行ってきた。天文普及と地域貢献が第一のねらいであるが、子供たちに天文現象を解説することで、



部員たちの知識、技能を向上させることもねらいの 写真 1 ACM2012 での発表 一つである。

「小惑星 sandahoukan」について

2012 年 5 月新潟市で太陽系小天体の研究者が集う国際学会 Asteroids, Comets, Meteors (ACM) 2012 がアジアで初めて開催された。ACM2012 に高校生としては初めて、三田祥雲館高校、小倉高校、一宮高校の 3 校が参加した。私たちは発表タイトル「Photometric observations of Comet C/2009P1 (Garradd)」で英語によるポスター発表を行った。この出場を記念してローエル天文台が発見した小惑星 2000F026 が Sandashoukan と名付けられた。

(2) 研究テーマと成果

今まで取り組んできた研究テーマで代表的なものは“太陽半径の測定”、“未知の小惑星の自転周期の測定”及び“宇宙天気予報への挑戦”である。

① “太陽半径の測定”

太陽半径は理科年表などでは 696,000km とされているが、これはおよそその半径であって、詳しい値の測定を試みた機会は少ない。2012 年 5 月 21 日、日本の太平洋側を中心に金環日食が観測された。この金環日食の際に起こるベイリービーズを利用して太陽半径の測定に挑戦した。ベイリービーズの発生原因は、月の山や谷による地形である。月や太陽の中心の天球上での位置は極めて正確に予報される。月の山の高さ、谷の深さが正確にわかれば太陽の直径が計測できる。



写真 2 金環日食の観測の様子

月を定規として太陽の直径を測ろうというのがこの研究の基本アイデアである。2007-2009 年にかけて運用された日本の月探査機「かぐや」によって月面上の詳しい地形が数メートルの精度で測定された直後であり、その成果を活用する絶好の機会だったのである。本校の所在地である三田市の 10km 程南を金環帯と部分食帯の境界線が通ることが予想されていた。この境界線上はベイリービーズの観測に適している。私たちは境界線上に遠征して金環日食を撮像し、成功した。誰もまだ取り組んだことがない研究だったため、解析方法は試行錯誤を繰り返し苦労したが太陽半径 696,016km と求めた。この研究により第 37 回全国総合文化祭自然科学発表部門研究発表地学部門で優秀賞を受賞した。

② “小惑星 Sandashoukan の自転周期の測定”

現在発見されている小惑星は約 70 万個あるが、自転周期が判明しているのはその数%である。学校名がつけられた小惑星 Sandashoukan もそれらの自転周期が未知である小惑星の一つであった。小惑星 Sandashoukan は比較的大きな軌道傾斜角を持っており、命名当初は北半球からの長時間観測が難しい位置にあった。2014 年秋より北半球でも観測できる位置に移動して来たため観測を開始した。小惑星の自転周期を決定するには長時間にわたる連続観測が不可欠である。そのため、ターゲットの小惑星の衝のシーズンに観測をする必要がある。私たちは 2014 年 9 月から 11 月、及び 2016 年 1 月から 2 月の衝に観測を行った。まず、2014 年 9 月からの最初の観測で小惑星 Sandashoukan は 30 時間近い長い自転周期を持つことが予想された。かなり長時間の自転周期のため、日本からの観測だけ

でなく地球の夜を追いかけるように、欧米のリモート望遠鏡も用い連続観測を行った。長時間の解析の末、自転周期を 33.6 時間と決定した。この研究成果を発表するには専門誌に英文で結果を報告する必要があった。かなり高いハードルであったが、英語による論文執筆に挑戦した。世界中の小惑星の観測報告は Minor Planet Bulletin (MPB) に集まる。いきなり何もないところから論文の執筆には困難が伴う。そこで、MPB に発表されている他の研究者の論文を読み、英“借”文の手法で論文作成に取り組んだ。そのようにして論文を作成、投稿し査読の末、掲載された。また、2016 年 1 月から観測でも地球の夜を追いかけるように長時間連続して観測する方法を継続した。2014 年の観測ではリモート望遠鏡を用いたが、リモート望遠鏡は長時間独占使用ができない上、予約を入れても機材の不調で満足の行く画像がえられないことがある、などの障害があった。そこで、小惑星の観測者のメーリングリストに依頼し共同観測者を募った。その結果 5 カ国 5 名の方々より協力の申し出があった。これら協力の依頼などは生徒たちが英文メールを作成し、メーリングリストに投稿した。このようにしてリモート望遠鏡に代わり、共同観測者による長時間観測を実施し、小惑星 Sandashoukan の自転周期を 31.12 時間とさらに詳しく求めた。小惑星の自転周期についてはこの Sandashoukan の他にも 5 つの小惑星について求めて結果を MPB に報告した。そのうちのひとつ小惑星 Nishiharima の自転周期は未知であって私たちの手で初めて求められた。

ちなみに Nishiharima は私達が観測でよく訪れている兵庫県立大学西はりま天文台にちなんで名付けられた小惑星である。

③宇宙天気予報への挑戦

地球に重大な影響を及ぼす太陽フレア発生予測をする宇宙天気予報の手法を研究した。太陽活動の研究を行うにはできるだけ長期間のデータを必要とし、私たちの学校で観測した数年間のデータでは情報が不足している。そこで、アメリカ空軍やウィルソン山天文台など世界各地の観測機関のデータアーカイブを活用した。それらデータアーカイブを元に 1 万個以上の黒点について最大面積、発達した最大の磁場タイプ及びそのフレア指数を計算した。その結果、大規模フレアを発生させやすいのは $\beta\gamma\delta$ タイプなどの複雑になった磁場タイプ（この論文では“ $\beta\gamma\delta$ 複合タイプ”と呼ぶ）の黒点であることがわかった。さらに $\beta\gamma\delta$ 複合タイプの黒点は太陽活動サイクルで黒点相対数がピークを迎えるのと同じか、それより 2, 3 年



写真 3 全国総合文化祭表彰式の

後に発生しやすいことがわかった。そこで、過去に地球に影響を及ぼした太陽フレアが発生した位置、太陽経度を調査した。その結果、太陽中央経度よりやや東側に発生するフレアに注目をすればいいことがわかった。ただし、Xクラスフレアについては全経度で警戒が必要である。また、大規模フレアを発生させる黒点の特徴としてその直前に黒点の面積が急激に増加をしている場合が多いこともわかった。この研究によって、大規模フレアが発生しやすい時期、警戒すべき太陽面経度、及びその太陽黒点の特徴が明らかになり、宇宙天気予報の有力な情報を提供できることになった。この研究成果は第41回全国総合文化祭自然科学発表部門研究発表地学部門で最優秀賞を受賞した。また研究内容をまとめた論文は学術的な価値も認められ京都大学が出版する ELCAS Journal Vol3 2018 に掲載された。

2 取組の成果

(1) 各種の発表会に積極的に参加し研究成果を発表した。その結果を表1にまとめた。

(2) また研究の付随的な効果として科学英語力の育成があげられる。研究成果を英語により論文、口頭の形で積極的に発表した。2015年12月にはタイ、チェンマイ市で行われた 2nd Thai Astronomical Conference (student session)に参加し部員10名が英語で口頭及びポスター発表を行った。これらの活動を通じ生徒たちの英語力が飛躍的に向上し、また英語に対する姿勢が積極的になった。

(表1) 主な受賞記録

2011年 第35回	兵庫県高等学校総合文化祭自然科学発表会地学分野	優秀賞
2012年 第36回	兵庫県高等学校総合文化祭自然科学発表会地学分野	最優秀賞
2013年 第37回	全国高等学校総合文化祭自然科学発表会地学部門	優秀賞
	第37回 兵庫県高等学校総合文化祭自然科学発表会地学分野	優秀賞
2014年 第38回	兵庫県高等学校総合文化祭自然科学発表会地学分野	優秀賞
2015年 第59回	日本学生科学賞 兵庫県コンクール	兵庫県知事賞
	第39回 兵庫県高等学校総合文化祭自然科学部門発表会地学分野	最優秀賞
2016年 第40回	全国高等学校総合文化祭自然科学発表会 地学部門	奨励賞
	第40回 兵庫県高等学校総合文化祭自然科学部門発表会地学分野	最優秀賞
2017年 第41回	全国高等学校総合文化祭自然科学発表会 地学部門	最優秀賞
	第61回 日本学生科学賞 兵庫県コンクール	兵庫県教育長賞
	第41回 兵庫県高等学校総合文化祭自然科学部門発表会地学分野	最優秀賞

3 課題及び今後の取組の方向

「未知への挑戦」をテーマに指導を続け上記の成果をあげることができた。その要因の一つには私自身が研究を継続し続けていることがある。自分自身が楽しみながら探究できるテーマを持ち、生徒たちと一緒に楽しみながら「未知への挑戦」を続ける姿勢を忘れずに今後も活動したい。

学校農業クラブ活動を通した、実践的な教育活動に関する取り組み

兵庫県立有馬高等学校
教諭 長光 雅実

学校農業クラブ活動を通した、実践的な教育活動に関する取り組み

1 取組の内容・方法

農業高校には学習指導要領にも位置づけられている「学校農業クラブ」が存在する。学校農業クラブは全国の農業系高校生約 90,000 人が加入する組織で、正式名称を日本学校農業クラブ連盟〔Future Farmers of Japan〕という。平成 29 年度、兵庫県は 11 校の単位クラブ（農業を学べる高校）、2,767 人のクラブ員（農業高校生）が所属している。クラブ員は教科・科目での学びにとどまらず、様々な研究活動や地域との交流活動をおこなっている。私は農業高校の教員として赴任して以来 14 年間、学校農業クラブ活動を通して様々な活動を行い、生徒とともに成長してきた。その中のいくつかの事例を紹介する。

（1）ため池の利活用を通した地域との交流活動（平成 16 年～平成 21 年 県立農業高校にて）

農業用水の確保のためにあるため池は、県内に約 40,000 個あり全国一の数を誇るが、都市化による農地の減少等が理由で数が減少している。また残ったため池も周囲が住宅や工場に囲まれているものが増え、周辺住民と水利組合（農家）との意思疎通も問題となってきた。

ため池は農業用水という役割の他に、洪水防止や防火用水、貴重な動植物の生息場所、人々の憩いの場所にもなり、農業に従事する者以外にとっても重要な意味を持っている。そこで高校内に農業クラブ専門班「ため池調査班」を立ち上げ管理者である農家（水利組合）と周辺住民との距離を縮める活動を生徒とともに行った。

活動では、地域にあるため池の改修工事の際、その計画策定に生徒が参加し、話し合いを重ねたり、水耕栽培により池で野菜（空心菜）を生産することで、水質浄化と食料生産を両立させる取り組みなどを行った。さらに「いなみ野ため池群を世界遺産に」をスローガンに様々な会議やイベントへの参加、研究・活動発表、競技会への出場を通して積極的に情報発信した。



**2年目の野菜イカダ設置
（稲美町 天満大池）**



**地元の方と空心菜収穫試食会
（加古川市 峠池）**

（2）農業クラブ各種競技会を通した、農業担い手育成に向けた取り組み（平成 22 年～）

学校農業クラブ活動の一つに、日頃の学習の成果を競う合う各種競技会が存在する。具体的には農業鑑定競技、プロジェクト発表競技、意見発表競技、家畜審査競技など農業に関する専門的な知識や技術を競い合う様々な種目があり、校内予選会を経て県大会、近畿大会そして全国大会での最優秀賞を目指しクラブ員（生徒）は熱心に取り組んでいる。私はこの各種競技会の指導を通して、生徒に農業への興味関心を高める教育、そして将来兵

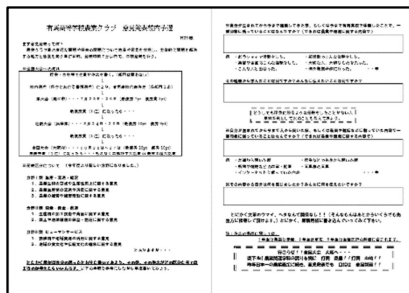
庫県の農業の担い手となる人材育成に努めてきた。

特に現任の有馬高校では、農業鑑定競技と意見発表競技に力をいれている。農業鑑定競技は、目の前に並べられた植物体や栽培用具、病気や害虫などの実物を短時間で判別し、問われた問題を解答する競技であり、幅広い知識が問われる。指導においては、入学時より「農業と環境」の授業を通して意識付けを行い、自主的な学習ができる環境作りに努めてきた。そして結果を残してきた先輩方にあこがれを持つように導き、毎年全国制覇を目指す生徒が出てくるようになり、平成 27 年度には全国大会に出場した生徒が文部科学大臣賞を受賞し、農業系の国公立大学への進学を達成できた。

また、高校での農業学習を通して学んだり考えたりしている身近な問題や将来の問題について、抱負や意見をまとめ、観衆の前で発表し、その内容や発表の仕方を競い合う意見発表競技では、生徒の考えや将来の目標をまとめやすくなるワークシートを作り、全ての生徒に書かせることで、気付かなかった自分の可能性が発見できる工夫をしている。そして本校の代表となった生徒の指導においては、「練習で 120%、本番で 100%の力を出す」を合い言葉に、繰り返しの指導で自信をつけさせることを心がけている。その結果、多くの生徒が全国大会への出場を果たすとともに、平成 26 年度には全国大会に出場した生徒が「全国農業担い手サミット in ひょうご」にて、全国の農業高校生代表として皇太子殿下の前で意見発表を行い、現在は新規就農者として活躍している。



農業鑑定競技校内予選会
(有馬高校内)



意見発表競技ワークシート

(3) 兵庫県学校農業クラブ連盟主任顧問として、事務局運営(平成 29 年度)

兵庫県学校農業クラブ連盟の事務局は、県内の農業高校が持ち回りで運営されている。県内農業高校の学科数の減少に伴い、今年度初のブロック開催(小規模校が数校協力して事務局運営する。今年度は有馬高校が主担当校となり、篠山東雲高校・篠山産業高校と合同で運営)による運営となった。主な行事は以下の通りである。

理事会(5月・2月)

県下 11 校の単位クラブ会長・副会長が集まり、生徒が主体となり兵庫県学校農業クラブ連盟の活動方針や県連盟事業、県大会などの運営方針について話し合ったり、他校の生徒と交流を行った。

リーダー講習会

県下 11 校の単位クラブ本部役員を中心に、各単位クラブのリーダー 131 名が参加した。午前中は有馬高校で、各校農業クラブ活動の活性化を目標にクラブ活動発表会を開催した。各校の農業クラブ活動について発表し合うことで、お互いの活動に刺激を受けたり参考に

したりすることで兵庫県全体の活性化につながった。

午後からは分科会を開催した。今年度は有馬高校の特色である環境学習を中心に企画し、県立有馬富士公園を活動場所として、里山管理体験や植物・昆虫観察会などを企画した。最後の全体会では、各分科会の報告を、写真を用いて行い情報を共有した。他校生とも交流でき、良い時間となった。



**リーダー講習会分科会
里山管理体験**

・第65回兵庫県学校農業クラブ連盟大会

別名農業高校の甲子園と呼ばれる、農業クラブ連盟大会。開会式では三田市長、谷公一衆議院議員を始め多くのご来賓をお招きし、各校単位クラブ旗入場を始め盛大に開催された。午後からは本校事務局生徒を中心に、プロジェクト発表競技会、意見発表競技会、農業鑑定競技会が滞りなく実施され、京都で開催される近畿大会、岡山県で開催される全国大会へ駒を進める兵庫県代表者が決定した。

・新しい農業を目指す高校生等の集い

将来農業自営、農業関連産業への就職を考えている生徒が集まり、地域で活躍、成功されている先輩農業者をお招きし、将来の進路実現につなげる事業である。今年度は160名のクラブ員が参加し、阪神農業改良普及センター管内の先輩農業者5名に参加いただき、ご講演、並びに座談会を開催した。さらに集いでは、兵庫県若手地域農業リーダー育成事業（ブラジル研修）の報告や、県立農業大学校、楽農センターの紹介も行われた。



先輩農業者を囲む座談会

2 取組の成果

教諭として勤めた16年のうち、14年間農業クラブ顧問（13年間単位クラブ顧問、本年度は県連主任顧問）として生徒を指導してきた。また、毎年各種競技会の指導に携わり、生徒の力を伸ばしてきた。学校農業クラブ活動を通して指導し、生徒が活躍した競技会などの成果ならびに県連盟主任顧問としての成果は以下の通りである。

（1）前任校（県立農業高校）における主な生徒の活躍

- ・H16 意見発表競技文化生活の部 県優秀賞
第1回グリーンスクール知事表彰受賞
- ・H17 プロジェクト発表競技環境の部 全国大会優秀賞
日本水大賞奨励賞受賞(翌年フランスへ生徒派遣)
- ・H18 意見発表競技環境の部 全国大会優秀賞
- ・H19 意見発表競技食料生産の部 全国大会優秀賞
- ・H20 プロジェクト発表競技環境の部 県優秀賞
- ・H21 意見発表競技文化生活の部 県優秀賞



**EMECSTIn フランスにて発表
[世界調索性海域環境保全会議]
(平成18年5月)**

(2) 当該校（県立有馬高校）における主な生徒の活躍

- ・ H22 意見発表競技環境の部 県優秀賞
高校生地域貢献活動発表会 優秀賞
- ・ H23 意見発表競技環境の部 全国大会優秀賞
- ・ H24 意見発表競技環境の部 県優秀賞
農業鑑定競技測定の部 全国大会優秀賞
- ・ H25 意見発表競技食料生産の部 県優秀賞
農業鑑定競技園芸の部 全国大会優秀賞
- ・ H26 意見発表競技食料生産の部 全国大会出場
全国農業担い手サミット in ひょうごにて、農業
高校生代表として皇太子殿下の前で発表
農業鑑定競技園芸の部 全国大会優秀賞
- ・ H27 意見発表競技食料生産の部 県優秀賞
農業鑑定競技園芸の部
全国大会最優秀賞&総合優勝(文部科学大臣賞)
- ・ H28 意見発表競技食料生産の部 県優秀賞
農業鑑定競技園芸の部 全国優秀賞

※プロジェクト発表競技、意見発表競技、農業鑑定競技
は 農業クラブ連盟主催の競技会



**意見発表競技全国大会
(平成26年10月)**



**農業鑑定競技全国大会
文部科学大臣賞受賞
(平成27年10月)**

(3) 兵庫県学校農業クラブ連盟主任顧問としての成果

県全体としては、今後継続的に県連盟事業を継続できるような運営形態を確立した。具体的にはブロック開催の形をつくとともに、事業の学校開催や県連盟大会の1日開催など、事業の簡素化に務めた。

有馬高校としては、今年度県連盟本部役員を務めた生徒は、1学年から事務局運営の準備をしてきた。事務局の運営を通して、農業クラブの3大目標でもある指導性・社会性・科学性が個々の生徒で飛躍的に向上し、本部役員を務めた生徒3名が農学系国公立大学への進学を果たすなど、就職・進学も含め進路実現につながった。

3 課題及び今後の取り組みの方向

競技会においては、引き続き生徒の指導に力を入れていくことはもちろん、継続的に就農を目指す生徒を増やすことを目標としたい。また、若手教員にも農業クラブ活動における効果的な指導方法を引き継いでいきたい。

さらに、平成33年には、兵庫県で日本学校農業クラブ全国大会が開催される。そのなかで有馬高校は、意見発表競技会の実施担当校となる予定である。今回、兵庫県学校農業クラブ連盟主任顧問をさせていただいた経験を活かし、大会の成功に尽力するとともに、大会を通して学校農業クラブ活動の魅力やクラブ員（農業高校生）の成長、活躍を多くの方に知ってもらえるよう工夫していきたい。

4 特別支援学校

「自分らしく働く」を目指したデュアルシステム ～障害のある生徒の就労実現を目指して～

兵庫県立西神戸高等特別支援学校
主幹教諭 森川 晃

1 はじめに

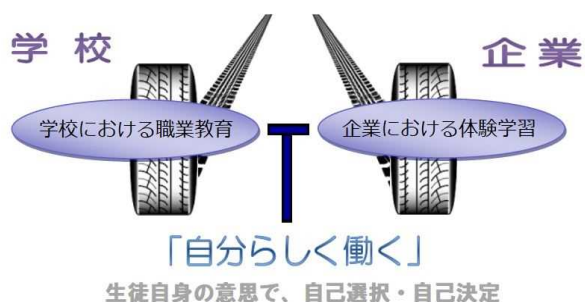
日本は、2007（平成 19）年に「障害者権利条約」に署名し、2014（平成 25）年に批准した。その間に国内では、障害者基本法の改正、障害者総合支援法の成立、障害者差別解消法の成立および障害者雇用促進法の改正など、様々な法制度整備が行われてきた。障害のある生徒が、社会に対し積極的に参加・貢献していくことができる「共生社会」への準備が整ってきたのである。一方、特別支援教育には、生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、生徒の能力や可能性を最大限に伸ばすことで、自立し社会参加させるための支援が求められている。このような背景のなか知的障害のある生徒の就労実現を目指し行ってきたデュアルシステムの取り組みを紹介したい。

2 各校のデュアルシステム

特別支援学校においては、兵庫県特別支援教育推進計画に基づき、キャリア教育・就労支援の充実が求められている。私は、そのなかで県立播磨特別支援学校の就業技術科（平成 21 年度開設）、県立姫路しらさぎ特別支援学校（平成 26 年度開校）、県立西神戸高等特別支援学校（平成 29 年度開校）の立ち上げに携わり、教育課程の編成及び進路指導体制としてデュアルシステムの構築を行ってきた。

それぞれの学校で構築したデュアルシステムを紹介する。

デュアルシステムとは、学校における職業教育と企業における実習とを並行的に実施する職業訓練システムである。



▲デュアルシステムの概念図

(1) 県立播磨特別支援学校

「播磨デュアルシステム」

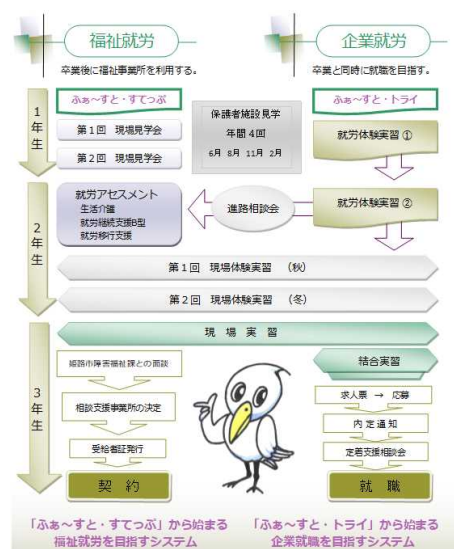
職業体験実習を 1 年生で 2 回、2 年生で 3 回行い、3 年生の就職活動までに、様々な職業の中から自分らしさを発揮できる職業を見つけていく。1 回の実習は 2 週間であり、実習が終わるごとに、個別の進路相談会を開き、振り返りながら、次回の実習先を進路指導部と担任と生徒・保護者とともに決めていくシステムである。



(2) 県立姫路しらさぎ特別支援学校

「ふぁ～すと・トライ」から始まるシステム
企業就職を希望する生徒に対して、1年生9月より就労移行支援事業所や就労継続支援A型事業所での体験実習（ふぁ～すと・トライ）を試み、結果によって2年生の終わりまでに企業体験実習（1週間）を2回、現場体験実習（2週間）を2回実施する。

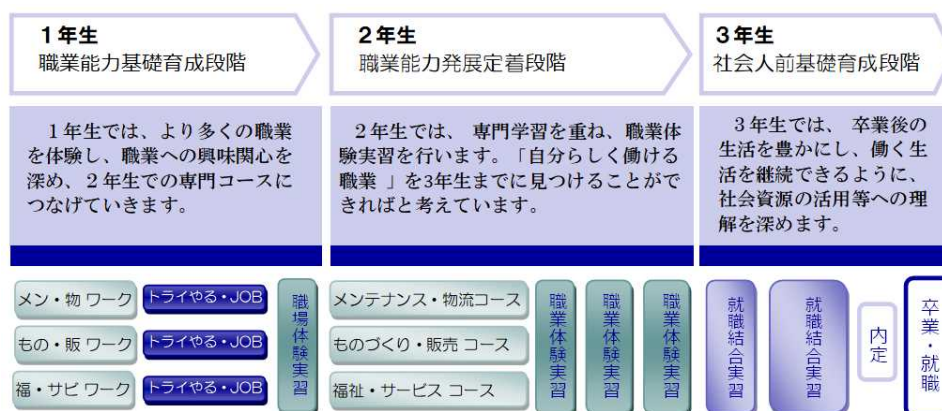
進路の個別相談会を実習の終了ごとに実施し、卒業後、直ぐの企業就職を目指すか、または、卒業後に就労移行支援事業所や職業訓練校を通すかを適時検討していく。自分らしく企業就職を目指す方法を探るシステムである。



(3) 県立西神戸高等特別支援学校

「西神戸版デュアルシステム」

校内で各種の職業技術を学ぶワーク学習を実施し、その後に企業で実体験（トライやる・JOB）を行う流れを1年生で3回繰り返し実施する。その結果を2年生でのコース学習につなげて行く。2年生では、さらに各コースで職業技術に対する学びを深めながら、3回の職業体験実習（2週間）を行い、自分らしく働く職業を、生徒自身の意思で、自己選択・自己決定できるよう支援するシステムである。



3 デュアルシステムのめざすもの

デュアルシステムにおける企業での体験実習は、実践的な「ほんもの」の体験を通し、職業観・勤労観を形成することが大きな目標となる。その過程で「自分らしく働く」「自分らしく生きる」を、生徒自身の意思で、自己選択・自己決定できるよう支援することが、進路指導の核となることを意識していかなければならない。これが、昨今、課題となっている就職後の離職の減少につながるということを留意すべきであると考えます。

また、デュアルシステムは、企業就職を実現するだけのシステムではなく、卒業後、就労移行支援事業所や就労継続支援事業所、職業訓練校等の選択も含め、「働くことを自分らしく目指す」を見出すシステムでもある。学校で学んだ職業教育の成果と高めた就労に対する意欲を卒業後につなげる目的も併せ持っている。

4 体験実習を通しての質的成長

体験実習を終える毎に、生徒の自信にあふれた声が聞こえ、成長を感じる場面に出会える。普段の教室で指導されている内容が、現場で認められた時に生じる自己有用感のなせるものであろう。体験実習で得た自信が、実習後の授業で学ぼうとする意欲につながっていくのである。この意欲の循環と上昇（質的成長）が「働く意欲の育成」に他ならないということを感じている。

自分が、さほど努力もしていないことに対して「よく頑張りましたね」と褒められても、さほどうれしくもなく、励みにもならないものである。普段の職業教育が、生徒に達成感や充実感を与えることができ、かつ主体的に動ける工夫がされたものでなければ、自己有用感を感じるまでには至らないのである。

西神戸高等特別支援学校では、1年生でトライやる・JOBに取り組んでいる。校内で、それぞれの職業に必要な30時間の専門学習（ワーク）に取り組んだ後、3日間の仕事体験を企業に依頼している。6種の職業について学び、3種の職業を選択し、抽象的な学びをより具体的な職業観に変えていく。校内での学習と企業での体験内容の整合性を図り、生徒の自己有用感を高めている。



1年生 職業能力基礎育成段階

全員が農園芸や受託作業を実施し、職業基礎を育成
メンテナン・物流 ワーク 各ワーク30時間の専門的
ものづくり・販売 ワーク 授業を実施した後で、3日
福祉・サービス ワーク 間の職業体験を実施
2年生の3つのコース選択につながるワークを履修し、
トライやる・JOBの体験で確かなものとする

2年生 職業能力発展定着段階

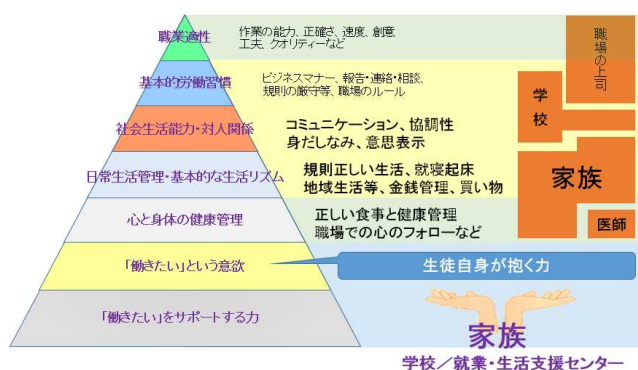
メンテナン・物流 コース
ものづくり・販売 コース
福祉・サービス コース
キャリアガイダンス
(個別の進路相談会)
職業体験実習
自己選択
自己決定

また、2年生では、1年生での取り組みから職業について学ぶコースを選択し、さらに職業についての専門的な学習を重ねる。その学びをもとに企業での職業体験実習を実施し、さらに自己肯定感・有用感を高め、意欲の循環と上昇（質的成長）を図っていく。

普段の授業が達成感や充実感が得られる内容となるように、社会的自立と職業的自立に向けた授業と体験実習から得た課題が三位一体となった教育課程を編成することが今後の課題となる。

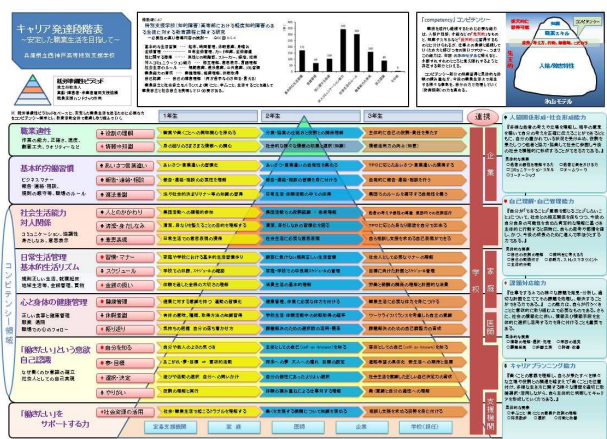
5 「働く」を目指すために必要なもの

意欲の循環と上昇（質的成長）のためには、デュアルシステムでの体験を振り返り言語化し、活動の意味づけを大切にすることをキャリア発達の視点で取り組むことが重要となる。県立西神戸高等特別支援学校では、キャリア発達段階表を「働く準備性ピラミッド」を基準に作成している。働く上で、①職業適性（作業能力）や労働習慣は、必要なもので



はあるが、その重要度は低い。就職後、企業内において、時間をかけ技術向上を図り、作業環境・内容への合理的配慮で改善が見込まれる部分でもある。大切なのは、その仕事力を支える土台となる部分である。②社会生活・日常生活の能力、対人関係や生活リズムなどの確立がより重要なベースとなるのである。そして何より必要となるのは、③「働きたい」という意欲であり、それを支える支援力である。④支援力は、家庭であり学校であり、また福祉関係機関である。

企業で働きたいという願いが叶うかどうかは、①～④の総合的な大きさで決まる。ゆえに私は、作業能力が低くても家庭や担任の支えが大きく、かつ本人の就労意欲が高い場合に企業就労ができた例を多く経験している。就労を支援するには、発達段階表に表した領域へのそれぞれのアプローチが教育活動全般にわたり計画的に求められることが必要となるのである。



▲キャリア発達段階表（西神戸高等特別支援学校）

6 ガイダンス機能の充実

主体的な進路選択を支援するためには、生徒の能力・適性、興味・関心と職種希望等に基づいた「個に応じたガイダンス機能」を充実させることが重要である。県立西神戸高等特別支援学校では、各生徒に進路ガイダンスを実習先の選定に合わせるように実施している。生徒・保護者及び担任が、進路担当者に今後の進路指導の方向性について相談を行う形式で実施している。進路ガイダンスでは、就労先の情報提供を積極的に行い、また生徒の体験実習先の希望に耳を傾ける。前回の実習の振り返りを行いながら次の実習先の選定を生徒自身が行うことで、自分らしさを発揮できる職業へのマッチングを図っていく。進路指導は、生徒に対して教師が一方的に与えるだけでなく、生徒が主体的に考えながら自らが積極的に取り組んでいくものであると考える。そのためには、ガイダンスを軸に進路担当者や担任の計画的、組織的なチーム支援が大切なのである。

7 共生社会に向けて

デュアルシステムは、共生社会に向けて企業への障害者雇用の理解啓発の一面も併せ持っている。生徒の居住する地域周辺で実習先を広く新規開拓し、実習を通し生徒が、そこでの頑張りを見せることで、企業の障害者雇用への理解を深めていく効果も大きいのである。企業のコンプライアンスと社会貢献の意識は、大きく前進していると実感できる。しかしながら、障害者への理解不足から、障害者雇用に踏み切れない企業が多く存在することも同時に見えてくる部分である。デュアルシステムの取り組み自体が、共生社会へ礎を築く活動となることを信じながら、これからも一層の努力を惜しまず取り組んでいきたい。

「12年間を通してのキャリア教育を目指して」

兵庫県立東はりま特別支援学校

主幹教諭 越 田 典 子

1 取組の内容・方法

(1) はじめに

本校は知的障害児を対象とした学校として、平成21年4月に開校した。校訓「明るく 正しく 元気よく」を掲げ、将来、社会の一員として主体的に参加し、自立できる力を育成するとともに、「生きる力」を育てることを目標としている。図1は本校のキャリア教育発達段階表である。各学部のスローガンは小学部「がんばる子になろう!」、中学部は「まなぶ人になろう!」、高等部は「はたらく人になろう!」を掲げて取り組んでいる。また、小学部は「基本的生活習慣を身につける段階」、中学部は「生活経験・社会体験を広げる段階」、高等部では「社会生活・職業生活をする力を身につける段階」ととらえ、スモールステップを踏んで身につけるように指導している。

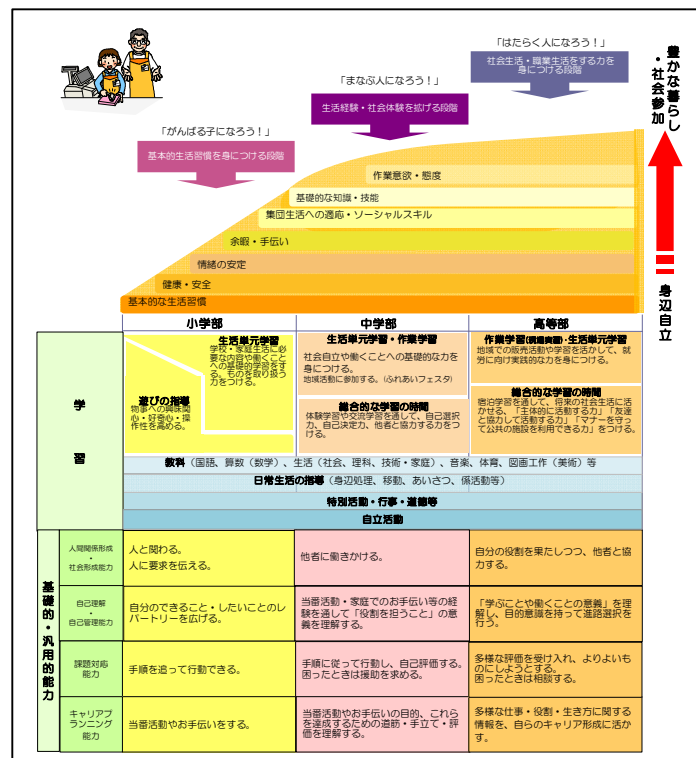


図1 キャリア教育発達段階表

(2) 進路指導部としての取組

1 ～就労に向けて育成すべき児童生徒の力～

「はたらく人になろう!」というスローガンを具体的にチェックするため、「就労に向けて育成すべき児童生徒の力」を作成した。これは小学部1年から高等部3年までの12年間にわたり、児童生徒の社会で働くために必要な力を確認するための評価表である。小学部では「体力」「あい

項目	5段階評価											
	小学部			中学部			高等部			計		
	小1	小2	小3	中1	中2	中3	高1	高2	高3	平均	偏差値	備考
体力												
仕事をこなす忍耐力												
あいさつ												
わからないと言えない												
素直にやまることが出来る												
危険なことを認知できる												
時間を守る												
持ち場を離れない												
対人関係スキル												
就労後の生活のイメージ												

できる」「危険なことを認知できる」の4項目を5段階で評価する。中学部では、小学部で評価した4項目に3項目「わからないと言える力」「時間を守る」「対人関係スキル」を加え、7項目を評価。さらに高等部では「仕事に対する忍耐力」「持ち場を離れない」「就労後の保護者の協力体制」の3項目を加え10項目を評価している。評価実施者が変わっても同じ評価結果になるように、評価基準を設けた。

(3) 進路指導部としての取組 2 ～清掃検定～

愛媛大学教育学部附属特別支援学校が平成23年に出版した『将来の「働く生活」を実現する教育』に「着替え」の手順書が掲載されており、小学部からポイントを押さえた学びを継続することで、確実に力をつけることができることが示されていた。そこで本校では、企業・作業所の行き先に関わらず、どこにいても必要な「清掃」の手順書を作成したいと考えた。学校全体で統一した「清掃」の手順書を作ることで、小・中・高一貫した指導ができることと、教員が同じ視点で指導し続けることができれば、重度の生徒でも高等部卒業時には清掃する力を身につけることができるからである。さらに、校内検定を実施し得点化し表彰すれば、児童生徒のモチベーションも上がるのではと考えた。

児童生徒対象の清掃検定を行うためには、まず、教員の清掃に対する共通認識が必要であると考え、清掃会社の方から学ぶ研修会を開催した。プロの方から学ぶ清掃は、「ほうきの持ち方」「ほうきの動かし方」からまったく違っており、驚くことばかりであったが、すべて理にかなった清掃方法であった。(この清掃研修は、教室とトイレの2種類を、平成24年度から毎年、夏季休業中を利

就労に向けて育成すべき児童生徒の力 評価基準					
	A	B	C	D	E
体力	運動まで意欲的に、ペースを落とさず先導する。	持久力があるが、長時間は走り回ることができない。	明確な声かけで走れる。	声かけが促される。	声かけがなくても走れない。
日々の仕事をやり続けるための体力	声かけがなくても続けられる。	声かけがなくても続けられる。	声かけがなくても続けられる。	声かけがなくても続けられる。	声かけがなくても続けられない。
仕事をこなす忍耐力	声かけがなくても続けられる。	声かけがなくても続けられる。	声かけがなくても続けられる。	声かけがなくても続けられる。	声かけがなくても続けられない。
自分の仕事や役割を説明できる力	自分の仕事や役割を説明できる。	自分の仕事や役割を説明できる。	自分の仕事や役割を説明できる。	自分の仕事や役割を説明できる。	自分の仕事や役割を説明できない。
あいさつ	挨拶ができて、声かけがなくても続けられる。	挨拶ができて、声かけがなくても続けられる。	挨拶ができて、声かけがなくても続けられる。	挨拶ができて、声かけがなくても続けられる。	挨拶ができて、声かけがなくても続けられない。
自分の表情がコミュニケーションのしるし	自分の表情がコミュニケーションのしるし。	自分の表情がコミュニケーションのしるし。	自分の表情がコミュニケーションのしるし。	自分の表情がコミュニケーションのしるし。	自分の表情がコミュニケーションのしるしにならない。
わからないと言える力	わからないと言える。	わからないと言える。	わからないと言える。	わからないと言える。	わからないと言える。
自分の仕事でわからない、できないことを伝える力	自分の仕事でわからない、できないことを伝える。	自分の仕事でわからない、できないことを伝える。	自分の仕事でわからない、できないことを伝える。	自分の仕事でわからない、できないことを伝える。	自分の仕事でわからない、できないことを伝える。
素直にあやまることができる	素直にあやまることができる。	素直にあやまることができる。	素直にあやまることができる。	素直にあやまることができる。	素直にあやまることができる。
自分の仕事での失敗を素直に認める力	自分の仕事での失敗を素直に認める。	自分の仕事での失敗を素直に認める。	自分の仕事での失敗を素直に認める。	自分の仕事での失敗を素直に認める。	自分の仕事での失敗を素直に認める。
危険なことを認知できる	危険なことを認知できる。	危険なことを認知できる。	危険なことを認知できる。	危険なことを認知できる。	危険なことを認知できない。
時間を守る	時間を守る。	時間を守る。	時間を守る。	時間を守る。	時間を守る。
自分の仕事への説明 指示行動 中・高	自分の仕事への説明 指示行動 中・高	自分の仕事への説明 指示行動 中・高	自分の仕事への説明 指示行動 中・高	自分の仕事への説明 指示行動 中・高	自分の仕事への説明 指示行動 中・高
持ち場を離れない	持ち場を離れない。	持ち場を離れない。	持ち場を離れない。	持ち場を離れない。	持ち場を離れない。
対人関係スキル	対人関係スキル。	対人関係スキル。	対人関係スキル。	対人関係スキル。	対人関係スキル。
就労後の保護者の協力体制	就労後の保護者の協力体制。	就労後の保護者の協力体制。	就労後の保護者の協力体制。	就労後の保護者の協力体制。	就労後の保護者の協力体制。

表2 就労に向けて育成すべき児童生徒の力 評価基準

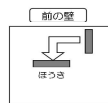
【2 教室清掃】

1 教室の右側前方より、奥へ掃き掃除

上側の手の親指で、ほうきの柄の先端を押さえる。(柄の動きのコントロールのため)
ほうきの毛先を床からはなさないよう、軽く押さえるようにして掃く。(押さえ掃き)



<壁際を掃くとき>
ほうきを平行に動かした後、壁に対して直角になるように回転させる。
壁にほうきが当たらないように！(壁をつけない！)
毛先にゴミやほこりがついたら、毛先部分を床を軽くトントンと叩いて落とす。



<後方から前方へ>
ほうきは身体の前を平行に動かして進む。
(壁に対して直角)



2 ゴミを回収 1カ所にゴミを集め回収。



ほうきの毛先の前半分をちりとりの中に入れておいてゴミをとる。
(毛先全体をちりとりにつけるとゴミが両脇からこぼれてしまう)

教師用手順書



清掃研修の様子

用して新転任者向けに実施続けている。)

次に清掃検定項目、手順書、評価基準等を2年かけて作成した。

清掃検定の種目は、障害の重い生徒でもステップアップが感じることができる種目ということで、①拭きそうじ(机拭きも含む)、②雑巾洗い、③自在ぼうきの3種類、特に②雑巾洗いは、初級編、中級編1(雑巾を広げて洗う)、中級編2(雑巾を持ち上げたまま洗う)の3段階用意した。

手順書等の見直しは随時行っている。まず、平成27年度の見直しでは、小学部の検定表「点数制＝級」をなくし、個人個人が到達したラインと次の課題がわかるような検定表に変更した。また、中学部・高等部の検定表でも「できない＝0点」のマイナスになる項目は削除、生徒自身が「次はこれにチャレンジする」気持ちになるように変更した。

また目的も見直し、拭き掃除が難しい児童生徒について考慮し、自分自身や身近な場所を「拭いてきれいにしたら気持ちがいい」「役に立った」と感じられるような取り組みを目的とすることを追加した。

進路指導部

清掃検定実施の手引き

清掃検定するに当たり、年度当初からそれに合わせた手順で指導していただきたいと思います。
また、清掃検定開始当初より、学年や担任が変わることによって指導の手順や方法が変わり、児童生徒が混乱することのないように、基本的な様子は統一していただきたいと思いますので、ご協力をお願いします。

拭きそうじ	拭きそうじの場所(机、白板、かがみ、床、廊下など)、使う道具の種類(おせん、タオル、雑巾、雑巾モップなど)、取り組む範囲は、児童生徒の実態に合わせて担任が決めてください。児童生徒の実態に合った条件で、「拭きはじめの位置に道具を置く」「拭き終わる」「拭きできる」「拭いていない場所の汚れを拭く」という観点で行ってほしいと考えています。上記の拭きそうじが難しい児童生徒については、自分自身や身近な場所を「拭いてきれいにして気持ちがいい」「役に立った」と感じられるような取り組みを担任の先生で相談して決めてください。
雑巾洗い	<p>雑巾洗いは、要はやり方として2種類の洗いを提案しています。</p> <p>① 二すずり洗い もみ洗いが難しい児童生徒については、流水の下で雑巾を二すずりにする(さすずり)洗い方(二すずり洗いとも言っています)をしてください。 流水の下で行うと、思った以上にきれいになります。 むしろ、もみ洗いよりきれいになるかもしれません。 絞るとは、できるだけ固くなるように持つよう意識させてください。 そのために、雑巾を横に二つ折りし、さらに縦に二つ折りにすると、持ちやすく扱いやすい形になります。</p> <p>② もみ洗い 軽度の生徒でも、しっかり洗わず済ますだけになっていることが多いです。もみ洗いをすると、洗った面が乾かすから、全体をしっかりと洗うことが必要です。 ゴミが雑巾の中に入ってしまったままになっていることも多いので、この洗い方の順番、かなり注意が必要となります。</p>

清掃検定実施の手引き

検定項目		雑巾洗いA																												
検定日	年 月 日	東はりま特別支援学校 学部 年 組 名前																												
検定の観点		評 価 (当てはまるところに○を記入)																												
		約8割～9割に	声かけて	指差して	目印等を使って	手順書を見て	自分で																							
	1点	2点	3点	4点	5点	6点																								
1	雑巾を持つ (自分で取りに行った雑巾でも、渡された雑巾でもOK)																													
2	水道の蛇口をひねり、水を出す (適量でなくてもOK)																													
3	蛇口の下に雑巾を持っていく																													
4	雑巾を広げて流し台に置き、流水をあてる																													
5	手で雑巾の表面をこする																													
6	雑巾を裏返して裏面をこする																													
7	汚れが落ちてくる(ある程度でOK)																													
8	水道の蛇口をしめ、水を止める (止め方がなくてもOK)																													
9	雑巾を2つに折って持つ																													
10	雑巾をしぼる程度しぼってOK																													
コメント		<table border="1"> <tr> <td>10級</td> <td>～10点</td> <td>5級</td> <td>31点～35点</td> <td rowspan="5">合計得点</td> <td rowspan="5">点</td> <td rowspan="5">級</td> </tr> <tr> <td>9級</td> <td>11点～15点</td> <td>4級</td> <td>36点～45点</td> </tr> <tr> <td>8級</td> <td>16点～20点</td> <td>3級</td> <td>46点～52点</td> </tr> <tr> <td>7級</td> <td>21点～25点</td> <td>2級</td> <td>53点～59点</td> </tr> <tr> <td>6級</td> <td>26点～30点</td> <td>1級</td> <td>60点</td> </tr> </table>						10級	～10点	5級	31点～35点	合計得点	点	級	9級	11点～15点	4級	36点～45点	8級	16点～20点	3級	46点～52点	7級	21点～25点	2級	53点～59点	6級	26点～30点	1級	60点
10級	～10点	5級	31点～35点	合計得点	点	級																								
9級	11点～15点	4級	36点～45点																											
8級	16点～20点	3級	46点～52点																											
7級	21点～25点	2級	53点～59点																											
6級	26点～30点	1級	60点																											

※声かけとは、全検への指示ではなく、個人への声かけのことです

😊 は、検定10項目以外に自分で取り組んでいることを担任で記入して評価してください。

検定用紙 雑巾洗いA

さらに 10 項目の検
定項目以外に、児童生
徒に合った独自の取
り組みを記載する欄
を設けた。これは既存
の検定項目では、障害
が重い児童生徒の点
数が低く出てしまう
ので、各担任が行っ
ている独自の取組み
を検定項目として取
り上げ評価すれば、励
みになり自信が付き、
掃除を楽しみと思え、
意欲的に取り組める
ことを狙っている。

平成 28 年度の反省で、「高等部の生徒用に、より高度な技術や作業態度がはか
れるようにするにはどうするか」という課題が出て、検討を重ねた。その結果、
平成 29 年度より本格実施になった兵庫県の取り組み 特別支援学校技能検定のビ
ルクリーニング部門の検定項目「ダスタークロス（乾式モップ）」と「テーブル拭
き」の 2 種類を本校の清掃検定にも導入し、今年度より実施している。この 2 種
類は技能検定に準ずる評価項目にし、技能検定の取り掛かりに利用することも併
せて考え実施することにした。いざ実施してみると、「評価項目の文言や表記が分
かりづらい」「手順書をもっと生徒が見て分かりやすいものに！」とたくさんの意
見がでてきており、さっそく改善に向けて取り組んでいる。

また、ダスタークロスは、自在ぼうきでの掃きそうじや雑巾での拭きそうじに
取り組みにくい障害の重い児童生徒も扱いやすい掃除道具なので、従来の検定項
目「拭きそうじ」をダスタークロスで行うことができる利点があることがわかっ
た。より多くの児童生徒が清掃検定に積極的に取り組めるようになるのではない
かと期待している。

3 成果

清掃検定は、1 月から 3 月の間に、小学部から高等部の生徒全員が 1 種目以上を
受検し、修了式で表彰状を授与している。教師が同じ視点で指導することで、学
びが定着しており、地域の施設・作業所の方から「東はりまの生徒は清掃が上手」
との声をいただいている。清掃検定の目標、評価項目、評価基準の見直しを今後
もはかりながら、児童生徒の力を伸ばしたいと考えている。

検定項目		ダスタークロス（机等を出した教室をダスタークロスで掃除する）					
検定日		年 月 日		東はりま特別支援学校		学部 年 組 名前	
検定の観点		評 価（当てはまるところに○を記入）					
		検定と一基に できた	白粉等の気配を 受けてできた	手順書を指ながら できた	少し間違っても やり直してできた	間違いに気付いて やり直した	最後まで正確に できた
		1点	2点	3点	4点	5点	6点
1	柄の高さを自分のあごあたりになるように調節する。						
2	①ヘッドのピンチを上げてクロスを装着する。 ②ヘッドを柄に取り付ける。（柄が人にあたらないよう注意す）						
3	ヘッドを壁に当てないように壁際を 1 周掃除する。						
4	フローリングの目にそってまっすぐ拭く。 ※ふいたところを歩く。						
5	向きを変えるときは、回転したい方向のヘッドの柄を 軸にして向きを変える。※ごみを落とさないため						
6	向きを変えて拭いていない所を戻ってくる。 隅の列を拭く・前に拭いた部分 1/4 くらいを重ねて拭く						
7	連続して面から面まで拭き掃除をする。 （決められた回数、柄ははたきで拭くのも連続とみなす）						
8	ゴミを落とさないようにクロスをはすす。 ※ピンチのひき止めている部分を下に戻す。						
9	ほうきとちりとって、ゴミを払い上げないように集めてとる。						
							
コメント		10点 9点 8点 7点 6点	～10点 10点～15点 16点～20点 21点～25点 26点～30点	5点 4点 3点 2点 1点	31点～35点 36点～41点 42点～47点 48点～53点 54点～	合計得点	級
						点	級

 は、検定10項目以外に独自で取り組んでいることを担任で記入して評価してください。

新検定用紙 ダスタークロス